熊本県玉名郡玉東町文化財調査報告　第2集

稲佐城跡

一九八九年

熊本県玉名郡玉東町教育委員会

熊本県玉名郡玉東町文化財調査報告　第２集

稲佐城跡

１９８９年

熊本県玉名郡玉東町教育委員会

序　　文

玉東町教育委員会では、文化庁の補助金を受けて，昭和62・63年度に亙って玉東町大字稲佐字城に所在する「稲佐城」跡の発掘調査を実施しました。

「稲佐城」は南北朝時代、九州最大の戦闘であった筑後川の戦（大保原の戦）に南朝方として参加したと伝えられる稲佐治部大輔の居城と考えられている城でありまして、この伝承のとおりであることが確認されますと、類例が少ない南北朝時代の城に一例を加えることになるわけで重要な遺跡ということになります。

折しも、新幹線の予定線が稲佐を通過する模様で、住宅の移転が行なわれるといたしますと、「稲佐城」の周辺は恰好の候補地で、現に一部には新しく建築が進んでいます。この際、遺跡の時代、遺構の残存度、遺跡の範囲を調査して、将来に悔いを遺さず、混乱を未然に防止するため、文化財保護事業の一環として発掘調査ならびに関連調査を実施いたしました。とくに関連調査では文書など一等史料を欠くため、広範囲にわたって可能性を追求したので、大部になってしまいました。

調査の結果は、南北朝時代のかなりよく遺った遺跡で、伝承のとおり稲佐治部大輔の居城「稲佐城」と考えてよいということでありますし、当時の諸情勢も随分明らかとなりました。

発掘調査にあたりましては、熊本県教育庁文化課の大田幸博文化財保護主事や永田満氏、地主、区長をはじめ地元の方々、関連調査につきましては、調査・執筆をいただきました日本考古学協会員田辺哲夫、熊本大学教授北野　隆、熊本県文化課文化財保護主事前川清一、熊本市立高校教諭柳田快明、熊本県立美術館学芸員大倉隆二、玉東町文化財保護委員会会長坂田幸之助の諸氏にご協力を賜りました。ここに心からお礼を申し上げます。

平成元年１月20日

玉東町教育委員会　教育長　井　上　義　秋

例　　言

1．本書は、熊本県玉名郡玉東町教育委員会が昭和62年度，63年度に文化庁の補助事業として実施した発掘調査の調査報告書である。

2．発掘調査を実施した遺跡は、熊本県玉名郡玉東町大字稲佐字城に所在する中世城跡「稲佐城跡」である。

3．出土資料は玉東町教育委員会で保管している。

4．現地調査は、田辺哲夫氏の指導のもとに永田　満氏がその任にあたり、大田幸博・黒田裕司・菖蒲和弘・松舟博満氏の協力を得た。

5．遺物の実測は大田氏が担当し、岩崎充宏・吉内素子・網田龍生・山下志保氏（昭和62年度　熊本大学文学部考古学研究室）の協力を得た。遺構及び遺物の製図は石工みゆき氏が行った。

6．本書の執筆者は文末に記した。

7．付論として、稲佐城跡専門調査委員の北野　隆・坂田幸之助・柳田快明・大倉隆二・前川清一・田辺哲夫の各氏から玉稿をいただいた。

8．発掘調査過程の写真撮影は永田氏が行った。整理後の出土遺物の撮影は白石巌氏が行った。

9．題字は田辺哲夫氏による。

10．本書の編集は大田氏が行い、溝口真由美・菖蒲氏の協力を得た。

本文目次

第Ⅰ章　調査の概要……1
第1節　調査の組織……1
第2節　調査に至る経緯……1
第3節　調査の工程……2

第Ⅱ章　遺跡の概要……3
第1節　城跡の比定地について……3
第2節　城跡地について……3
第3節　遺跡の位置……5

第Ⅲ章　調査の成果……9
第1節　調査の概要……9
第2節　調査区の基本層位……9
第3節　Ⅰ区の調査結果……12
第4節　Ⅱ区の調査結果……16
第5節　Ⅲ区の調査結果……21
第6節　Ⅳ区の調査結果……21
第7節　トレンチの調査結果……24
第8節　小　　結……31

第Ⅳ章　出土遺物……33

第Ⅴ章　総　　括……40

付論1　建築物の性格……北野　隆……44
付論2　稲佐治部大輔と稲佐城の伝承……田辺　哲夫……47
付論3　稲佐城の館「陣内」……田辺　哲夫……50
付論4　稲佐廃寺・熊野座神社……田辺　哲夫……52
付論5　中世城と考えられる諸地点……坂田幸之助……58
付論6　文献による諸情勢……柳田　快明……65
付論7　稲佐熊野座神社の女神像……大倉　隆二……68
付論8　稲佐の石造物について……前川　清一……70

図版目次

第１図　稲佐城跡位置図……4
第２図　稲佐城跡周辺地形図……5
第３図　稲佐地区の字図と地形図……6
第４図　稲佐城跡調査区全体遺構図……7
第５図　稲佐城跡遺構実測図……10
第６図　Ⅰ区東西土層断面図……11
第７図　Ⅱ区東西土層断面図……11
第８図　Ⅲ区南北土層断面図……11
第９図　Ⅰ区遺構実測図……12
第10図　ＳＢⅠ－０１実測図……14
第11図　ＳＢⅠ－０２実測図……14
第12図　ＳＢⅠ－０３実測図……15
第13図　ＳＸ－０１実測図……15
第14図　Ⅱ区遺構実測図……16
第15図　溝状遺構実測図……16
第16図　ＳＢⅡ－０１実測図……17
第17図　ＳＢⅡ－０２実測図……17
第18図　ＳＢⅡ－０３実測図……17
第19図　ＳＢⅡ－０４実測図……17
第20図　ＳＢⅡ－０５実測図……17
第21図　ＳＢⅡ－０６実測図……17
第22図　Ⅲ区・Ⅳ区遺構実測図……21
第23図　ＳＢⅣ－０１実測図……23
第24図　ＳＢⅣ－０２実測図……23
第25図　ＳＢⅣ－０３実測図……24
第26図　トレンチ配置図……24
第27図　１トレンチ西壁土層断面図……25
第28図　２トレンチ北壁土層断面図……25
第29図　３トレンチ北壁土層断面図……26
第30図　４トレンチ実測図及び土層断面図26
第31図　５トレンチ実測図及び土層断面図28
第32図　６トレンチ実測図及び土層断面図29
第33図　７トレンチ北壁土層断面図……30
第34図　８トレンチ北壁土層断面図……30
第35図　９トレンチ北壁土層断面図……30
第36図　出土遺物実測図……34
第37図　出土遺物実測図……35
第38図　出土遺物実測図……37

表目次

第１表　Ⅰ区検出の建築址計測表……13
第２表　Ⅱ区検出の建築址計測表……20
第３表　Ⅳ区検出の建築址計測表……22
第４表　出土遺物観察表……36
第５表　出土遺物観察表……38
第６表　出土遺物観察表……39

写真図版目次

図版１　稲佐城跡航空写真(1)・(2)
図版２　１トレンチ　５トレンチ
図版３　Ⅱ区建築址　Ⅱ区及びⅢ区遺構
図版４　Ⅲ区調査風景　Ⅳ区遺構
図版５　Ⅳ区建築址
図版６　出土遺物
図版７　出土遺物

付論図版目次

第１図　稲佐城跡とその麓集落復元図……45
第２図　稲佐城跡と古道復元図……46
第３図　稲佐廃寺出土瓦と心礎……54
第４図　稲佐熊野座神社の女神像……69
第５図　笠塔婆実測図……74
第６図　笠塔婆拓本図……74
第７図　五輪塔実測図……75
第８図　享禄四年板碑実測図……75
第９図　阿弥陀石像拓本図……75
第10図　「ガランさん」板碑実測図……75
第11図　寺山の宝塔拓本図……76
第12図　寺山宝塔塔身……76
第13図　植木町円台寺正嘉元年宝塔塔身…76
第14図　寺山石碑（享禄４年）……77
第15図　阿弥陀石像……77
第16図　寺山宝塔図……77
第17図　ガランさん板碑（康永２年）……80

第Ⅰ章　調査の概要

第1節　調査の組織

調査主体	玉東町教育委員会
調査責任者	井上義秋（玉東町教育長）
調査総括	田辺哲夫（日本考古学協会員）
調査・報告書担当	永田　満・大田幸博・菖蒲和弘・松舟博満 石工みゆき・溝口真由美 黒田裕司
専門調査員	北野　隆（熊本大学教授）　坂田幸之助（玉東町文化財保護委員会会長） 柳田快明（熊本市立高校教諭）　大倉隆二（熊本県立美術館学芸員） 前川清一（前：熊本県立荒尾高校教諭）
協力者	坂本繁行・井上正次・井上克之（土地所有者）中尾勝弘
調査事務局	玉東町教育委員会　社会教育課 昭和62年度：松下隆男（社会教育課長）小柳俊介（課長補佐） 山野誠也（主事） 昭和63年度：小柳俊介（社会教育課長）山野誠也（課長補佐）
発掘作業員	田中丈一・児玉一人・児玉　一・高森国昭・児玉　泉・小畠耕作・小畠栄作 高森佐和子・児玉ちえ子・児玉静代・児玉富枝・中尾信子・中尾千恵子 小柳和子
測量・実測補助員	網田龍生（現：熊本市教育委員会文化課）
雑木伐採作業員	小島　明・木本六男・木本ナツ子・木代成静利・吉本吉房
遺物整理員	笠間いつ子・迫田洋子・尾方信子

第2節　調査に至る経緯

昭和60年に始まった玉東町史編纂事業で、同年11月、現地踏査を町の西端、大字稲佐から始めた。その際、小字名「城（じょう）」が山裾の台地にあり、中世の城であると考えられることを知った。しかし、南北朝時代に南朝方として、大保原の戦（筑後川の戦）で活躍した稲佐治部大輔の城は、南にある稲佐熊野座神社の西隣とも伝えられている。どちらが南北朝時代の城なのであろうか、あるいは戦国時代の城もあり得るのではないかと、考えをめぐらしていた矢先、この辺一帯が開発の危機に直面していることを聞いた。

それは、新幹線のルートがこの稲佐の南端を通ること、その際の立ち退き家屋の移転先とし

て稲佐城付近の台地や西斜面の畑が候補地になっているというのである。現に、新築の家が建ち始めていた。それならば、とりあえず稲佐城の範囲を確定しておかなければ、遺跡を保存できないということになり、熊本県文化課に相談したのであった。幸い、国の補助を受けることができるようになって、昭和61・62年度文化庁重要遺跡確認緊急調査として、発掘調査を行うことになったのである。　　（田辺　哲夫）

第3節　調査の工程

7月9日　試掘調査。城跡の中心域と見られる高台の上面、及び裾部一帯にかけて、計5ヶ所にグリッドを設定し、土層の堆積状態や遺構の残存状況を調べる。

7月23日～24日　本調査に入る。重機を導入して表土とⅡ層土を剝ぐ。調査対象区は高台の上面（Ⅰ～Ⅳ区）と段落ちの裾部で、裾部については、計9ヶ所にトレンチを設ける。

7月25日　Ⅱ区～Ⅳ区の精査を行い、遺構の検出を行う。

7月27日　調査区の一部において遺物取り上げ。擂鉢片の出土が目につく。

7月28日　Ⅳ区検出の柱穴に関し、掘り込み終了後、建築址の復元作業を行う。

7月29日　Ⅳ区土層断面の実測と写真撮影を行う。

8月1日　Ⅰ～Ⅱ区の柱穴を掘り込む。

8月3日　Ⅰ～Ⅱ区の土層断面の実測、及び写真撮影

8月4日　Ⅰ区における柱穴の掘り込み終了。Ⅰ～Ⅱ区間に溝状遺構を検出。

8月5日　Ⅱ区において柱穴の掘り込み続行。Ⅱ区の土層ベルトを取りはずす。

8月6日　Ⅰ区に遺形を設置し、柱穴の実測を行う。

8月7日　北野熊本大学工学部（建築学）教授に、現地で指導を受ける。

8月8日　午後2時頃から、激しい夕立に見舞われる。

8月9日　Ⅰ区の実測終了。Ⅱ区に遺形を設置。

8月10日　Ⅱ区における柱穴の実測を行う。

8月11日　Ⅱ区の実測終了。Ⅳ区に遺形を設置。

8月12日　Ⅳ区における柱穴の実測を行う。Ⅰ区の土層断面の実測、及び写真撮影。

8月13日　Ⅱ区とⅣ区において建築址の復元を行う。Ⅲ区の調査。
玉東町長・三加和町長の現地視察。

8月14日　Ⅲ区の土層断面の実測、及び写真撮影。

8月15日　1・2トレンチ調査。

8月17日　3・4・5トレンチ調査

8月18日　6・7・8トレンチ調査。

8月19日　9トレンチ調査。

8月20日　　地形測量、及び調査区の全体写真撮影。

8月21日　　調査区、及びトレンチごとの写真撮影。後に埋め戻し作業を行う。

8月22日　　重機を導入して埋め戻し。調査終了。　　（永田　　満）

第Ⅱ章　遺跡の概要

第1節　城跡の比定地について

『肥後国誌』には「稲佐・城跡二カ所アレトモ」という記事が見え、国誌では稲佐地区に2ヶ所の城跡が存在する事になる。『古城考』では城名のみの記載である。

同地区においては、城跡関連地名や伝承から、今回の調査地である字「城」のみが中世城跡として相応しい。一方、この地より南へ約400m延びる丘陵の端部には、古代寺院の稲佐廃寺（奈良～平安）があり、この地が昭和26年に発掘調査された折、寺院の礎石と伴に糸切りの土師器皿等の中世遺物が出土し、周辺の丘陵斜面が人工的に削り落とされている事などから、この地は中世において城に改変されたとの見方がなされ、『肥後国誌』の記事を裏付ける格好となっている。しかし、この古代寺院の「中世城」改変説については、当該地に確たる伝承や城跡関連地名がない事から、今後、さらに詳細な裏付け調査が必要と思われる。

第2節　城跡地について

（定　義）

大字「稲佐」の北東側山付きに、「城（じょう）」という字名を残す丘陵地の一隅があり、地元では古くからここを城跡地と伝えている。地内には、「城床（じょうどこ）」の小名が残る人工的な高台のほか、「城山（じょうやま）」と称される丘陵末端の張り出し部分があり、中世遺物の散布地でもある所から、文献にいう『稲佐城』の跡地と見なして差し支えないものと思われる。

（位置と現況）

城跡は木葉山（標高282m）の南西側裾部に位置しており、最高所の標高が50.5mの丘城である。昭和40年頃はみかん畑であったが、調査時は荒地で、一面に背の丈を越える夏草や竹が繁茂していた。

城跡の南南西方向に開ける集落には、一帯に「陣内」「馬場屋敷」「馬場東」などの字名が残っており、中世においては城跡の麓集落であったと思われる。集落は城跡地と同様に、中世遺物の散布地である。城跡と集落の比高差は約40m程である。

（城　域）

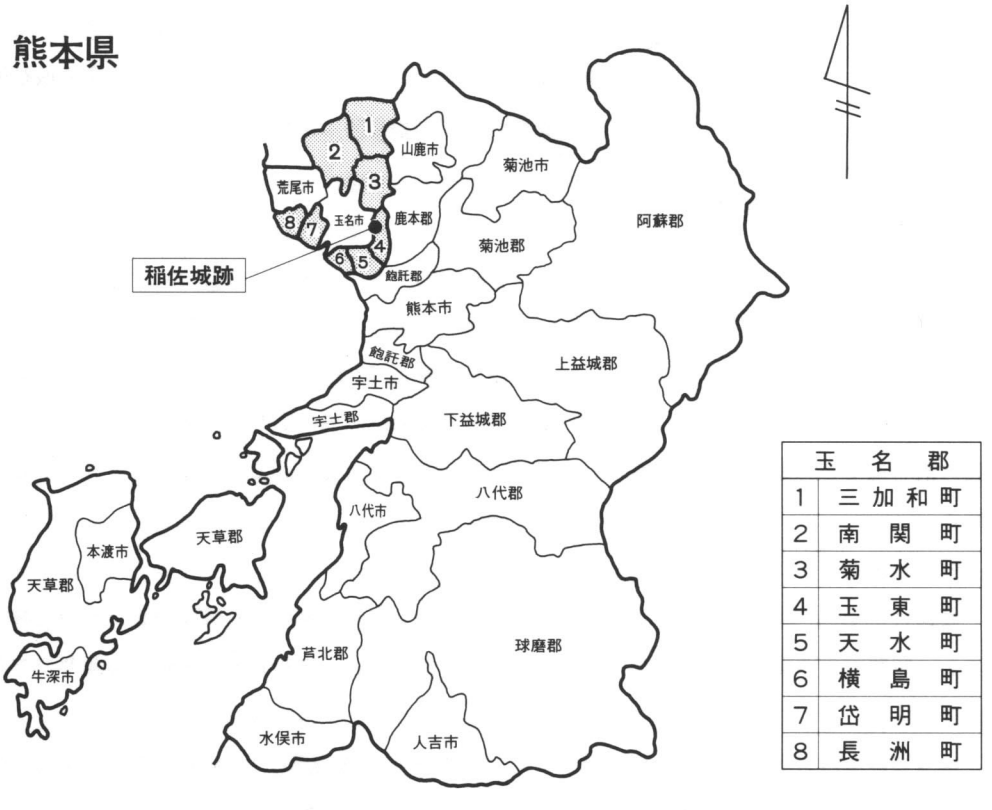
城跡の中心部は「城床」と考えられる。長径約65ｍ・短径５～15ｍで、主軸はＮ37°Ｅである。斜面部を削り落とされ、山付きの丘陵の背面に、あたかも前方後円墳を思わせるような、高さ1.5 ～２ｍの高台が形造られている。丘陵は、この城床を軸に南東側と南西側へ張り出しており、この部分に付いても、人工的な削平の跡がうかがわれる。南東側の張り出しには「城山」という小名が残っている。

丘陵の鞍部は北東側にあり、城跡の北限となる。城床の平坦な裾部が、帯曲輪の状態で木葉山の山腹と接する。山腹との接点に堀切等の遺構は観察されない。

一方で、丘陵の南側は、約10ｍ程の段落ちとなり、これより先は丘陵が膨張して、麓集落の東壁を形造り、長さ 400ｍの大丘陵支脈となる。この丘陵支脈との接点に、城床と同地形の高台区画があり、城跡の南限を構成するものと思われる。この箇所にも堀切は観察されない。

地形から広義的な城跡を概算すれば、南北約250ｍ、東西約100ｍの範囲と推察される。

（大田　幸博）



玉名郡	
1	三加和町
2	南関町
3	菊水町
4	玉東町
5	天水町
6	横島町
7	岱明町
8	長洲町

第１図　稲佐城跡位置図

第3節　遺跡の位置

稲佐城跡は、熊本県玉名郡玉東町大字稲佐字城に位置し、国土地理院発行の５万分の１の地形図『玉名』に位置を求むれば、図幅北から17.5㎝、東から25.1㎝の所にあり、調査区の最高所は標高50.5ｍを測る。

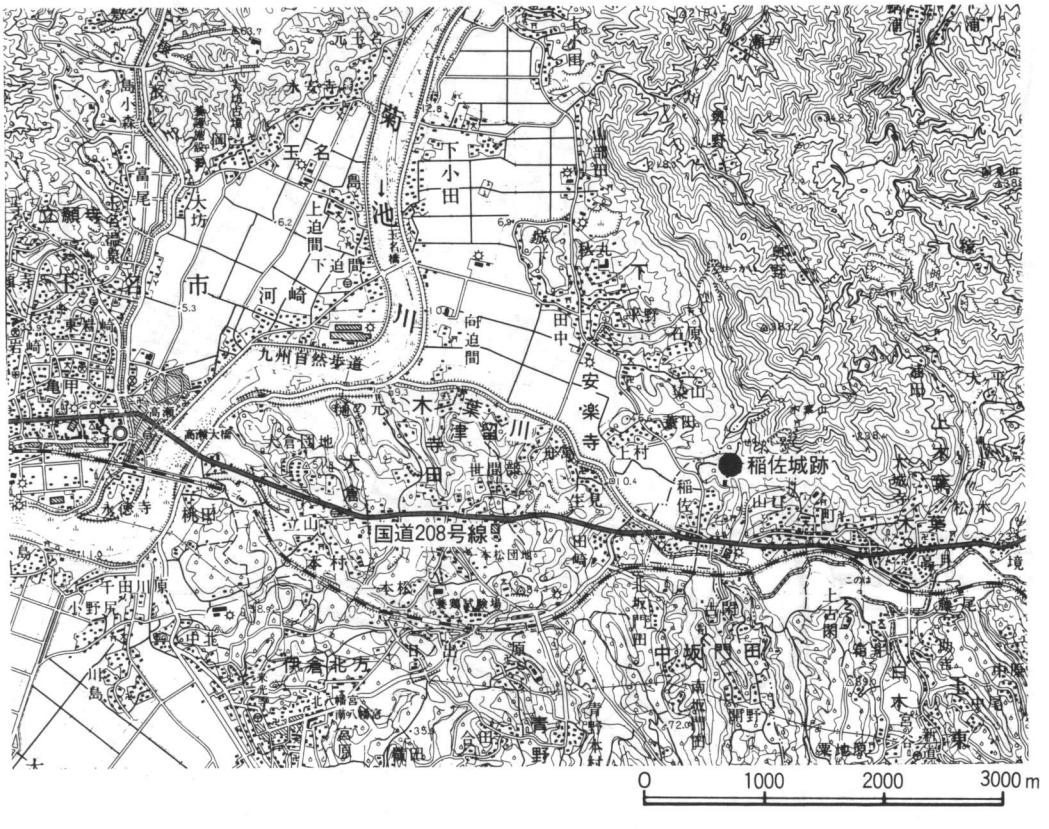
遺跡の所在する稲佐地区は、玉名市の安楽寺地区と接する所にあり、北東側一帯は、木葉山（標高282ｍ）を中心として、遠くは菊水町や鹿央町に裾部を伸ばす標高200～400ｍの山稜地が広がっており、南側は、金峰山山系の末端丘陵地（標高70～90ｍ）が東西方向に繋がりを見せている。

城跡麓の陣内をはじめとする周辺の集落は、この様に、北を山稜地に、南を丘陵地に挟まれた開折谷状の平地に開けたもので、標高10ｍ前後の低地にあり、縁を木葉川が東から西下する。

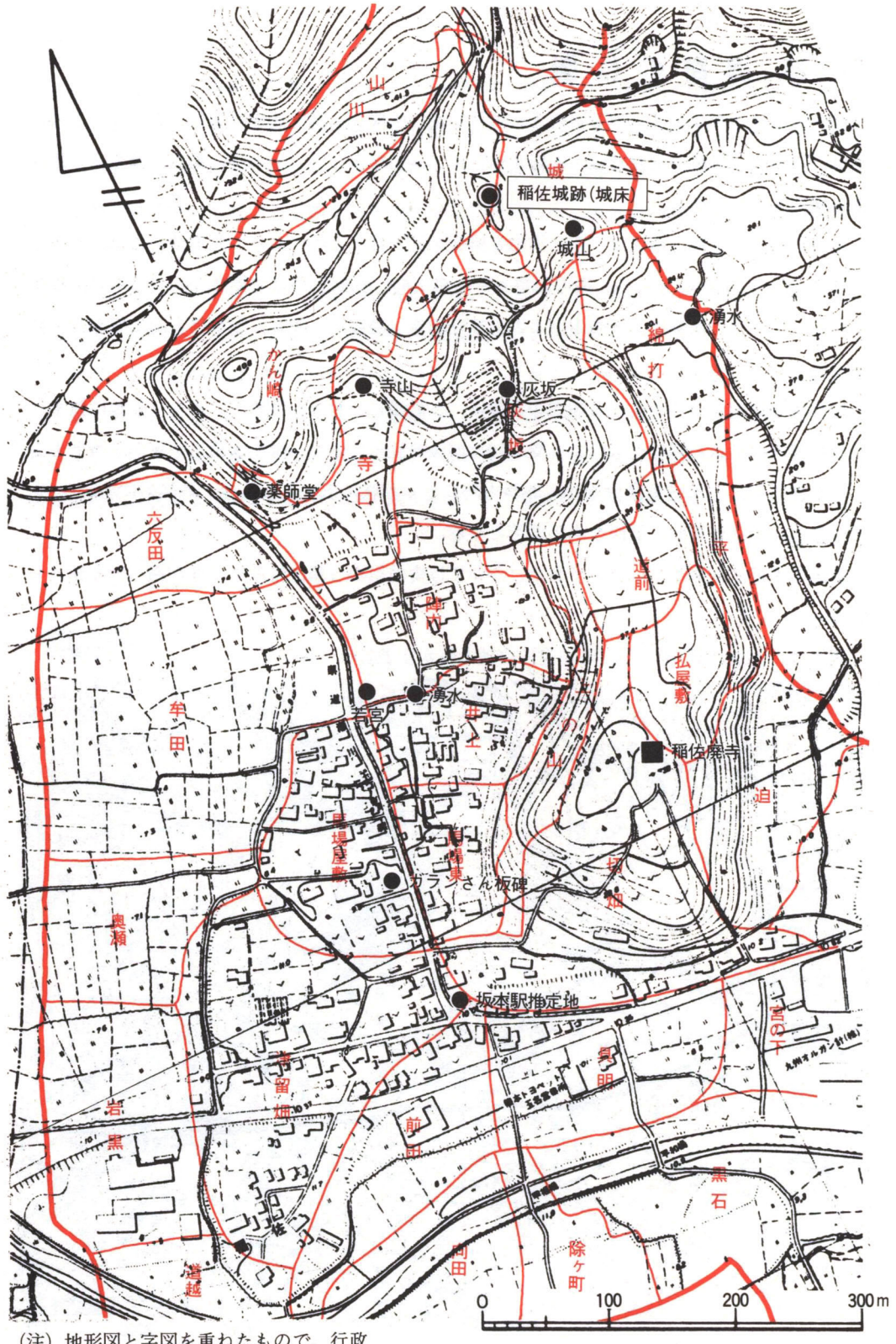
この開折谷は、陣内集落付近から北西方向にラッパ状に広がりを見せ、最終的に約2.7㎞先で菊池川の下流と接し、肥沃な水田地帯となる。

前出の木葉川も菊池川に注いでおり、かつては菊池川から稲佐付近まで舟が遡（さかのぼ）ったと伝えられる。

現在は、国道208号線（旧三池往還）が植木町から玉名市へ延びている。　（大田　幸博）

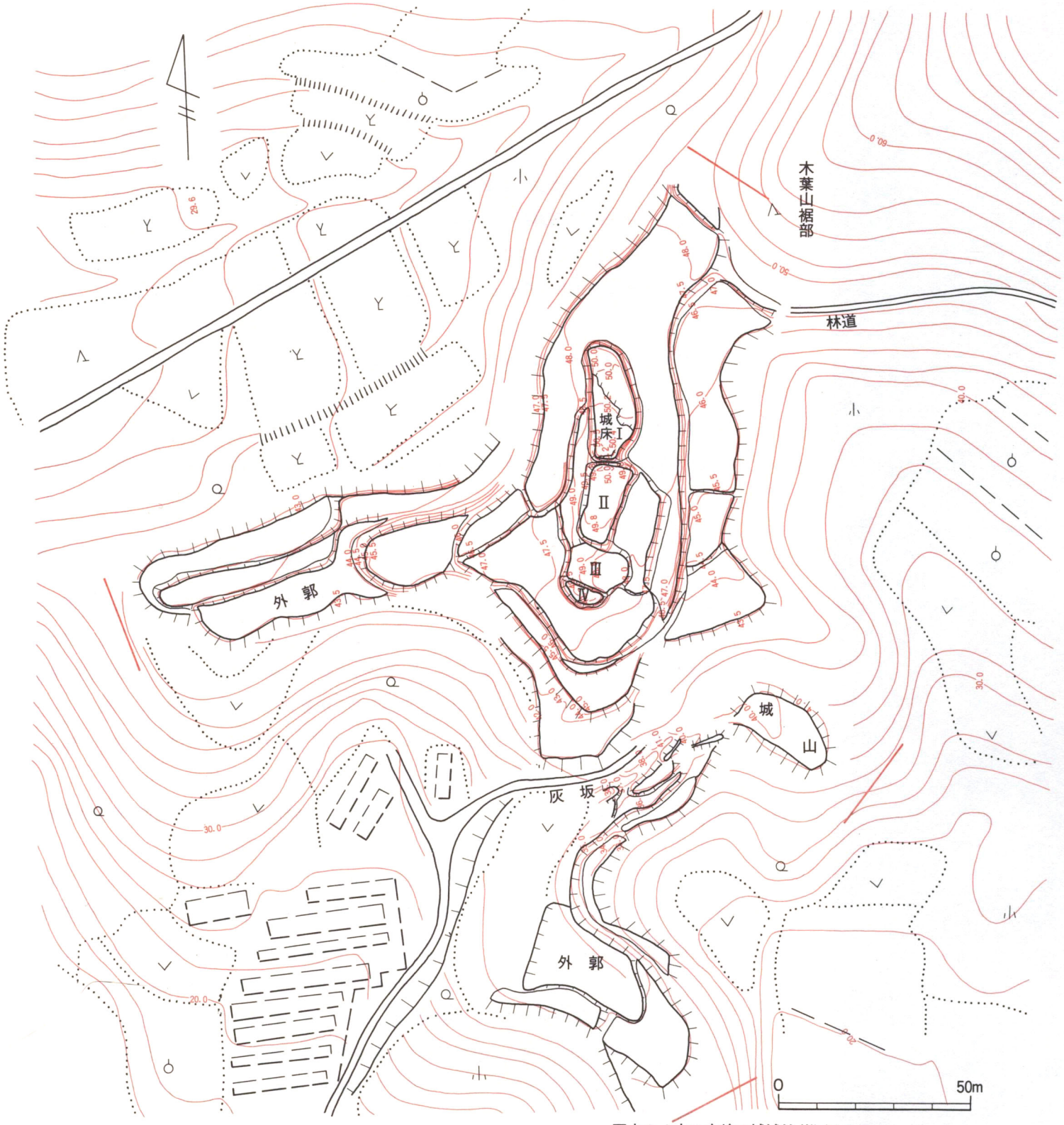


第２図　稲佐城跡周辺地形図



（注）地形図と字図を重ねたもので、行政境界等に若干の誤差を生じている。

第３図　稲佐地区の字図と地形図



図中の４本の直線は城域端（推定）を示す。

第４図　稲佐城跡調査区全体遺構図

第Ⅲ章　調 査 の 成 果

第1節　調 査 の 概 要

城床は、景観的に四区画から構成されているため、調査に際し、北から南へⅠ～Ⅳ区とした。調査の主旨が学術調査であり、調査期間も限られていた事から、試掘結果を踏まえて、調査の対象をⅠ～Ⅳ区の一帯に限り、高台の上面、その裾部の一部を掘削した。ちなみに、城域の総面積は、およそ1万5千㎡と推察される。発掘調査面積は、Ⅰ～Ⅳ区の合計が約520㎡で、裾部に設けた9ヶ所のトレンチが、全体で約150㎡であった。

調査の結果、Ⅰ～Ⅳ区からは12棟の掘立柱建築址と土坑1基が検出され、4・5・9のトレンチからは堀切の存在が明らかになった。

出土遺物には、青磁・白磁・瓦質の擂鉢・糸切りの土師器皿・中世雑器・砥石などがある。なお、城跡の表土からは、明治10年の西南戦争時に使用されたと思われる4発の小銃弾が出土した。

第2節　調査区の基本層位

(1)　調査区は堆積土が薄く、Ⅰ～Ⅲ層を剝ぐと、地山の凝灰岩と黄褐色粘土層が露出した。地山は起伏しており、凝灰岩の凹地に粘土層が堆積する格好となっていた。土壌の堆積状況から、城床の高台部分と裾部一帯は、廃城後のある時期に、一度、地山付近まで人為的に削平を受けたか、降雨等の気象状況により、大量の土砂が流出した事が考えられる。

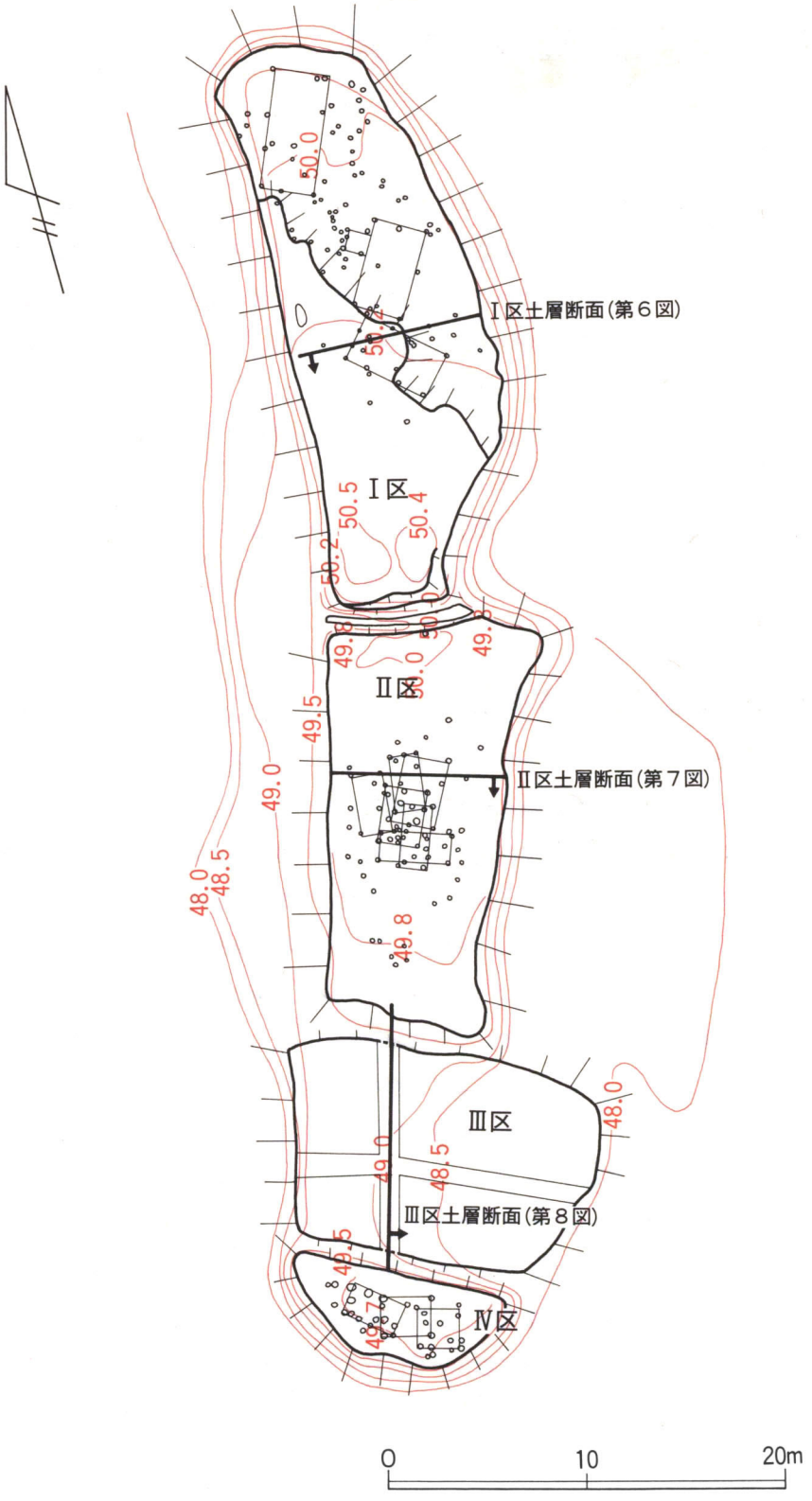
Ⅰ層土（表　　土）：　灰黒色土。厚さ5～10㎝で、草木根が混入する。特に、高台（城床）においては、厚さ3～5㎝程度で極めて薄い。

Ⅱ層土（旧耕作土）：　暗褐色土。厚さ10㎝程で、中世・近世・近代の陶磁片を含む土層である。耕作により、攪乱されている。

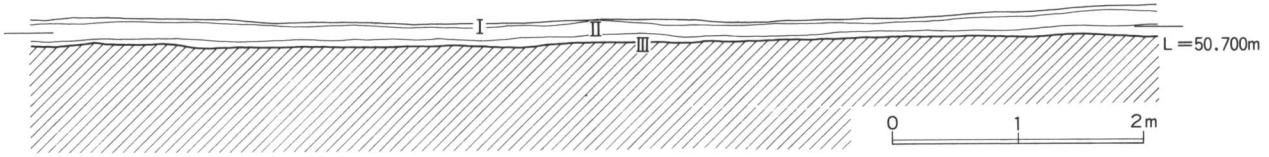
Ⅲ層土：　褐灰色土。部分的に存在する極めて薄い土層で、無遺物層である。

(2)　遺構はⅢ層土、及び地山を切り込んでいた。建築址の柱穴埋土は、Ⅲ層土の上位部分と思われ、これに地山の粘土を混入するものがあった。これより推察するに、中世面はⅢ層土と考えられ、後世、Ⅲ層土の攪乱されたものがⅡ層土に混入したものと考えられる。

(3)　丘陵地や山に築かれた城跡地では、大方、稲佐城跡のように堆積土が薄く、表土の下は直ぐ地山という例も多い。中世遺物の包含層を確認する事は極めて稀である。さらに地域においてミカン栽培が導入された所は遺構の破壊が著しい。



第５図　稲佐城跡遺構実測図

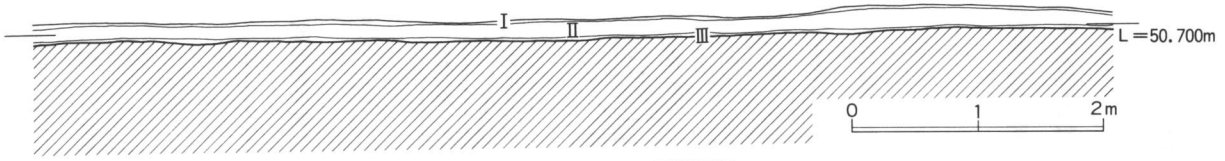


第６図　Ⅰ区東西土層断面図

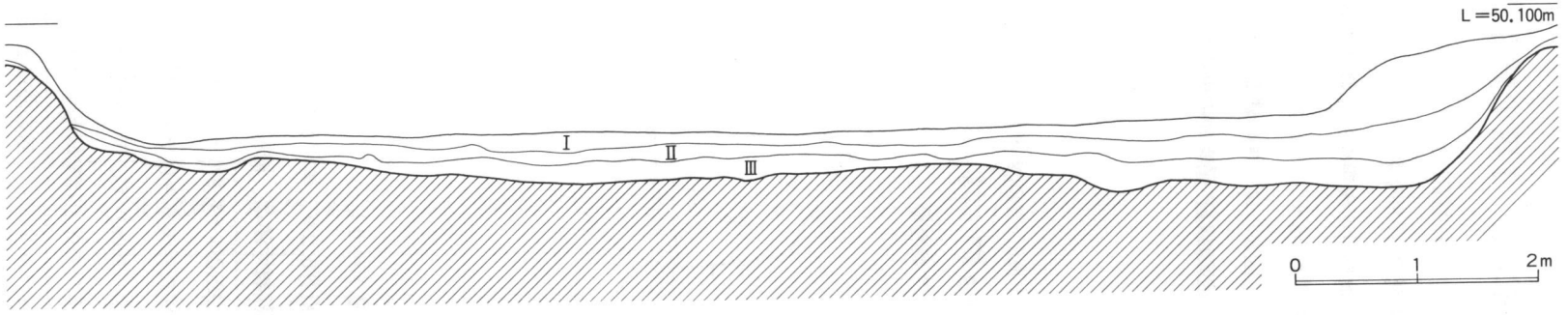
Ⅰ層：灰黒色土

Ⅱ層：暗褐色土

Ⅲ層：褐灰色土



第７図　Ⅱ区東西土層断面図



第８図　Ⅲ区南北土層断面図

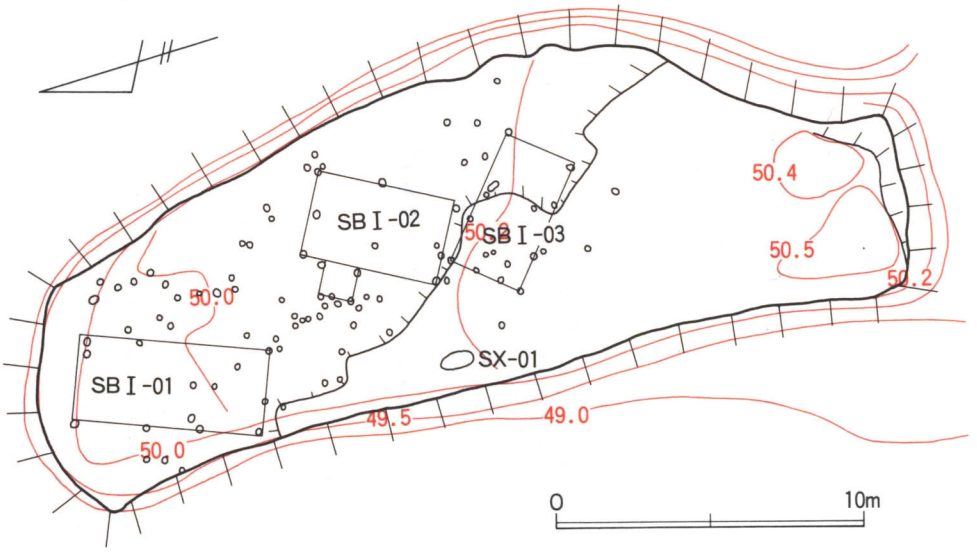
第３節　Ⅰ区の調査結果

Ⅰ区はほぼ南北方向に主軸の向きがあり、長軸28.5ｍ、短軸は北端で７ｍ、中央部で10ｍ、南端で5.5ｍを測る。

地形は、南側から北側への緩傾地で、両端では約0.5ｍの比高差があるが、上面は、ほぼ平坦である。

Ⅰ区からは３棟の建築址と１基の不明土坑が検出された。

建築址は、平場の中央より北側にかけて存在し、南側の平場は空白地帯となる。



第９図　Ⅰ区遺構実測図

ＳＢⅠ－01

桁行6.2ｍ、梁行妻2.8ｍの１間×３間の建物で、方位Ｎ20°Ｅである。

柱間寸法は、桁行Ｐ１～Ｐ３～Ｐ５～Ｐ７で2.0ｍ＋2.3ｍ＋1.9ｍ、Ｐ２～Ｐ４～Ｐ６～Ｐ８で2.0ｍ＋1.9ｍ＋2.3ｍ、梁行妻Ｐ１～Ｐ２で2.8ｍ、Ｐ７～Ｐ８で2.8ｍを測る。

柱穴の大きさはＰ４が最大（27×23㎝）で、Ｐ３が最小（17×14㎝）である。深さはＰ６が最深（36㎝）で、Ｐ１が最浅（15㎝）である。

柱穴の埋土は褐灰色土であり、Ｐ４・Ｐ６・Ｐ８には粘土の小塊が混入していた。

柱穴はすべて千鳥の並びとなる。

ＳＢＩ－０２

桁行4.5ｍ、梁行妻2.8ｍの２間×２間の建物で、方位Ｎ28°Ｅである。

柱間寸法は、桁行Ｐ９～Ｐ12～Ｐ17で2.5ｍ＋2.0ｍ、Ｐ11～Ｐ13～Ｐ15～Ｐ19で2.5ｍ＋1.1ｍ＋0.9ｍ、梁行妻Ｐ９～Ｐ10～Ｐ11で1.6ｍ＋1.2ｍ、Ｐ17～Ｐ18～Ｐ19で1.4ｍ＋1.4ｍを測る。なお、桁行Ｐ13～Ｐ19に西側へ正方形の張り出しが付く。柱間寸法は、1.1ｍである。

柱穴の大きさはＰ17が最大（23×20㎝）で、Ｐ11とＰ16が最小（17×15㎝）である。深さはＰ13とＰ17が最深（32㎝）で、Ｐ10とＰ11が最浅（20㎝）である。

柱穴の埋土は褐灰色土であり、Ｐ12・Ｐ15・Ｐ18・Ｐ19を除いて粘土の小塊が混入する。

柱穴はすべて千鳥の並びとなる。

ＳＢＩ－０３

桁行4.5ｍ、梁行妻2.4ｍの２間×３間の建物で、方位Ｎ48°Ｗである。

柱間寸法は、桁行Ｐ20～Ｐ22～Ｐ25で1.5ｍ＋3.0ｍ、Ｐ21～Ｐ23～Ｐ24～Ｐ28で1.5ｍ＋1.8ｍ＋1.2ｍ、梁行妻Ｐ20～Ｐ21で2.4ｍ、Ｐ25～Ｐ26～Ｐ27～Ｐ28で0.8ｍ＋0.9ｍ＋0.7ｍを測る。

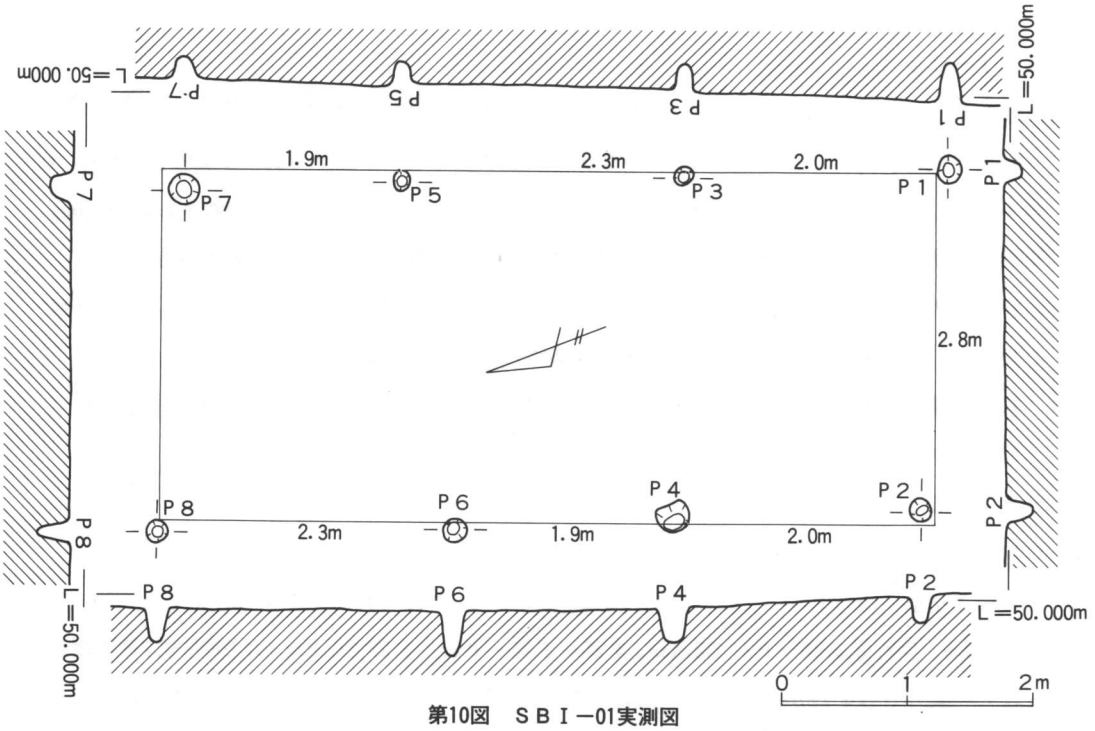
柱穴の大きさはＰ22が最大（44×27㎝）で、Ｐ28が最小（16×13㎝）である。深さはＰ23が最深（29㎝）で、Ｐ27が最浅（21㎝）である。

柱穴の埋土は褐灰色土で、すべてに粘土の小塊が混入する。

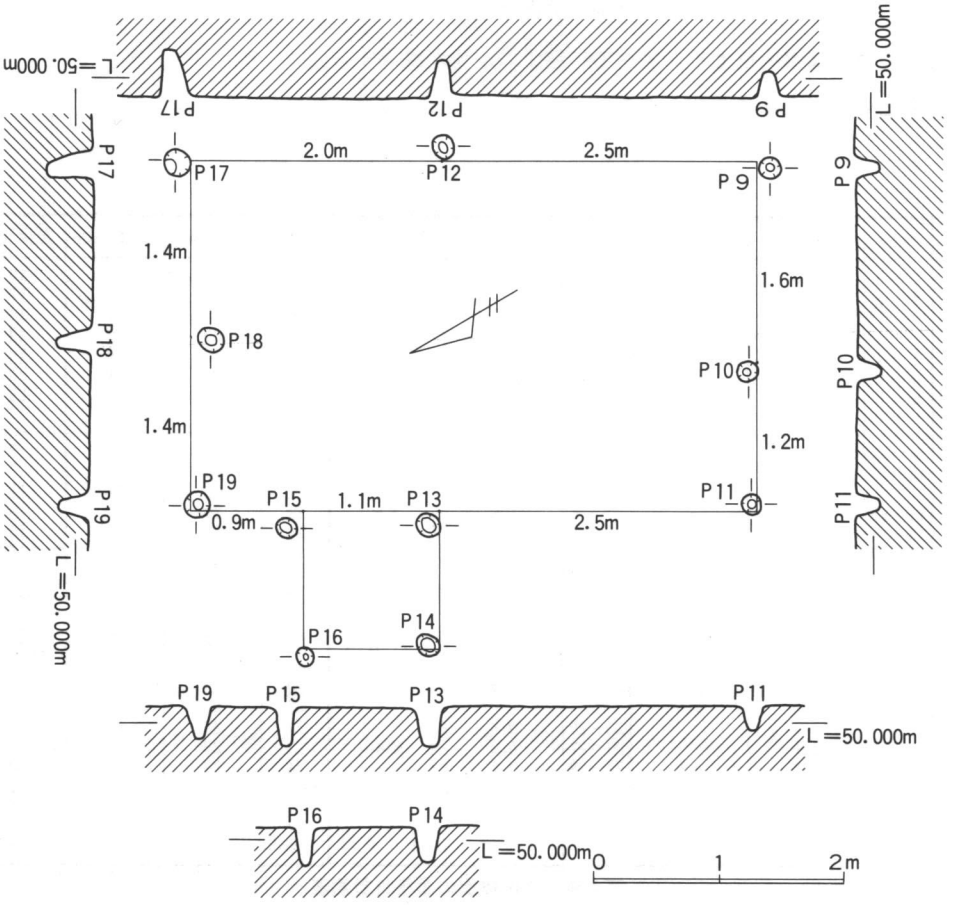
柱列はすべて千鳥の並びとなる。

	Pit NO	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit NO	梁間柱間(m)	梁間間(m)	P	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
SBI-01	1～3	2.0	6.2	1～2	2.8	2.8	1	15	23	19
	3～5	2.3					2	22	20	17
	5～7	1.9		7～8	2.8	2.8	3	23	17	14
							4	30	27	23
	2～4	2.0	6.2				5	20	18	14
	4～6	1.9					6	36	21	19
	6～8	2.3					7	19	25	25
							8	28	19	17
SBI-02	9～12	2.5	4.5	9～10	1.6	2.8	9	21	19	17
	12～17	2.0		10～11	1.2		10	20	19	17
							11	20	17	15
	11～13	2.5	4.5	17～18	1.4	2.8	12	29	20	18
	13～15	1.1		18～19	1.4		13	32	21	18
	15～19	0.9					14	29	21	17
							15	31	19	16
							16	31	17	15
							17	32	23	20
							18	29	23	19
							19	25	22	20
SBI-03	20～22	1.5	4.5	20～21	2.4	2.4	20	22	25	22
	22～25	3.0					21	23	21	19
				25～26	0.8	2.4	22	24	44	27
	21～23	1.5	4.5	26～27	0.9		23	29	21	18
	23～24	1.8		27～28	0.7		24	28	22	20
	24～28	1.2					25	24	23	21
							26	24	18	16
							27	21	18	15
							28	25	16	13

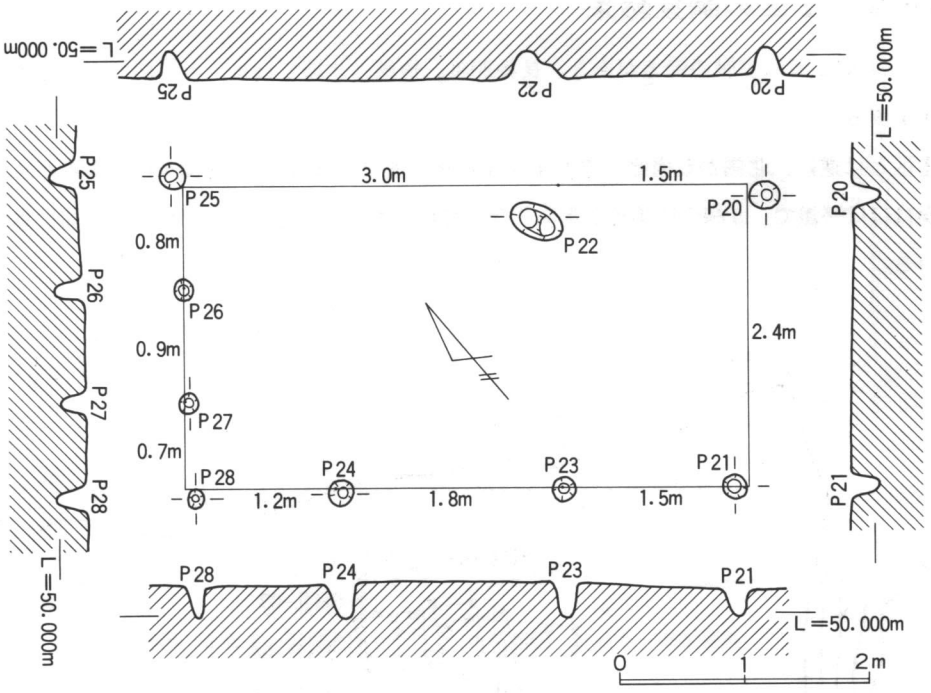
第１表　Ｉ区検出の建築址計測表



第10図　ＳＢＩ－01実測図



第11図　ＳＢＩ－02実測図



第12図　ＳＢＩ－03実測図

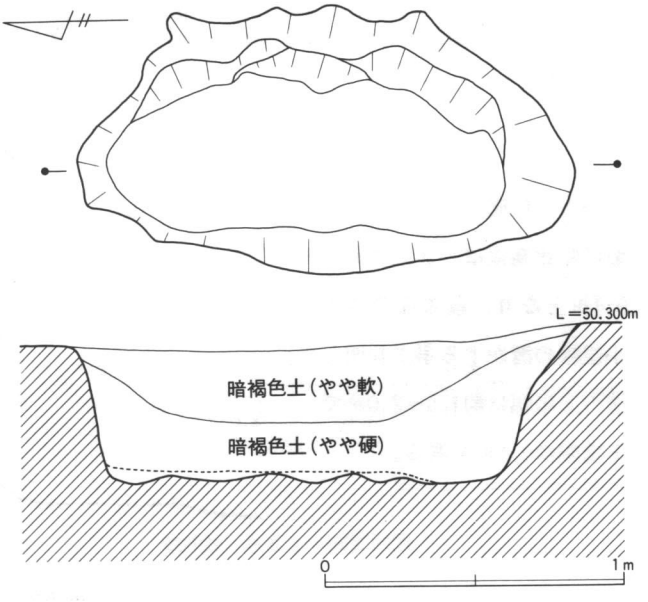
ＳＸ－０１

ＳＸ－０１（第13図）はⅠ区の西縁より検出されたもので、遺構は地山の凝灰岩を切り込んでいる。

平面形はややいびつな長円形で、主軸の向きはほぼ南北方向を示す。上場で長径1.7ｍ・短径0.8ｍ、下場で長径1.3ｍ・短径0.45ｍを測り、深さは0.4ｍである。

断面形は船型を呈し、埋土は単一の暗褐色土であるが、上位部分はやや軟らかく、下位部分はやや硬い。

遺物は出土しなかった。

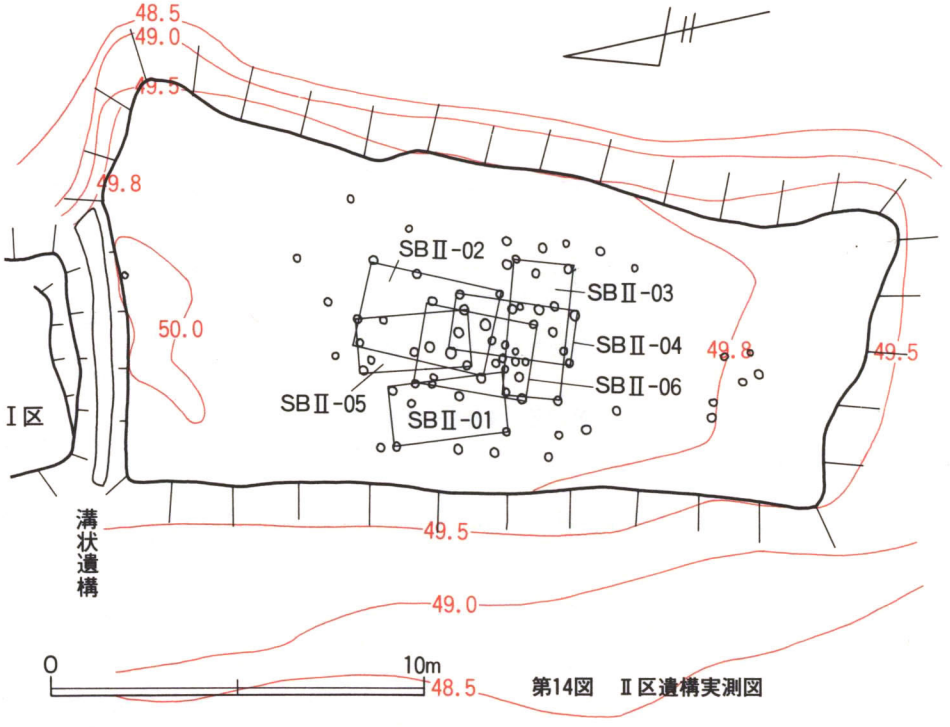


第13図　ＳＸ－01実測図

第４節　Ⅱ区の調査結果

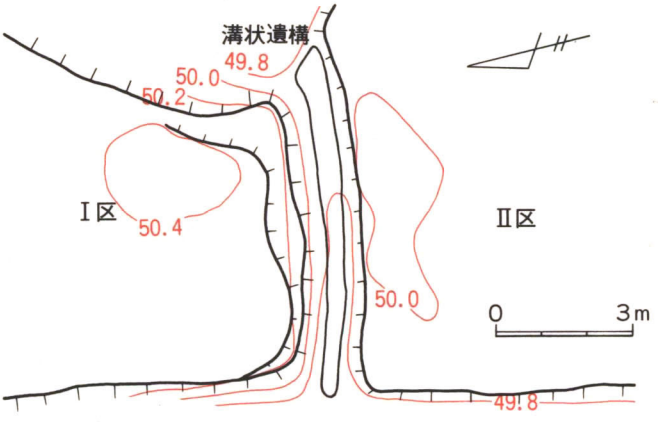
Ⅱ区はＮ22°Ｅに主軸の向きがあり、長軸20ｍ、短軸は北端で11ｍ、中央部で９ｍ、南端で８ｍを測る。

Ⅰ区とは逆に、北側から南側へのわずかな緩傾斜地で、両端では約0.2ｍの比高差がある。上面はほぼ平坦で、６棟の建築址が重なり合って検出された。建築址は平場の中央部に集中している。

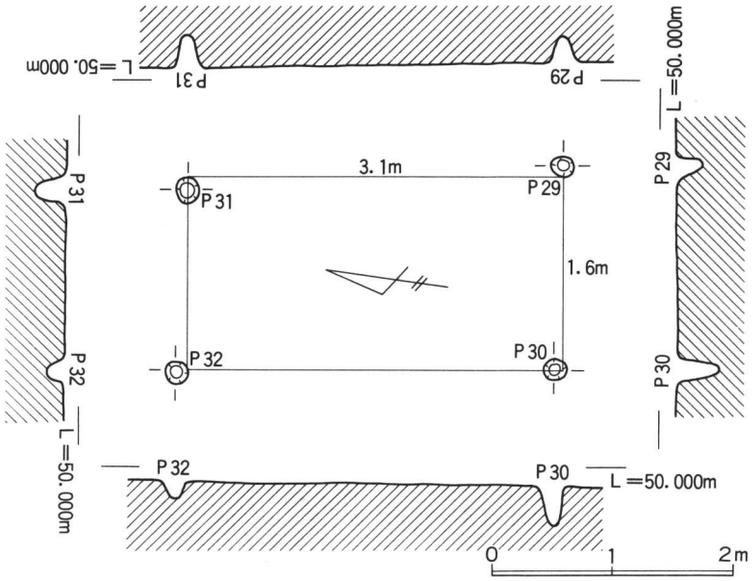


第14図　Ⅱ区遺構実測図

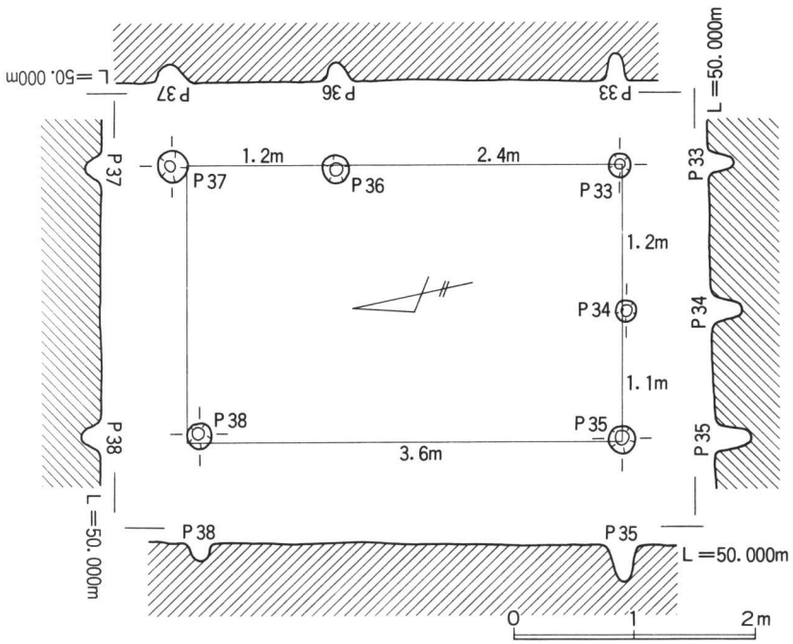
一方、位置Ⅰ～Ⅱ区の接点における比高差は、Ⅱ区側から－0.4ｍとなり、段差面の西側は小規模の溝が下る事が判明した。溝の上場幅は約1.5～2.0ｍで、下場幅は0.4ｍを測る。



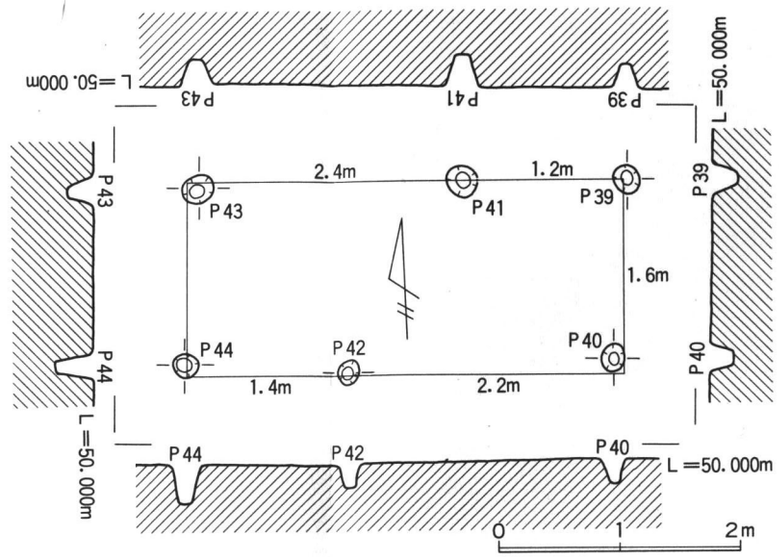
第15図　溝状遺構実測図



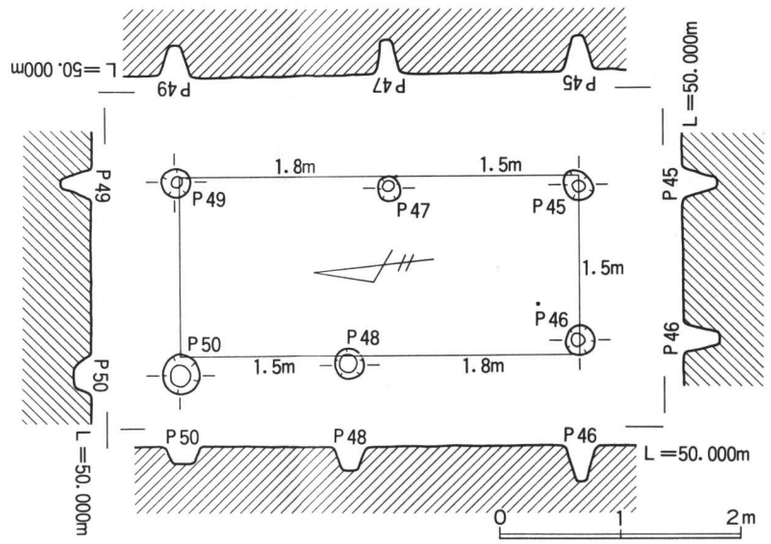
第16図　ＳＢⅡ－01実測図



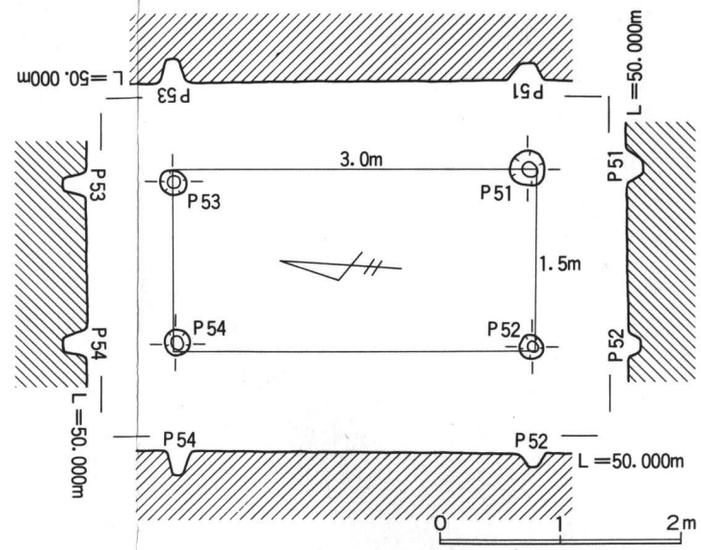
第17図　ＳＢⅡ－02実測図



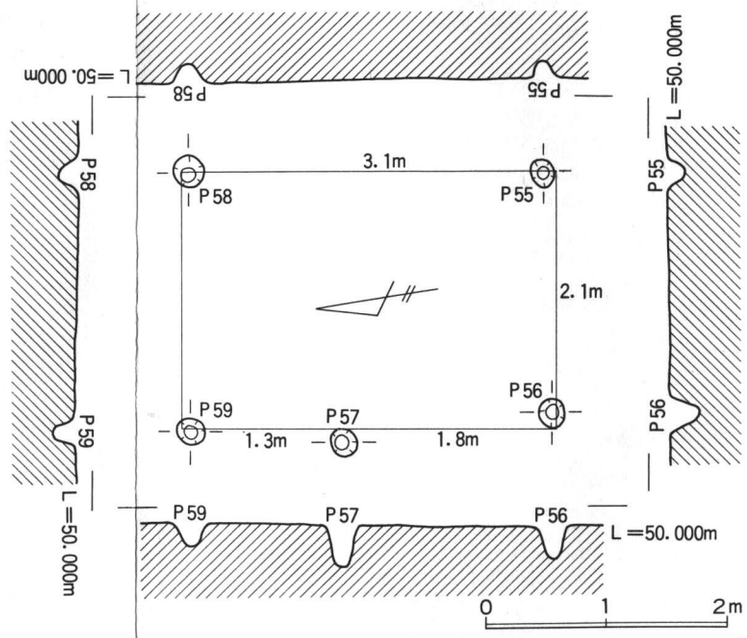
第18図　ＳＢⅡ－03実測図



第19図　ＳＢⅡ－04実測図



第20図　ＳＢⅡ－05実測図



第21図　ＳＢⅡ－06実測図

ＳＢⅡ－０１

桁行3.1ｍ、梁行妻1.6ｍの１間×１間の建物で、方位Ｎ８°Ｗである。

柱間寸法は、桁行Ｐ29～Ｐ31で3.1ｍ、Ｐ30～Ｐ32で3.1ｍ、梁行妻Ｐ29～Ｐ30で1.6ｍ、Ｐ31～Ｐ32で1.6ｍを測る。

柱穴の大きさはＰ31が最大（23×19㎝）で、Ｐ32が最小（20×17㎝）である。深さはＰ30が最深（35㎝）で、Ｐ32が最浅（15㎝）である。

柱穴の埋土は褐灰色土である。

柱列は桁行Ｐ29～Ｐ31と梁行妻Ｐ31～Ｐ32が千鳥の並びとなる。

ＳＢⅡ－０２

桁行3.6ｍ、梁行妻2.3ｍの２間×２間の建物で、方位Ｎ13°Ｅである。

柱間寸法は、桁行Ｐ33～Ｐ36～Ｐ37で2.4ｍ＋1.2ｍ、Ｐ35～Ｐ38で3.6ｍ、梁行妻Ｐ33～Ｐ34～Ｐ35で1.2ｍ＋1.1ｍ、Ｐ37～Ｐ38で2.3ｍを測る。

柱穴の大きさはＰ37が最大（27×25㎝）で、Ｐ34が最小（19×17㎝）である。深さはＰ35が最深（31㎝）で、Ｐ38が最浅（16㎝）である。

柱穴の埋土は褐灰色土で、Ｐ35・Ｐ37・Ｐ38には粘土の小塊が混入する。

柱列の並びは、梁行妻Ｐ37～Ｐ38が千鳥の並びとなる。

ＳＢⅡ－０３

桁行3.6ｍ、梁行妻1.6ｍの２間×１間の建物で、方位Ｎ84°Ｗである。

柱間寸法は、桁行Ｐ39～Ｐ41～Ｐ43で1.2ｍ＋2.4ｍ、Ｐ40～Ｐ42～Ｐ44で2.2ｍ＋1.4ｍ、梁行妻Ｐ39～Ｐ40で1.6ｍ、Ｐ43～Ｐ44で1.6ｍを測る。

柱穴の大きさはＰ41が最大（27×24㎝）で、Ｐ42が最小（23×18㎝）である。深さはＰ44が最深（32㎝）で、Ｐ40とＰ42が最浅（21㎝）である。

柱穴の埋土は褐灰色土で、Ｐ43には粘土の小塊が混入する。

柱列は、桁行Ｐ39～Ｐ41～Ｐ43を除いて千鳥の並びとなる。

ＳＢⅡ－０４

桁行3.3ｍ、梁行妻1.5ｍの２間×１間の建物で、方位Ｎ９°Ｅである。

柱間寸法は、桁行Ｐ45～Ｐ47～Ｐ49で1.5ｍ＋1.8ｍ、Ｐ46～Ｐ48～Ｐ50で1.8ｍ＋1.5ｍ、梁行妻Ｐ45～Ｐ46で1.5ｍ、Ｐ49～Ｐ50で1.5ｍを測る。

柱穴の大きさはＰ50が最大（34×31㎝）で、Ｐ47が最小（21×19㎝）である。深さはＰ46とＰ47が最深（30㎝）で、Ｐ50が最浅（15㎝）である。

柱穴の埋土は、すべて褐灰色土である。

柱列は両桁行が千鳥の並びとなる。

ＳＢⅡ－０５

桁行3.0ｍ、梁行妻1.5ｍの１間×１間の建物で、方位Ｎ４°Ｗである。

柱間寸法は、桁行Ｐ51～Ｐ53で3.0ｍ、Ｐ52～Ｐ54で3.0ｍ、梁行妻Ｐ51～Ｐ52で1.5ｍ、Ｐ53～Ｐ54で1.5ｍを測る。

柱穴の大きさはＰ51が最大（30×28㎝）で、Ｐ52が最小（20×19㎝）である。深さはＰ53が最深（22㎝）で、Ｐ52が最浅（11㎝）である。

柱穴の埋土は褐灰色土で、Ｐ52・Ｐ54には粘土の小塊が混入する。

柱列は両桁行が千鳥の並びとなる。

ＳＢⅡ－０６

桁行3.1ｍ、梁行妻2.1ｍの２間×１間の建物で、方位Ｎ11°Ｅである。

柱間寸法は、桁行Ｐ55～Ｐ58で3.1ｍ、Ｐ56～Ｐ57～Ｐ59で1.8ｍ＋1.3ｍ、梁行妻Ｐ55～Ｐ56で2.1ｍ、Ｐ58～Ｐ59で2.1ｍを測る。

柱穴の大きさはＰ58が最大（27×25㎝）で、Ｐ55が最小（25×19㎝）である。深さはＰ57が最深（36㎝）で、Ｐ55とＰ58が最浅（16㎝）である。

柱穴の埋土は、すべて褐灰色土である。

柱列はＰ56～Ｐ57～Ｐ59で千鳥の並びとなる。

	Pit NO	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit NO	梁間柱間(m)	梁間間(m)	P	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
SBⅡ01	29～31	3.1	3.1	29～30	1.6	1.6	29	22	20	17
							30	35	20	18
	30～32	3.1	3.1	31～32	1.6	1.6	31	28	23	19
							32	15	20	19
SBⅡ－02	33～36	2.4	)	33～34	1.2	)	33	22	21	18
	36～37	1.2	3.6	34～35	1.1	2.3	34	26	19	17
							35	31	24	22
	35～38	3.6	3.6	37～38	2.3	2.3	36	17	24	22
							37	17	27	25
							38	16	23	20
SBⅡ－03	39～41	1.2	)	39～40	1.6	1.6	39	23	25	21
	41～43	2.4	3.6				40	21	24	19
				43～44	1.6	1.6	41	28	27	24
	40～42	2.2	)				42	21	23	18
	42～44	1.4	3.6				43	22	28	23
							44	32	22	20
SBⅡ－04	45～47	1.5	)	45～46	1.5	1.5	45	29	28	22
	47～49	1.8	3.3				46	30	26	24
				49～50	1.5	1.5	47	30	21	19
	46～48	1.8	)				48	21	26	24
	48～50	1.5	3.3				49	26	25	23
							50	15	34	31
SBⅡ05	51～53	3.0	3.0	51～52	1.5	1.5	51	14	30	28
							52	11	20	19
	52～54	3.0	3.0	53～54	1.5	1.5	53	22	25	20
							54	20	23	21
SBⅡ－06	55～58	3.1	3.1	55～56	2.1	2.1	55	16	25	19
							56	25	25	21
	56～57	1.8	)	58～59	2.1	2.1	57	36	24	21
	57～59	1.3	3.1				58	16	27	25
							59	21	25	22

第２表　Ⅱ区検出の建築址計測表

第５節　Ⅲ区の調査結果

Ⅱ区とⅣ区の間上にあり、窪地となる。主軸の向きはＮ50°Ｗで、長軸の長さは15ｍ、短軸の長さは10ｍを測る。西側から東側への緩傾斜地で、両端の比高差は、約1.0ｍである。一方、Ⅱ区とⅣ区との比高は、Ⅲ区の西端において約0.7～0.8ｍである。

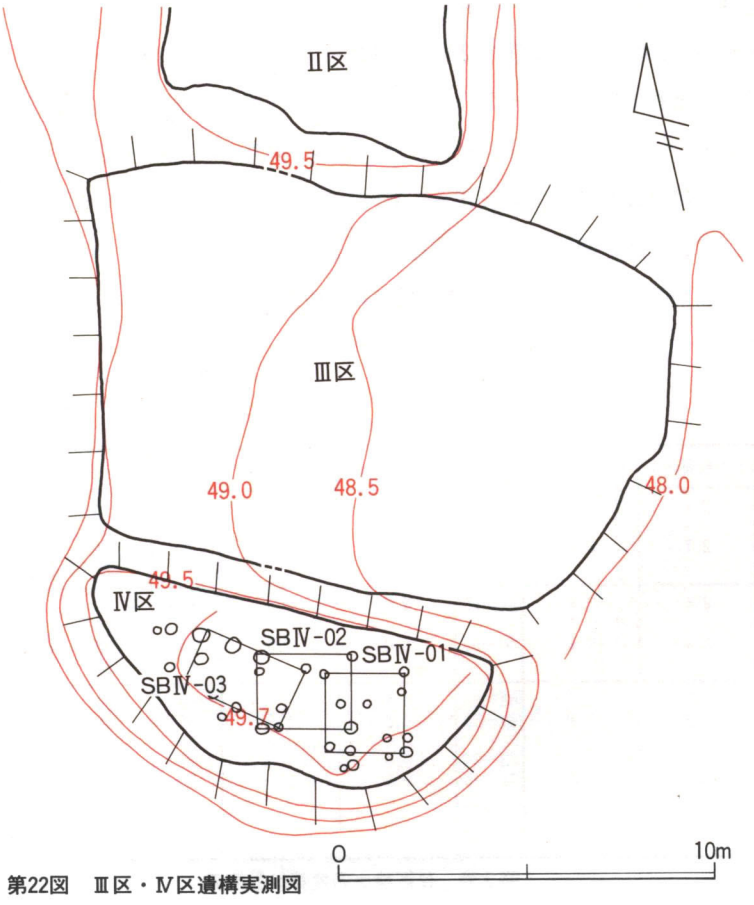
薄い表土の下は凝灰岩で、遺構は何も検出されなかった。後世に削平された可能性がある。

第６節　Ⅳ区の調査結果

「城床」高台の南端区画にあたり、主軸の向きはＮ56°Ｗで、長軸の長さは約11.0ｍ、短軸は中央部で約4.5ｍを測る。

平面形は三日月形で、３棟の建築址が重なり合って検出された。

Ⅲ区に関連して、従来から独立区画であったか否かについては、今後、検討の余地があろう。これによって、建築址の性格も大きく変わるものと思われる。



第22図　Ⅲ区・Ⅳ区遺構実測図

ＳＢⅣ－０１

柱間寸法は、桁行・梁行妻ともに2.1ｍで、１間×１間の正方形の建物である。方位Ｎ15°Ｅである。

柱穴の大きさはＰ61が最大（32×28㎝）で、Ｐ63が最小（21㎝、円形）である。深さはＰ62が最深（46㎝）で、Ｐ60が最浅（16㎝）である。

柱穴の埋土はすべて褐灰色土である。

柱列はすべて千鳥の並びとなる。

ＳＢⅣ－０２

桁行2.4ｍ、梁行妻2.0ｍの１間×１間の建物で、方位Ｎ13°Ｅである。

柱間寸法は、桁行Ｐ64～Ｐ66で2.4ｍ、Ｐ65～Ｐ67で2.4ｍ、梁行妻Ｐ64～Ｐ65で2.0ｍ、Ｐ66～Ｐ67で2.0ｍを測る。

柱穴の大きさはＰ66が最大（42×38㎝）で、Ｐ64が最小（30×26㎝）である。深さはＰ64が最深（38㎝）で、Ｐ65が最浅（12㎝）である。

柱穴の埋土はすべて褐灰色土である。

ＳＢⅣ－０３

桁行2.8ｍ、梁行妻1.6ｍの２間×２間の建物で、方位Ｎ55°Ｗである。

柱間寸法は、桁行Ｐ68～Ｐ71～Ｐ73で2.0ｍ＋0.8ｍ、Ｐ70～Ｐ72～Ｐ75で2.0ｍ＋0.8ｍ、梁行妻Ｐ68～Ｐ69～Ｐ70で0.8ｍ＋0.8ｍ、Ｐ73～Ｐ74～Ｐ75で0.8ｍ＋0.8ｍを測る。

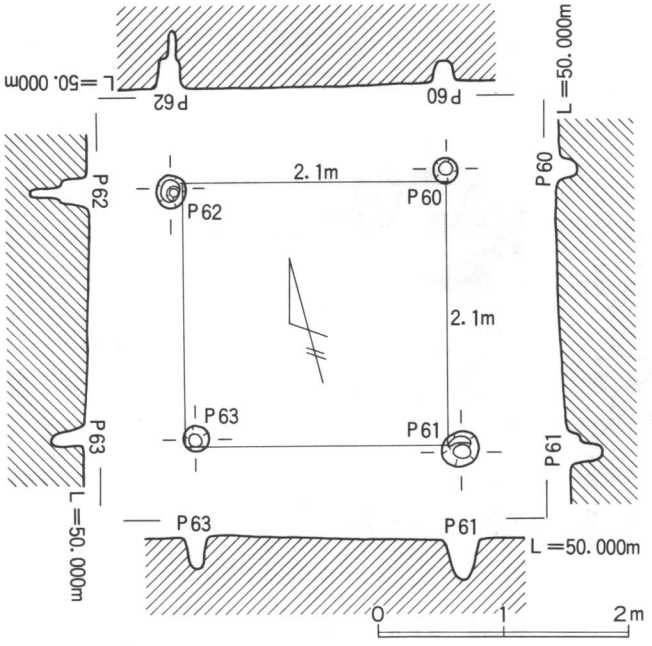
柱穴の大きさはＰ73が最大（50×45㎝）で、Ｐ72が最小（22×21㎝）である。深さはＰ73が最深（47㎝）で、Ｐ70が最浅（15㎝）である。

柱穴の埋土は褐灰色土であるが、Ｐ71・Ｐ74・Ｐ75は粘土の小塊が混入する。

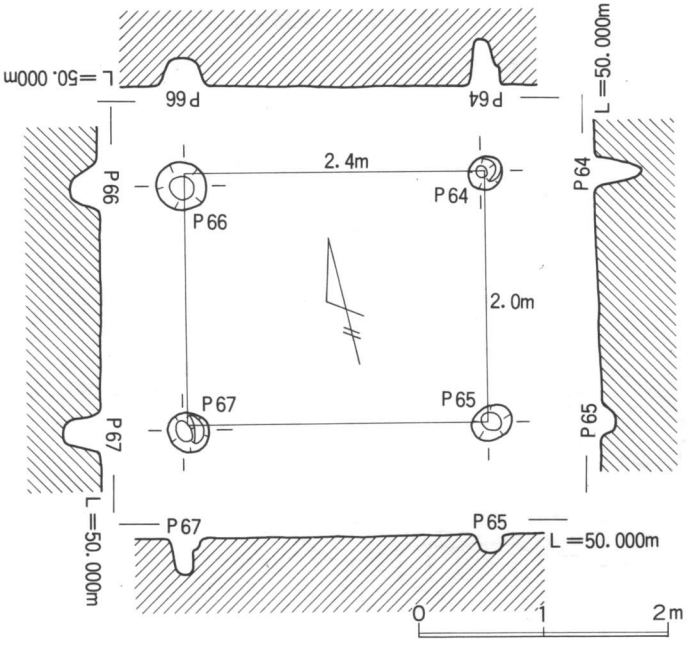
柱列はすべて千鳥の並びとなる。

	Pit NO	桁行柱間(m)	桁行間(m)	Pit NO	梁間柱間(m)	梁間間(m)	P	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)
SBⅣ01	60～62	2.1	2.1	60～61	2.1	2.1	60	16	21	20
							61	28	32	28
	61～63	2.1	2.1	62～63	2.1	2.1	62	46	28	24
							63	27	21	21
SBⅣ02	64～66	2.4	2.4	64～65	2.0	2.0	64	38	30	26
							65	12	34	27
	65～67	2.4	2.4	66～67	2.0	2.0	66	22	42	38
							67	30	34	31
SBⅣ－03	68～71	2.0	) 2.8	68～69	0.8	) 1.6	68	25	26	22
	71～73	0.8		69～70	0.8		69	22	35	30
							70	15	25	22
	70～72	2.0	) 2.8	73～74	0.8	) 1.6	71	20	47	36
	72～75	0.8		74～75	0.8		72	33	22	21
							73	47	50	45
							74	44	35	32
							75	31	29	29

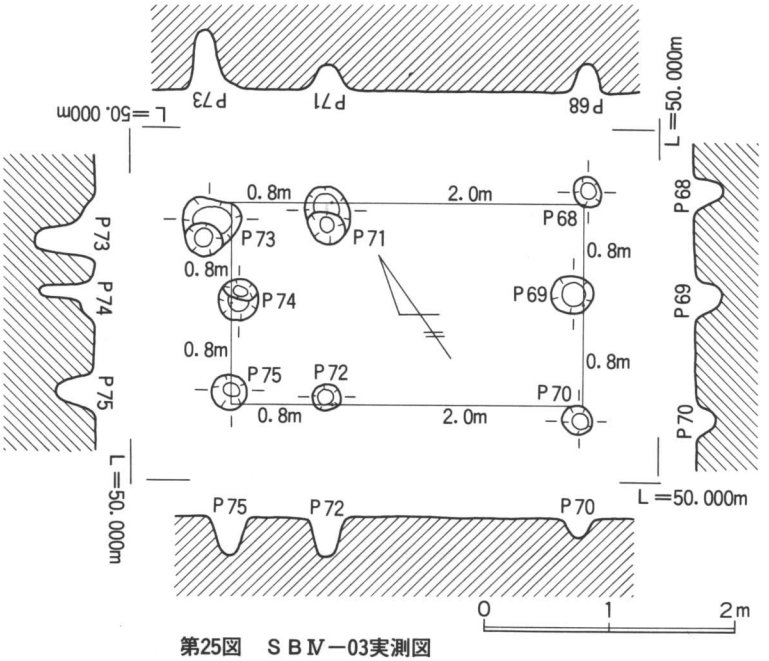
第３表　Ⅳ区検出の建築址計測表



第23図　ＳＢⅣ－01実測図



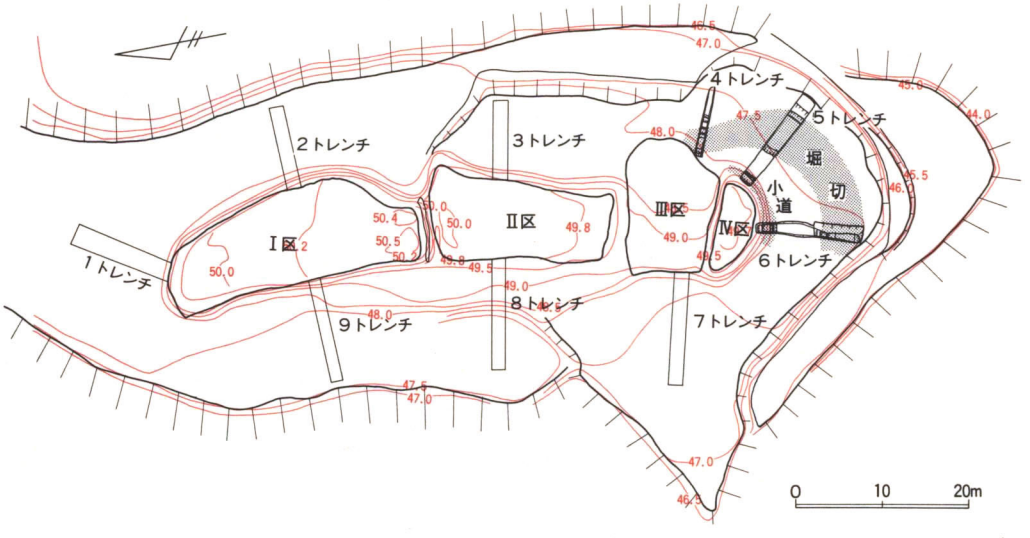
第24図　ＳＢⅣ－02実測図



第25図　ＳＢⅣ－03実測図

第７節　トレンチの調査結果

城床の裾部に、城床を取り囲むように９カ所のトレンチを設定した。トレンチＮＯは、北～東～南～西の順に１～９とした。トレンチの設定理由は、城床の裾部における遺構の埋没状況を知るためであったが、特に１トレンチの場合、城跡の北限箇所に該当し、木葉山の山腹との接点であり、堀切の埋没が推察された。



第26図　トレンチ配置図

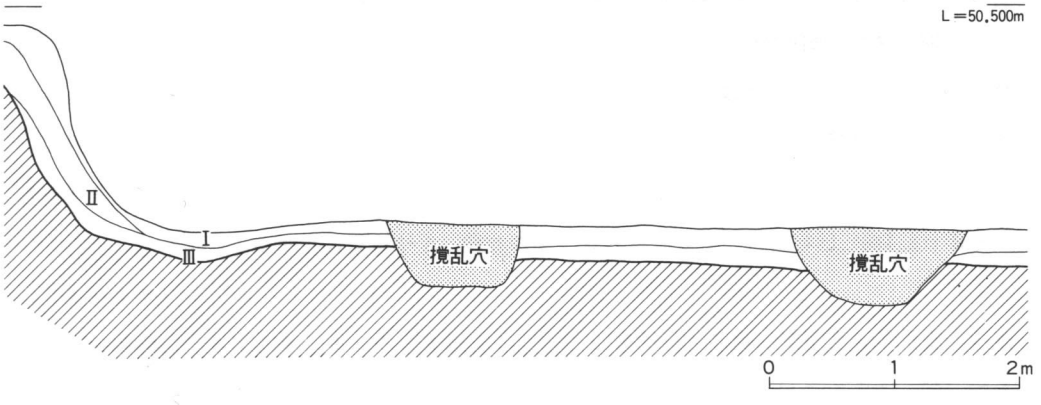
〔1トレンチ〕

城跡の鞍部地形に沿う形に、N46°Eの角度で、2m×30mのトレンチを設定した。厚さ15cmの暗褐色土が堆積していたが、予想された堀切等の遺構は存在しなかった。地山は水平である。(昭和40年頃に掘られたという、ミカン栽培用の排水溝がトレンチを9条に渡って寸断していた。)

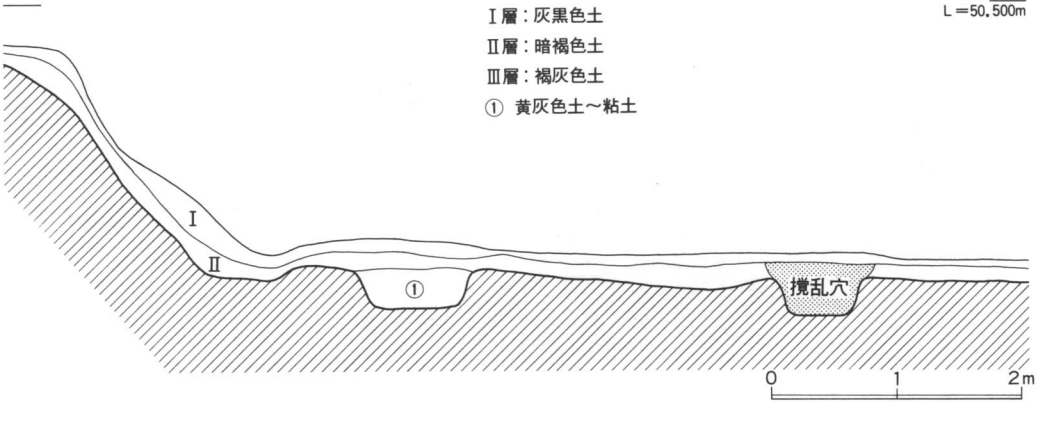
Ⅰ区との比高差は約1.5mで、城床の斜面は、地山の凝灰岩が約60°の角度で削り取られていた。

〔2トレンチ〕

Ⅰ区中央の東側に1.5m×12mのトレンチを設定した。厚さ5～10cmの表土と10～20cmのⅡ層土が堆積していた。地山は水平である。2カ所から小溝が検出されたが、埋土の状況から、城床側のものは古く、外側のものは新しい。古い方の溝については、遺構の切り込み面で上場幅0.9m・下場幅0.65m・深さ0.3mを測り、埋土は粘土混じりの褐灰色土であった。



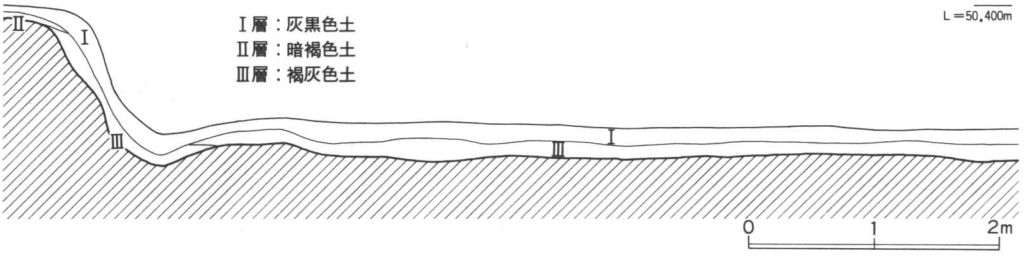
第27図　1トレンチ西壁土層断面図



第28図　2トレンチ北壁土層断面図

〔3トレンチ〕

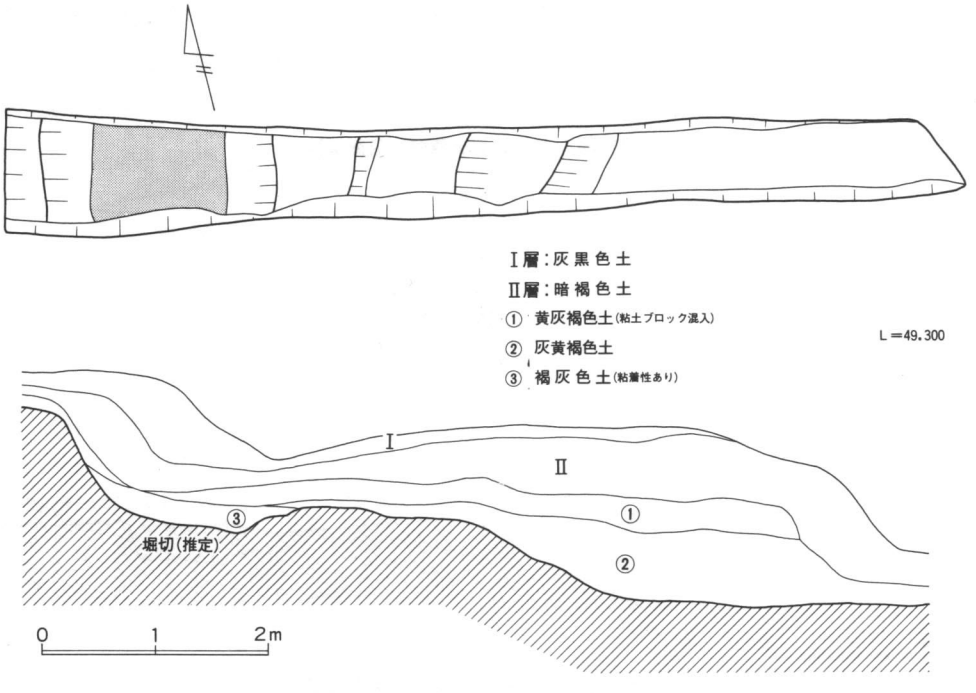
Ⅱ区中央部の東側に2ｍ×9ｍのトレンチを設定した。厚さ10～20㎝の表土とⅡ層土が堆積していた。地山は水平で、遺構は存在しなかった。



第29図　3トレンチ北壁土層断面図

〔4トレンチ〕

Ⅲ区中央部の東側に1ｍ×8ｍのトレンチを設定した。地山は多少の起伏をもって傾斜しており、堆積土もトレンチ端部において、最大1.5ｍの厚さを測った。遺構としては城床側に明らかに掘り窪めた箇所があり、5・6トレンチに繋がる堀切の一部ではないかと思われる。窪地に関して、城山側の地山は傾斜角度50°に削り落とされ、底部にかけて弧を描く格好となっており、底部は城床側へ10°程傾斜して、幅約1.3ｍを測る。外側の肩部は削平された状態で、わずかに立ち上がり部分を残すのみである。地山の起伏から外側の肩部に、土塁の存在が伺われる。



第30図　4トレンチ実測図及び土層断面図

〔5トレンチ〕

Ⅳ区の南東側に2ｍ×12ｍのトレンチを設定した。城床の裾部は、見た目に水平な地表で、帯曲輪の様であったが、このトレンチから小溝と堀切が検出された。

（小　溝）2トレンチから検出された小溝と同様の遺構であるが、掘り方はやや異なり、底部は弧を描く。遺構の切り込み面で、上場幅約1ｍ、下場幅0.3ｍを測る。埋土は粘土を多く含む褐灰色土であった。

（堀　切）小溝から約5ｍ離れた所にあり、緩い傾斜地の地山を大きく掘削している。上面幅は約6.5ｍで、堀底は船型を呈し、幅約4ｍである。遺構の残存状況からして、外側の肩部に土塁の存在が考えられるが、今日、その形状を留めない。堀底の中心部から地表までの深さは約2.2ｍである。埋土から瓦質の擂鉢片と中世雑器が出土した。

〔6トレンチ〕

Ⅳ区の南側に2ｍ×13ｍのトレンチを設定した。このトレンチからは、5トレンチの延長部分と思われる小溝と堀切が検出された。

（小　溝）遺構の切り込み面で上場幅0.7ｍを測る。底部の中心部はやや鋭角の弧を描く。

（堀　切）小溝から約6ｍ離れた所にあり、ほぼ水平状態の地山を掘削している。上面幅は約5.5ｍで、堀底は船型を呈し、幅約2.5ｍである。堀切の規模は5トレンチのものと比較し、やや小規模となる。堀底の中心部から地表までの深さは、約1.4ｍである。

〔7トレンチ〕

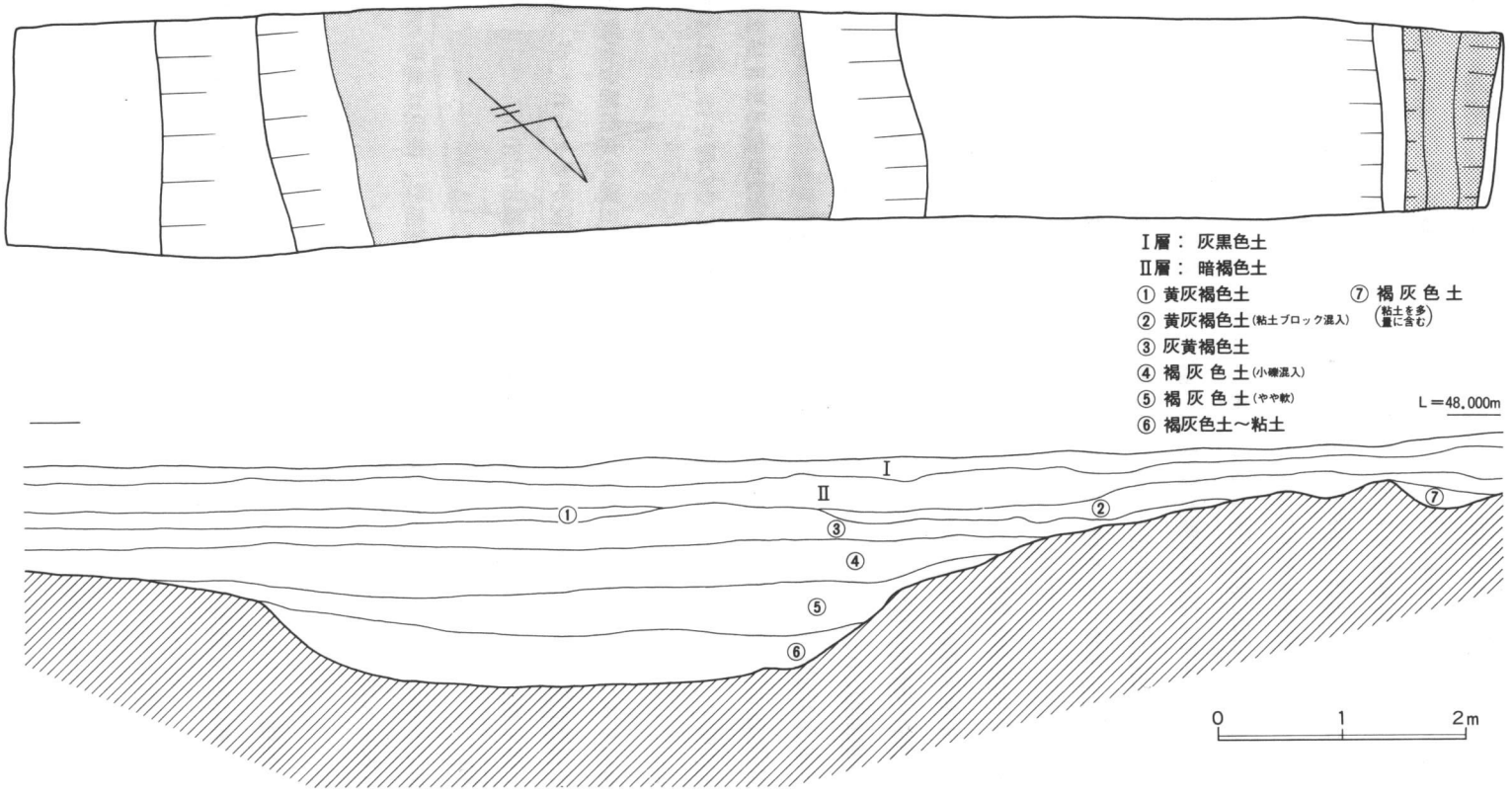
Ⅲ区の西側に2ｍ×20ｍのトレンチを設定した。この箇所は、丘陵の末梢部分が段落ちとなって、城床から南西側へ延びる変化点に該当しており、遺構の埋没が考えられたが、地山は水平で、遺構は何も検出されなかった。Ⅱ層土から青磁片と中世雑器片が出土した。

〔8トレンチ〕

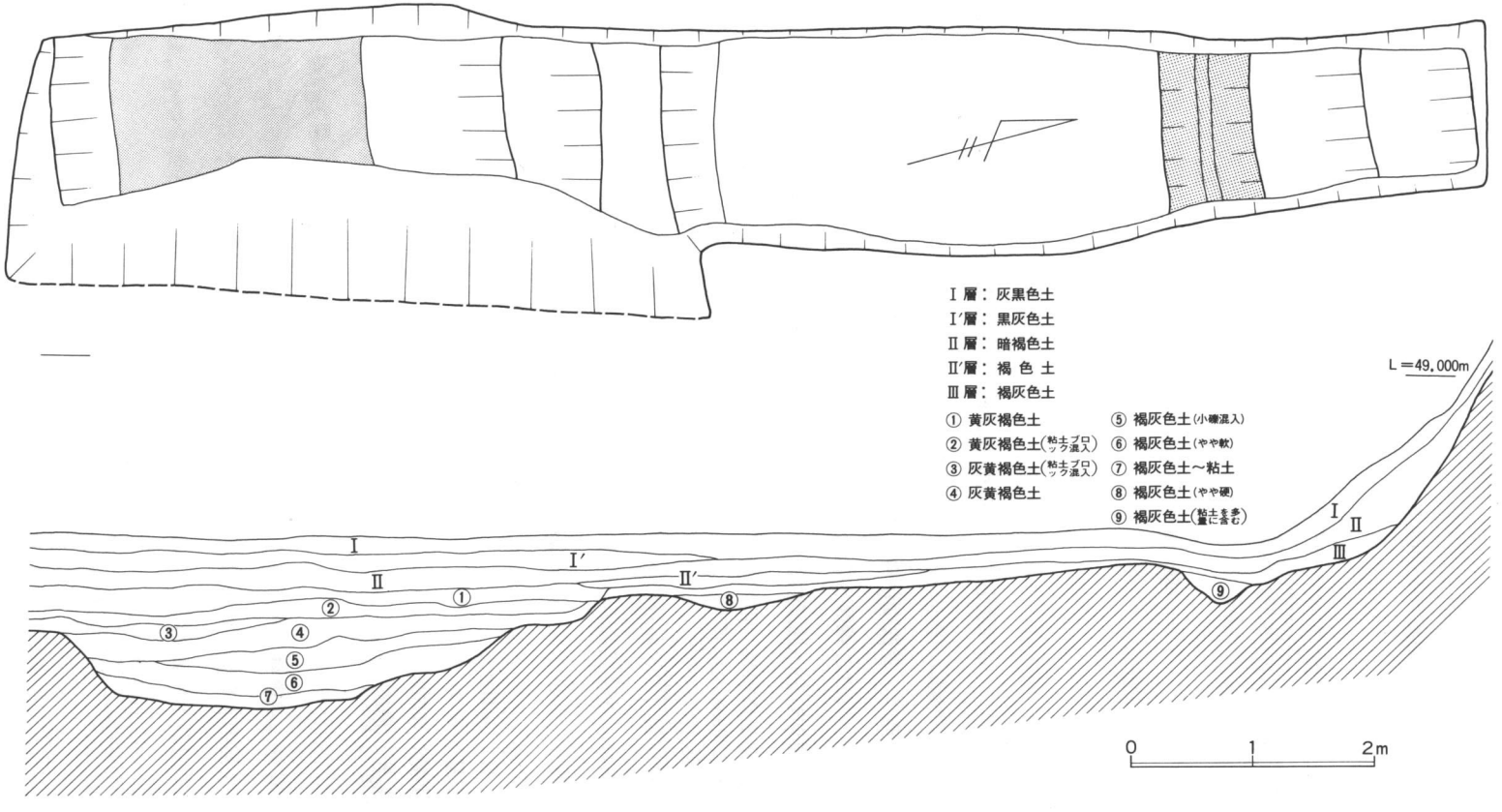
Ⅱ区の西側に2ｍ×15ｍのトレンチを設定した。Ⅱ区の西側裾部で、階段状地形の部分であるが、遺構は何も検出されなかった。

〔9トレレチ〕

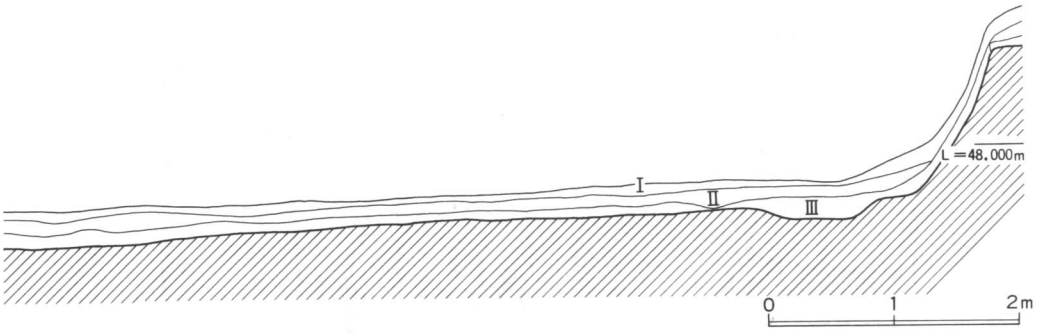
Ⅰ区中央の西側に、1.5ｍ×13ｍのトレンチを設定した。この箇所も8トレンチと同様な地形であるが、遺構は何も検出されなかった。　（永田　満・大田幸博）



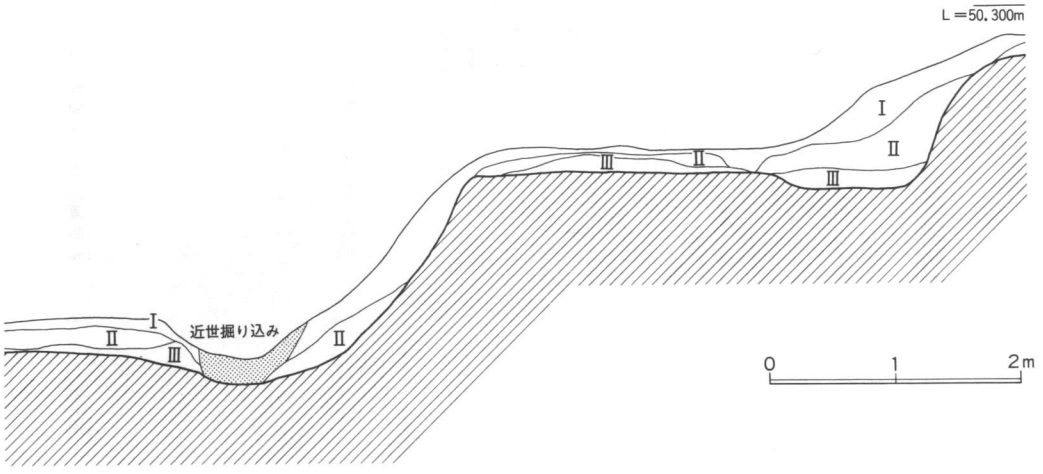
第31図　5トレンチ実測図及び土層断面図



第32図　6トレンチ実測図及び土層断面図

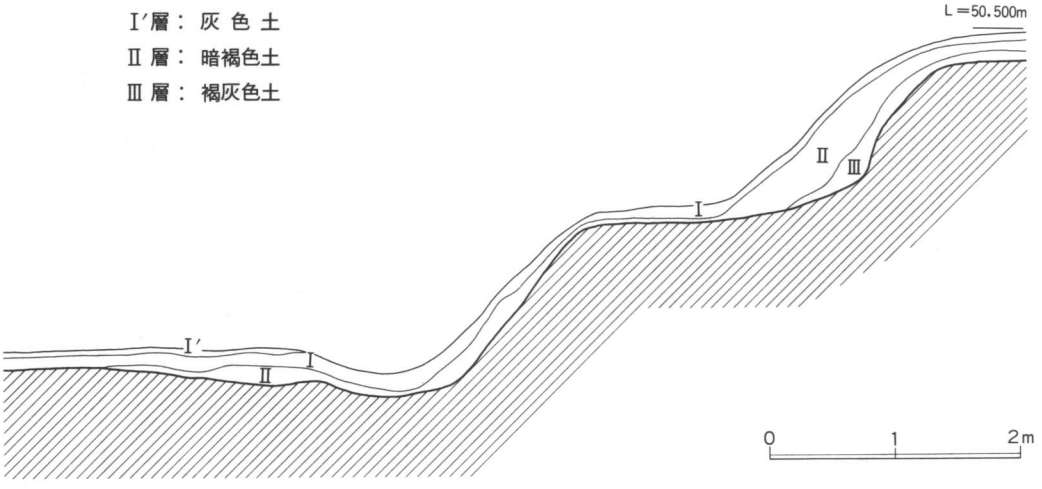


第33図　7トレンチ北壁土層断面図



第34図　8トレンチ北壁土層断面図

Ⅰ層：灰黒色土
Ⅰ′層：灰色土
Ⅱ層：暗褐色土
Ⅲ層：褐灰色土



第35図　9トレンチ北壁土層断面図

第8節　小　　結

(1)　城跡の中心地と目され、前方後円墳の形状を呈する特殊な「城床」の高台については次の見方ができる。

①城跡の遺構として、ほぼ原形を留めている。

②同じく城跡の遺構として、元来はもっと大きな造りであったが、後世に周辺を削り取られて、現地形となった。

③城跡の遺構と無関係で、後世の造成作業により現地形となった。

しかし、高台には「城床」という城跡関連地名が歴然と残っている事から、まずもって、③は除外できる。

調査の結果、高台の裾部に設定した3トレンチより南側の4・5トレンチ（高台の東側裾部の南側）にかけて小溝と堀切が検出され、地山も傾斜している事から、この部分について、高台の削除は無い事が判断した。ただし、2トレンチから1トレンチ（高台の東側裾部の北側・北東側鞍部）にかけてと、9・8・7・6トレンチ（高台の西側裾部）にかけては遺構が皆無で、地山もほぼ水平である事から、一部削除の可能性があると判断した。

高台の原形は、もっと西側へ膨らんでおり、さらに北東側の鞍部へ延びていた事が考えられる。一方で、中世城跡の鞍部に普遍的とも言える堀切が、同箇所に設けた1トレンチから検出されなかった事は、今回の調査における最大の疑問である。

(2)　Ⅲ区の判断は非常に困難である。調査結果によれば、遺構は皆無で、薄い地表の下は地山となる事から、一つの高台が、後世、何らかの理由で、Ⅱ区とⅣ区に分断されたと考えるのが、最も適切であろう。しかしながら、小規模造りのⅣ区の高まりを見た場合、分断する事がどの様な意味を持つのか、全く不可解である。規模や形状の点から、少なくとも耕作のための造成溝や、地割りの溝でない事は確かである。

逆に、Ⅲ区を城跡の遺構と考え、Ⅱ区とⅣ区に分ける堀切と見なしても、底部は全く掘り込みが無く、全面ベターッとした感じであり、堀底とは全く異なる形状である。堀切としての可能性は、極めて薄い。

唯一考えられる事は、城跡中心域の端部によく土壇状の高まりが存在し、今日、そこに山の神（伝承）や城主などが祀られている事例があり、これに類似する遺構との見方である。
Ⅳ区には、かつて戦神等を祀る小社があり、Ⅲ区の窪地は、Ⅱ区とⅣ区の仕切り溝と見なす考えである。

(3)　建築址について

Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ区からは、数多くの柱穴が検出された。いずれも上位部分は後世にカットされ、下位部分のみの残存であったが、大方のものが、地山の軟らかい凝灰岩や粘土層を切り込んで

おり、しっかりした掘り方であった。柱穴群の中から建築址の復元を試みた。

①Ⅰ区：　3棟を復元。ＳＢⅠ－０２が桁行に正方形の張り出しを持ち、唯一、特異な構造であった。3棟は、その配列状態から同時期に存在した事も考えられる。

②Ⅱ区：　Ⅱ区の中央部寄りから、6棟が重なり合って検出された。全体的に、造りはⅠ区よりも小規模で、臨時的で簡易な建物という感じがする。

③Ⅳ区：　3棟が検出され、ＳＢⅣ－０２と０３が重なり合っていた。形状から建築址は普通の建造物とは考えられず、小規模な「社」の類ではないかと推察される。

(4)　地形と遺構の関連について

①「城床」そのものは高さ1.5～ 2.0ｍ程の小高台で、これに関しては、全く戦略的な要素が伺えず、単なる城域内の区割り程度にしか考えられない状況である。景観的には、地域の中心部を示す為に削り残された人工的な地形と見なしても差し支え無いものと思われる。

この城域から検出された建築址は、いずれも小規模である。近年の高城跡（球磨郡山江村山田）発掘調査で、城域内における建築址について、倉庫もしくは兵舎の跡とする調査結果があり、稲佐城跡の遺構もこれと同類のものと考えられようが、前述の様に、Ⅳ区を初めとして、建築址の性格は明らかに異なる。

調査結果を見る限り、稲佐城跡の場合は、戦略的な要素に加えて、他方面からの見解の余地が必要である。城そのものは戦（いくさ）の副産物である事に疑いないが、稲佐城跡に関しては、単なる防衛のためばかりでなく、それにプラスする何ものかが実在することは否めない。城跡地の麓集落からの比高は約40ｍで、地形だけで十分防衛拠点になり得るものであるが、城床という限定された人工的な小区域から、これまた小規模な建築址が重なり合って検出された事実は、城跡＝軍事学という固定概念の他に、別の何ものかが実在する事を伝えているものと思われる。城跡の役割に宗教的色彩を持ち込むのは時期尚早であろうか。

②遺構の検出状況と現地点における城跡地の景観からすれば、稲佐城跡は山付きの比高40ｍという高台に大きく依存した城跡と考えられる。すなわち、自然地形に大きく手を加えて、戦略的施設を構築するのではなく、地の利を最大限に活用するやり方である。この点に稲佐城跡の縄張りとしての特色があろう。

③稲佐城跡のように地の利が戦略施設そのものという類の中世城跡群が存在する事は真実である。これを城跡の時代性と結びつける事が可能か否かは、今後の研究課題であるが、この類の城跡の発掘事例は、県内において今回が初めてである。この点で稲佐城跡の調査結果は大いに注目されよう。

（大田　幸博）

第Ⅳ章　出　土　遺　物

1～4は青磁である。1・3は薄黄緑色の釉色で、1は体部内面に葉状模様を有し、3は直線の沈線模様がある。2・4は無文である。2は薄黄緑色の釉色で、口縁は肥厚し、やや外反する。4は薄青白色の釉色で、口縁は大きく外反し、上面幅は9㎜を測る。4片とも小片で、器形については不明である。5は白磁片である。口縁直口で、体部外面に薄い稜線が残る。

6は糸切りの土師器皿で、完形品である。口径8.5㎝、器高1.9㎝、底径5.5㎝を測る。体部は平底から鈍く立ち上がり直線的に伸び、口縁直口である。7は高台付きの土師器である。

8・9は中世雑器で、9の体部は大きく外反する。10は須恵器で口縁直口である。11・12は高台付きの器で、11が須恵器、12が中世雑器である。12は非常に緻密な焼成で、内底面は磨かれている。13は須恵器で、口縁の上面は扁平（幅5㎜）である。14は須恵器の甕片で、体部外面に格子目叩きの痕跡が残る。15は中世雑器で、体部内面に縦方向の浅い細沈線が施されている。16・17は中世雑器の底部である。17は外底面の一部にススが付着する。

18～26は瓦質の擂鉢である。18の条線の一単位は3本である。19の体部は口縁に向かい漸次、肥厚する。20の口縁は丸みを帯び、条線の一単位は3本である。22の条線は器面全体に掻かれており、条線の単位は不明である。24の条線の一単位は6本である。25の条線の一単位は不明であるが、掻かれた個々の溝の深さにバラつきがある。

27は硬質瓦器の擂鉢で、体部は中途で薄壁となる。条線の一単位は5本である。28は中世雑器で、口縁はやや丸味を帯びる。29は瓦器で、体部内面に斜め方向の浅い溝が施されている。30は硬質瓦器で、体部外面に炭化物が付着する。31は瓦器である。32は須恵器で、体部外面に斜め方向のヘラ削りの痕が残る。33は中世雑器で、体部外面の上位に沈線が巡る。34・35・36は瓦器で、34は体部外面に叩き痕跡が認められ、内面はヘラ磨きされている。35は体部外面に小突帯が付く。36は頸部が「く」の字に大きく外反する。37は須恵器で、体部外面に格子目の叩きが残る。38は瓦器で、体部の上位はやや外反する。39・40・42～46は中世雑器である。39の体部は中途で最大厚となる。体部外面の中途から下位にかけて器面は非常に粗い。40は体部が内弯し、中途で直立気味となる。42は体部が肥厚する。43は体部上位に2条の波状文が施されているが、下段面の一部はナデ消しされている。44は体部外面の2条の突帯間に、V字形の工具による縦方向の短沈線が刻まれている。46は体部底面がヘラ磨きされている。41は瓦器で、体部外面の上位に花文のスタンプが付く。

47は砥石で、使用面は僅かに凹んでおり、縦方向の使用痕が見られる。

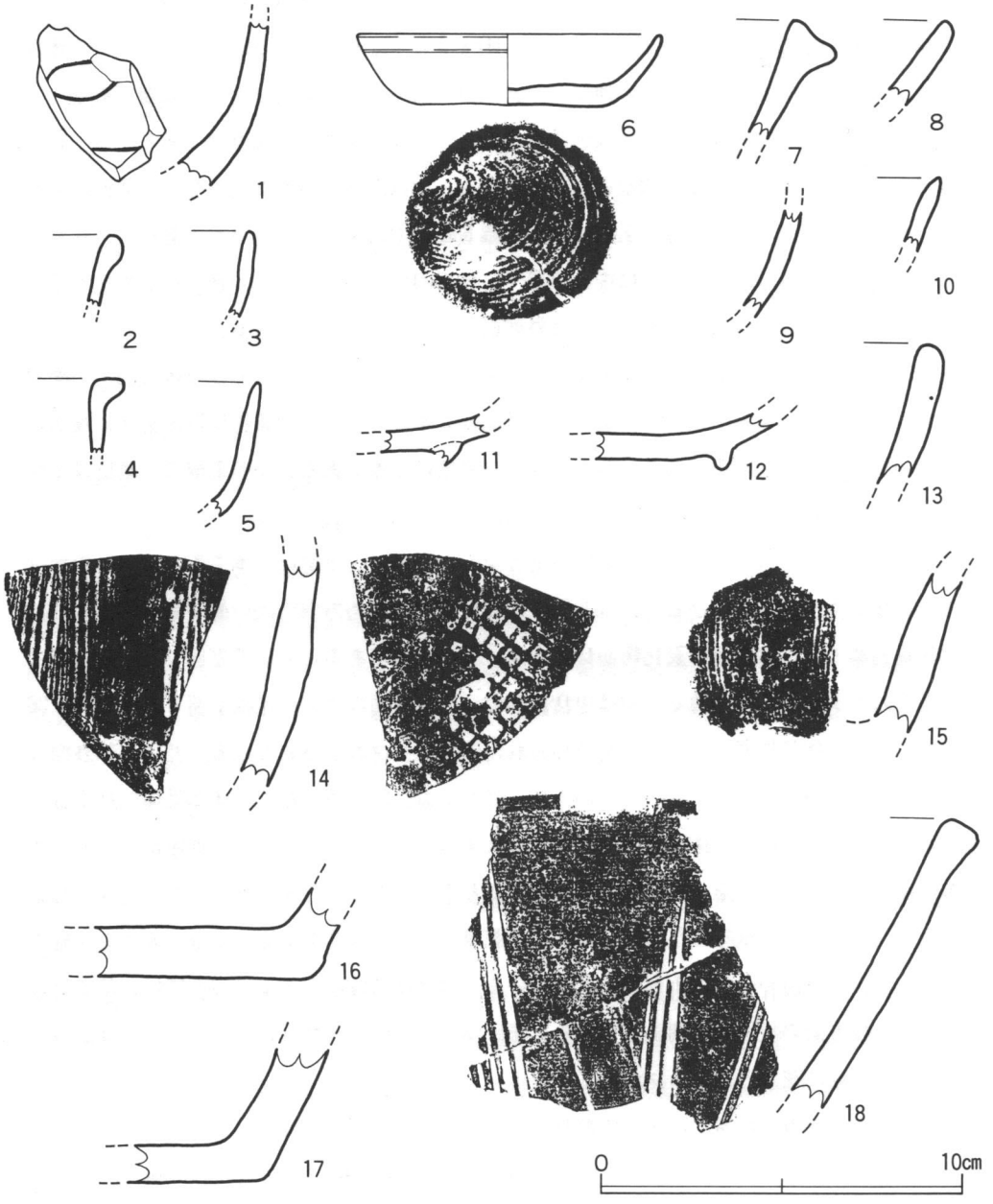
48は土錘状の形態を呈し、残存の長さは4.0㎝を測る。断面は楕円形で、長径1.5㎝、短径1.2㎝である。

49は鉄製の角釘で、残存の長さ4.0㎝、太さは0.8㎝×0.7㎝を測る。

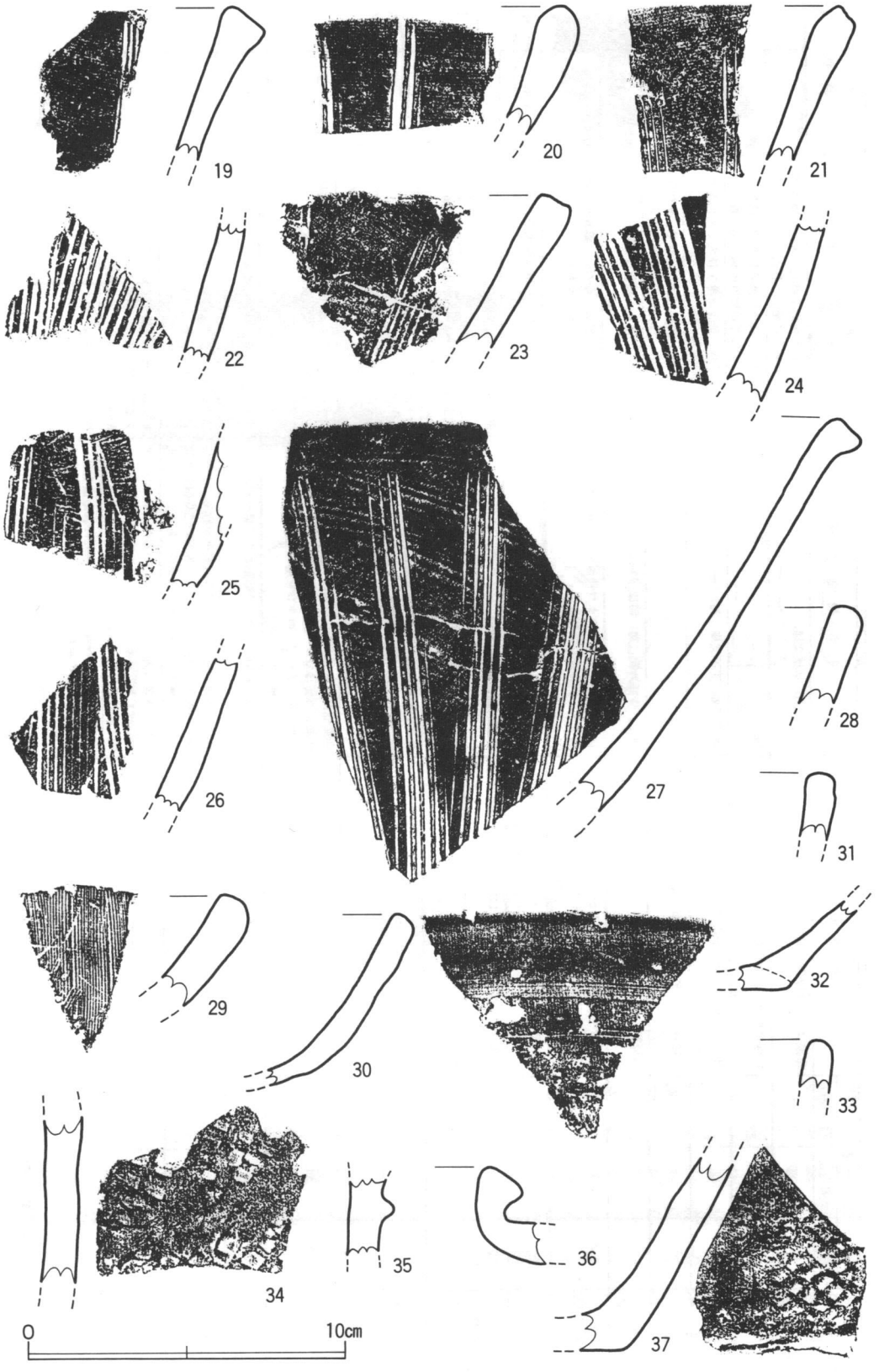
50は棒状の滑石製品で、残存の長さは1.7㎝を測る。断面は楕円形で、長径0.6㎝、短径0.5を測る。

51は銅製の飾りである。

なお、城跡からは、西南の役のものと見られる４発の鉛弾（52～55）が出土している。



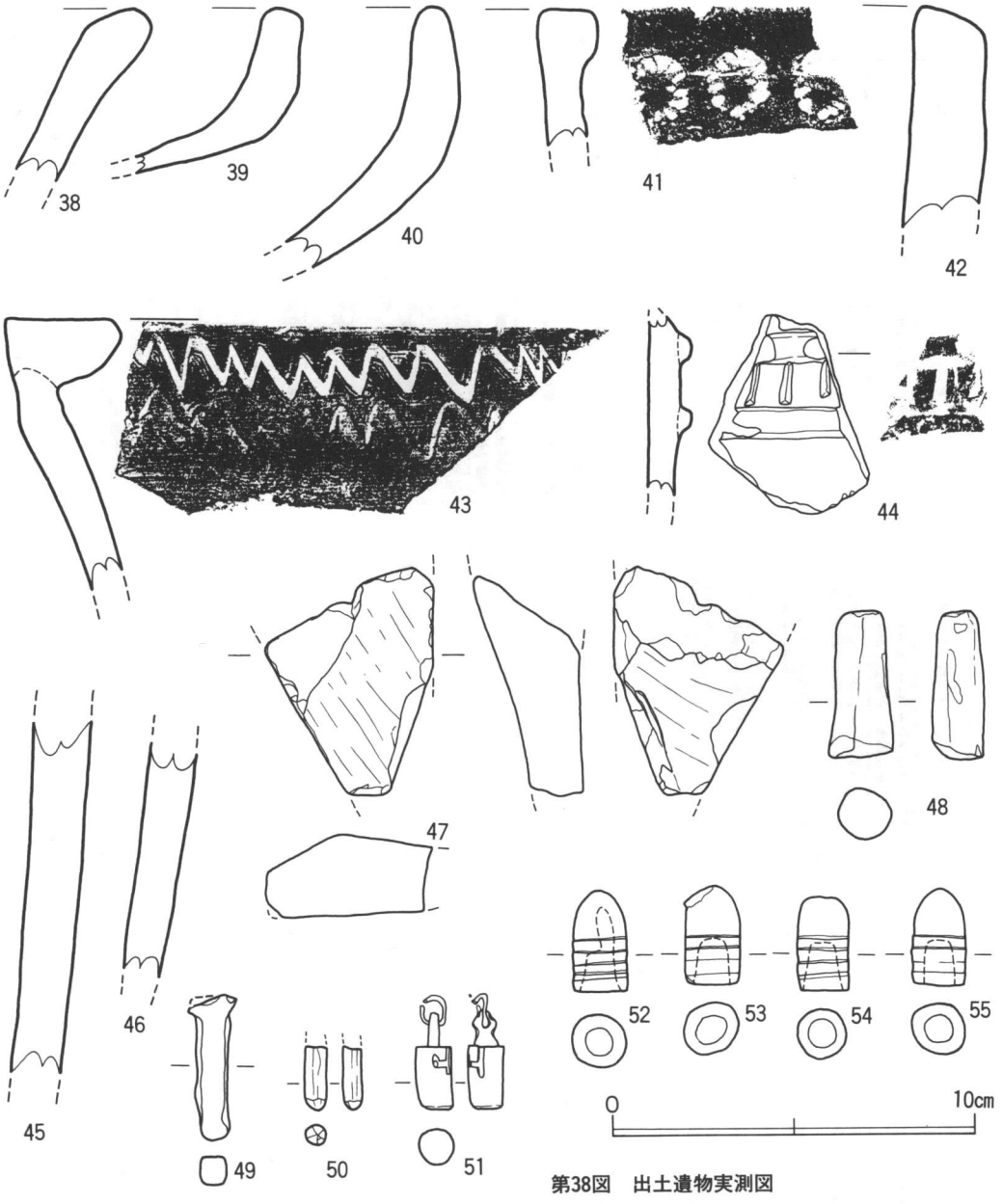
第36図　出土遺物実測図



第37図　出土遺物実測図

No.	法量			形態の特徴	手法・調整・文様	備考	出土地点
	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)				
1 青磁				体部は下位で肥厚（厚さ1.0cm）。	体部内面に葉状文様。	胎土は白褐色で極めて精良。釉色は薄黄緑色。体部の内外両面に細かい貫入。	7 T
2 〃				口縁は肥厚し、やや外反する。	無文。	胎土は白褐色。釉色は薄青緑色で全体的にくすんだ感じ。体部の内外両面に薄い貫入。	表土
3 〃				体部の上位で、わずかに肥厚。体部外面の上位に幅5㎜の沈線。	体部内面に沈線文様（幅1.5㎜）。	胎土は白褐色。釉色は薄黄緑色で光沢あり。体部の内外両面に細かい貫入。	表土
4 〃				口縁は大きく外反し、上面は幅9㎜。	無文。	胎土は灰白色。釉色は薄青白色で、全体的にくすんだ感じ。体部の内外両面に貫入。	Ⅱ区一括
5 白磁				口縁直口。	無文。体部外面に薄い稜線が残る。	胎土は白灰色で精良。釉色は白色。	Ⅲ区
6 土師器皿	8.5	5.5	1.9	体部は平底から鈍く立ち上がり、直線的に伸びる。口縁直口。底部は内外両面に指頭圧痕が残り、特に外底面の縁は大きな凹となっている。	体部上位の外面は、ロクロ使用のヘラ状工具による横ナデ。外底面に糸切り痕。	胎土は軟質で、器面はもろい。細砂粒を多く含む。色調は淡橙色、完形品。	Ⅱ区西
7 〃				付け高台。	――――	胎土は良、やや軟質。色調は淡橙色。	Ⅲ区　Ⅲ層下
8 中世雑器				体部はそのままの厚さで、口縁に至る。口縁の上面はナデ。	体部内面の調整は粗い。	胎土は良。色調は灰白色。	4 T
9 〃				体部は大きく外反。	体部の内外両面とも、ロクロ回転による横ナデ。	胎土は良。色調は内面が乳褐色、外面が灰褐色。緻密な焼成。	Ⅰ区Ⅱ層下位一括
10 須恵器				口縁直口。	体部の内外両面とも、ロクロ回転による横ナデ。体部内面の上位は強い横ナデ。	胎土は良。	Ⅱ区西一括
11 〃				付け高台。	外底面はロクロ回転による横ナデ。	胎土は精良、緻密な焼成。	Ⅲ区Ⅱ層下
12 中世雑器				付け高台。	内底面の工具は不明であるが、磨かれている。体部の外面はロクロ回転による横ナデ。外底面はヘラ状工具によって、ロクロを用いて削られている。高台には横ナデ。	胎土は精良。色調は白灰色、体部の外面は部分的に灰黒色。非常に緻密な焼成。	Ⅳ区Ⅱ層一括
13 須恵器				口縁の上面は扁平（幅5㎜）。	体部の内外両面ともロクロ回転による横ナデ。	胎土は良。非常に緻密な焼成。	Ⅳ区　5 T
14 〃				――――	体部の外面下位に格子目叩きの痕跡が残る。上位は叩きの痕がナデ消されている。体部の内面はロクロを用いた横方向のナデ調整痕が見られる。	胎土は精良。非常に緻密な焼成。	8 T
15 中世雑器				――――	体部の外面は横ナデが施されているが、ローリングを受けており詳細は不明。体部の内面は縦方向に、幅1㎜程度の浅い沈線が施されている。	胎土は良（細砂粒をわずかに混入する）。非常に緻密な焼成。色調はくすんだ感じの薄茶色。体部の外面には黄褐色の不着物あり。	8 T
16 〃				底部は平底で、肥厚（厚さ1.4cm）。	内底面及び体部内面は、ロクロ回転による横ナデ。外底面は調整の痕跡は見られず、器面が非常に荒れている。	胎土は良。色調は汚れた感じの灰白色。	Ⅲ区Ⅱ層下位

第4表　出土遺物観察表



第38図　出土遺物実測図

（小　　結）　遺物量は少なく、いずれも小片で、ほとんど攪乱層のⅡ層土から出土した。城跡年代推定の手掛りとなる青磁については、全部で13片が出土したが、いずれも細片である。

これらについては、実測図に掲げた１～３のような同安窯系の物が大半であり、竜泉窯のものは１片もなかった。５は白磁であるが、これについては口縁直口でやや時代が下る可能性もある。この外、出土遺物の全体的な割合からは、瓦質擂鉢と中世としては古いタイプの須恵器の出土が目立った。他に土師器・火舎・中世雑器・砥石が出土している。量的に少ない所から出土遺物による城跡年代の判断は危険であるが、一応の線引きとして、稲佐城跡を南北朝時代ぐらいの城跡と考えたい。

（大田　幸博）

No.	法量			形態の特徴	手法・調整・文様	備考	出土地点
	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)				
17 中世雑器				底部は平底で、体部に比べてやや薄壁。	外底面以外はロクロを用いた強い横ナデ。特に体部の外面は丁寧な調整。外底面の調整は無。	胎土は良。非常に緻密な焼成。外底面の一部にススが付着。	2 T
18 瓦器 (擂鉢)				体部の上位でやや外反する。口縁の上位は扁平（幅9㎜)。	体部内面と外面の上位にはロクロを用いた横ナデ。体部外面には押えと、かすかに叩きの痕が残る。条線の一単位は3本である。	胎土は良で、砂粒を多く含む。色調は灰黒青色。非常に堅緻な焼成。	Ⅰ区2 T
19 〃				体部は口縁に向い漸次、肥厚。口縁の上面は扁平、（幅1.4cm）体部の上位でわずかに外反。	体部の内外両面に、ロクロ回転による弱い横ナデ。	胎土は良。色調は灰褐色。堅緻な焼成。	Ⅲ区Ⅰ層
20 〃				体部は口縁に向かい漸次、肥厚。口縁は丸味を帯びる。	体部の内面は、ロクロ回転による横ナデ。条線の一単位は3本。	胎土は良。色調は体部内両が灰白色。外面は汚れた感じの白灰色。堅緻な焼成。	Ⅱ区Ⅱ層一括
21 〃				体部は口縁に向かい漸次、肥厚。口縁の上面は幅1㎝で、中央部がわずかに窪む。	体部の内外両面に、横方向や斜め方向のナデが見られる。	胎土は精良、少量の砂粒を含む。色調は灰白黒色。非常に堅緻な焼成。	4 T
22 〃				――	条線は密に掻かれている。	胎土は良。色調は灰褐色。	Ⅱ区Ⅱ層
23 〃				体部は口縁に向かい漸次、肥厚。口縁の上位は扁平（幅9㎜）であるが、中央部がやや窪む。	――	胎土は精良であるが、若干、軟質。色調は灰褐色。条線の磨耗激し。	Ⅲ区Ⅱ層下
24 〃				――	条線の一単位は6本。	胎土は良。色調は灰黒色。非常に堅緻な焼成。	Ⅳ区5 T
25 〃				――	条線の一単位は不明で、溝の深さにバラつきがある。	胎土は良。色調は汚れた感じの灰白色。堅緻な焼成。	Ⅱ区Ⅱ層一括
26 〃				――	――	胎土は良であるが、若干、軟質。	Ⅱ区Ⅱ層一括
27 硬質瓦器 (擂鉢)				体部は中途で特に薄壁（厚さ8㎜）となる。体部はわずかに内弯気味に伸びて、上位でやや外反する。上面は扁平（幅1.1cm）であるが、中央部がやや窪む。	条線の一単位は5本。体部の内外両面とも所々に、横あるいは斜め方向のナデ痕が残っている。体部外面に指押え。	胎土は良、細砂粒をわずかに含む。色調は部分的に灰白黒色、灰褐色、桃薄色。	Ⅱ区　Ⅱ層下位
28 中世雑器				口縁はわずかに肥厚し、やや丸味を帯びる。	体部の内外両面にロクロ転による横ナデが、わずかに認められる。	胎土はやや粗で、若干、軟質。色調は灰褐色。	7 T
29 瓦器				口縁は肥厚し、丸味を帯びる。体部の上位はわずかに内弯する。	体部の外面には、叩きの痕跡と思われる横方向の沈線状の痕がわずかに残る。体部の内面には、全面に斜め方向（右上→左下）の浅い溝（幅約1㎜）が施されている。	胎土は良。堅緻な焼成。色調は灰褐色。	7 T
30 硬質瓦器				体部は底部と比較して、やや肥厚。（器壁の厚さは体部が5㎜、底部が9㎜)、口縁の上面は扁平（幅6㎜)。体部は内弯する。。	体部の内面と、外面の上位はロクロ回転による丁寧な横ナデ、外面の中途より下位は、かなり粗い横ナデ。	胎土は良、砂粒を少量含む。非常に堅緻な焼成、色調は体部内面が褐灰色、外面は灰黒色（カーボンの付着による)。	7 T
31 瓦器				――	体部の外面はロクロ回転による横ナデ。	胎土は良、非常に堅密な焼成。色調はくすんだ感じの灰色。	Ⅳ区Ⅱ層

第5表　出土遺物観察表

No.	法量			形態の特徴	手法・調整・文様	備考	出土地点
	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)				
32 須恵質土器				底部は平底。体部はわずかに外反気味に立ち上がっている。	体部の外面は斜め方向（右上～左下）に、ヘラ削りの痕が見られる。体部の内面は無調整で、器面が非常に荒れている。	胎土は良。非常に堅密な焼成。色調は灰色。	5 T
33 中世雑器				体部外面の上位に沈線あり。口縁の上面は扁平（幅6㎜）。	体部内外両面に、ロクロ回転による横ナデ。	胎土は良。細砂粒をごくわずかに含む。 色調はくすんだ感じの灰褐色。	表土
34 瓦器				――	体部の外面に叩きの痕跡が残る。体部の内面はヘラ磨き。	胎土は良であるが若干、軟質。色調は体部の外面が灰黒色で、内面は灰白黒色。	5 T
35 〃				体部外面に小突帯が付く。	――	胎土は良であるが若干、軟質。色調は体部内面が灰白褐色。灰白黒色。	Ⅱ区Ⅱ層一括
36 〃				頸部は「く」の字に大きく外反。口縁の上部は扁平（幅1.2cm）。	体部の外面にロクロ回転による横ナデ。	胎土は良、細砂粒をごくわずかに含む。 色調は体部内面が灰白褐色、外面は灰白黒色。堅緻な焼成。	Ⅱ区Ⅱ層一括
37 須恵器				体部は底部から鋭く立ち上がっている。	体部の内面は横ナデ。体部外面に格子目の叩きが残る。	胎土は精良。色調は灰色。非常に堅緻な焼成。	表土
38 瓦器				体部漸次、肥厚し口縁に至る。体部の上位は、やや外反する。	体部の外面にロクロ回転による、かすかな横ナデが残る。	胎土は良。色調は灰褐色であるが、体部外面の一部に灰黒色が残る。非常に堅緻な焼成。	7 T
39 中世雑器				底部は薄壁（厚さ4㎜）で、体部は漸次、肥厚しながら内弯気味に立ち上がり、中途で最大幅（厚さ1.5cm）となる。口縁はやや丸味を帯びる。	体部内面と外面の上位は、ロクロ回転によるかなり丁寧な横ナデ。体部外面の中途から下位にかけては、器面が非常に荒れている（使用による損傷の可能性もある）。	胎土は良で、大きめの砂粒を多く含む。 色調は体部内面と、外面の上位が薄茶色で、外面の中途より下位は灰黒色。非常に堅緻な焼成。	Ⅱ区Ⅱ層一括
40 〃				体部は内弯し、中途より直立気味となる。	体部外面に指押え痕が残る。	胎土は精良。色調は乳褐色。堅緻な焼成。	Ⅲ区Ⅱ層
41 瓦器				体部は上位でやや外反し、口縁の上面は扁平（幅1.4cm）となる。	体部外面の上位に花文のスタンプ。	胎土は良であるが、器面は若干、もろい。 色調は体部の内面が灰褐色で、外面は灰色である。	Ⅲ区Ⅱ層
42 中世雑器				体部は肥厚する（厚さ2㎝）。口縁の上面は扁平（幅2㎝）。	――	胎土は良。色調は灰褐色。堅緻な焼成。	Ⅱ区Ⅱ層下位一括
43 〃				体部は「く」の字に大きく内傾する。口縁の上面は扁平である（幅3㎝）。	体部の内外両面に横や、若干、斜め方向のナデが施されている。体部外面の上位に波状文が、2条施されているが、下段面の1条は一部がナデ消されている。	胎土は良。色調はくすんだ感じの灰褐色であるが、体部の外面は小豆色が混じる。体部の外面にカーボンが付着する。非常に堅緻な焼成。	Ⅱ区Ⅱ層下位一括
44 〃				――	2条の突帯間にV字形の工具による縦方向の、短沈線が施されている。	胎土は良であるが、若干、軟質である。色調は褐灰色。	Ⅲ区Ⅱ層
45 〃				――	体部の外面はロクロ回転による横ナデ。体部の内面もナデが施されている。	胎土は良であるが、やや軟質。多孔質で、砂粒、鉱物を多く混入する。色調は体部外面が小豆色で、内面は汚れた感じの褐灰色。	表土
46 〃				――	体部の内面には、ヘラ磨きが施されている。	胎土はやや粗で、軟質である。多孔質で混入物が多く、砂粒黒色鉱物を多量に含む。	表土

第6表　出土遺物観察表

第V章　総　　括

玉東町大字稲佐（いなさ）には小字「城（じょう）」がある。地形的には城として良さそうに見えるが、果たして中世城郭としては遺構がよく保たれているのだろうか。城の年代の決め手があるだろうか。稲佐治部大輔が南北朝時代、南朝方として筑後川の戦に参加していると伝えられるが、どれくらい信憑性があるのであろうか。彼はこの稲佐の武将でよろしいのか。その城がこの小字「城」であると証明できるだろうか、などといった疑問が以前からあった。

しかも、「城」一帯は新幹線建設に伴う宅地移転の候補地にも擬せられているという噂がある。もし、中世城郭として貴重な遺跡であれば、なるだけ開発から守ってやりたい。城の価値判断や区域の確定は緊急事となった。こうして、文化庁の補助を仰いだ今回の調査になったのである。

熊本県は全国的に見ても中世城郭の調査は進捗しているほうだが、その中心となって研究を進めてきた熊本県文化課の大田幸博氏を主査にお願いして測量並びに発掘調査を実施し、さらに、関連の諸調査・研究にも、幸い、町史編纂中であることもあって、それぞれの専門家に委嘱して進めることができた。

(1)　稲　佐　城

石灰岩の採掘が進んでいる木葉（このは）山（282メートル）の断層崖下に高さ40～50メートルの台地が広がり、開析された谷が深く入り込んでいる。その奥まったところ、断層崖下が「城」である。

「城床」と呼ばれるところが最も高く南北65メートル、東西10メートル内外で、周囲は２メートル程度削り落されている。上面は四区に分けられ、１、２、４区には柱穴群があって、何回か小建築が建て替えられたと推定される。３区は一段低くなっているが、堀切とは言えない。

「城床」の周囲の南北120メートル、東西65メートルの地は一、二段の曲輪が回っているが、トレンチ調査に止どめたため、建築物の検出はなかった。南端には幅６メートル、深さ２メートルほどの堀切が残り、その外側は土塁であったと推定された。一方、北端には堀切が必要と考えられるが存在していなかった。

さらに外郭を見ると、東南では通路ともなっている土塁を伴う堀切を隔てて、「城山」と呼んでいる円形の平場がある。周囲の傾斜は急で高く登り難い。その麓、東下の谷には湧水がある。

この谷は山口、白木方面に開いていて、出丸の役割をしたと思われる「城山」、それに二重の堀切と土塁など、最も防備が厳重となっている感じである。南は通路となっている大きな堀切・土塁を隔てて、台地のうえに一段高い出丸ふうの一区があって周囲を削り落としている。西は「寺山」のほうへ次第に下っていく尾根が延びているが、「城床」から130メートルのとこ

ろで崖となっている。このように見てくると、城域は南北250メートル、東西は100メートル、長く見れば200メートル、ほぼ十字形の要の位置に「城床」があり、東と南に出丸、西は二段に切り落としがあり、周囲の谷はすべて20メートルをこえる急な谷で、一応、要害であったことが判る。なお、大手の地名は残っていないが、現在も通路として使用している「灰坂」の道は城の屋形であった「陣内」からの通路であるから、西南から入っていたと考えられる。「灰坂」というのはこの台地の基盤が阿蘇凝灰岩で、この坂に露頭があるからであろう。

「城床」の発掘地点からの出土遺物は極めて少ないが、青磁、土師器、須恵器、瓦器、中世雑器などで、とくに青磁は同安系で14世紀後半ごろのものが多いように見受けられ、16世紀ごろの土器類の発見がなかったことが注目される。

「城床」の建築物の性格については、平山城で屋形のある「陣内」に近いこと、敷地が狭く居住に向かないことなどから、物見櫓などの軍事施設や祠堂のような宗教的性格のものなどが考えられるという見解が、城郭建築に詳しい北野教授から示された。

(2) 陣　　内

つぎに、屋形は稲佐城の西翼と南翼に包まれた入り江のような地形のところにあって、小字は「陣内」、堀や土壘は残っていないものの、屋形らしい地形や地割から概略の姿は推定することができる。その一角には湧水の井戸や若宮さんもあり、稲佐から江田への往還が前を走る。その道筋は「馬場」となり、その傍らに南北朝の「ガランさん板碑」があって、寺院伽藍の存在も推測される。ここ「陣内」の南一帯が今も集落であり、明治10年西南の役で全村焼失したが、旧位置に再興されたことからも、昔に変わらぬ集落の位置であると考えられる。

寺は陣内から北の寺山にもあった。小寺院にふさわしい寺域で、南北朝とも推定される宝塔、戦国時代の笠塔婆・五輪塔片、享禄４年の藤原時忠の名が見える板碑などが残る。ここは慶長検地帳に見える「龍興寺」、『肥後国誌』に見える「立福寺」なのであろうが、南北朝ごろも果たして寺院であったのか、その名を何といったのか、馬場のガランサンとの関係などは判らない。

また『肥後国誌』稲佐村の項に城が２カ所あるように書いているが、そうだとすれば、もう１カ所は稲佐の熊野座神社の西の一帯が候補地であろう。しかし、現段階では薄弱なような感じである。それよりも、『国郡一統志』安楽寺村の項に稲佐治部大輔の城とする伝承が重要であって、往還を挟んで稲佐村と安楽寺村とに城がセットで設けられたと考えることもできるのではあるまいか。

(3) 交通の要衝「稲佐」とその歴史

稲佐城から南に延びる丘の南端には、奈良時代後期から平安時代中期に至る寺院があった。塔の心礎を始め、動いていない礎石もあって、法隆寺式の伽藍配置が想定され、布目瓦は唐草を強調した極めて異色のある文様で注目されている。玉名郡には郡衙のある立願寺系の布目瓦

を出す五遺跡があるほかは、この「稲佐廃寺」（熊本県指定史跡）があるのみである。すぐ南の集落が「白木」であり、南にそびえる「三ノ岳」の麓「原倉」を中心に製鉄跡（松本健郎『生産遺跡基本調査報告書』Ⅰ　熊本県文化財調査報告書第38集）も多く、白木の山北八幡宮が多治比真人真光の勧請という伝承（『肥後国誌』）を持っていることなど、「稲佐廃寺」建立の背景がおぼろげながら考えられる。しかし、稲佐廃寺の復元を手懸けた松本雅明教授によって、貞観元年（859）合志郡から分置された「山本郡」の郡寺である可能性も提案されており、山本郡の範囲を推定しきれないでいる今日、それらの決着はまだ将来のことであろう。

この稲佐の位置は交通の要衝として考えられ、「坂本駅」とする説もあり、その候補地も特定できる。ともかく、古代の官道か、その支道かが稲佐で分岐していたと推定される。

「稲佐廃寺」の跡は「稲佐熊野座神社」が鎮座されて今日に及んでいる。最近、この神社の神像が平安後期の都から将来した女神像の優品で、神像としては九州最古と考えられることが判明した。この熊野信仰は三ノ岳を中心に玉名・鹿本・飽託の諸郡に特に広まっていたことが神社の分布からも推測される。

鎌倉時代には南東の山北郷に地頭として相良氏が入り、西安寺（熊本県指定史跡）を建立して、優美な五輪塔（熊本県指定史跡）を遺した。（田辺哲夫「西安寺の調査」『熊本県文化財調査報告』第８集）

南北朝時代には東方の木葉城には宇都宮氏が居て重要な役割を果たしたことが諸文書から窺われ、稲佐治部大輔が稲佐城と、もしかすると安楽寺城とを守り、白木原・安楽寺においては合戦が行なわれたことも知られている。

室町時代には木葉氏の名が見えるが、この木葉の地に居を構えたという伝承が伝わっていない。また、稲佐氏についても皆目判らないし、稲佐に残る板碑の藤原時忠のことも不明である。一方、山北氏の名が見えるが、戦国時代は在地ではなかったようだし、「西安寺御同宿中」へ宛てた書状もあるので、代わって西安寺が自ら兵を所持していたと考えられる。大友支配下では大友の武将清田氏に山北廿一町が宛行われた。加藤清正が天正15年木葉城に居た宇都宮朝房を謀って殺したとも、同17年木葉城に小森田将監が楯篭ったのを討ったとも伝えられている。（『肥後国誌』）

江戸時代は白木・二俣・西安寺・原倉など山北の諸村は小田手永に、木葉・山口・稲佐の諸村は内田手永に分かれて属した。西南の役の激戦場となった有名な田原坂への登り口として宿場町兼在町の木葉町として成長し、稲佐村の比重が次第に落ちてきて今日に至っている。

(4)　稲佐治部大輔

今回調査した稲佐城は出土した青磁などの年代から南北朝時代のものと考えられる。そのほか、金石文から見ても南北朝時代のものがあり、隣接する白木、安楽寺がこの時代に戦場となったことを記載した文書もあって、南北朝時代に稲佐の地に武将が城郭を構えていたことは疑

いない。

建武３年（1336）西下した足利尊氏は菊池武敏らの軍勢を撃ち破り、東上。その隙に武敏はまたもや挙兵。４月13日安楽寺で足利方の詫磨氏と合戦。翌々年、惣領の菊池武重が死去すると、北朝方の攻勢がいよいよ強まっていく。稲佐の「ガランさんの板碑」が康永２年（1843）と北朝年号を使用しているのも、この政治情勢を反映している。正平３年（1348）征西将軍懐良親王が肥後に入国し、翌年尊氏と仲たがいした弟直義（佐殿・すけどの）の猶子直冬が川尻に到着すると、三つ巴になって抗争することになった。このとき、宇都宮公景は探題一色範氏から木葉村の地頭職を得ている。観応２年（1350）には白木原で佐殿方と南朝方の合戦が行なわれている。

このような鼎立のなかで、南朝方は勢力が振るい、菊池川の川口に当たる高瀬には菊池武尚を置いて高瀬津を支配した。大宰府掌握を図る菊池武光は懐良親王を奉じて、正平14年（1359）筑後川を越えて大保原で少貳方の大軍と戦い、大勝利を得た。この筑後川の戦とも大保原の戦とも呼ばれる戦に稲佐治部大輔が南朝方として参加しているのである。また、宇都宮公景の弟隆房もこの戦に南朝方として参加して戦死しており、隆房は木葉城主と考えられてきた。この宇都宮氏については、今回坂田幸之助氏によって、史料を挙げて初めて考証を行った。

稲佐治部大輔や稲佐氏の名は見えるのはここ１回きりであるので詳細は不明であるが、柳田快明氏は「恐らく蒙古襲来以降の社会的混乱の中でたくましく成長してきた強剛名主の系譜をひく在地領主であろう」と述べている。隣接して城を構える稲佐氏と宇都宮氏とが南朝方として並んで合戦に参加していることからすれば、両者の間には同盟とか、縁類とか、一族とか、よほど親しい関係があったものと考えられる。

正平16年（1361）菊池氏はついに大宰府に進出して11年間に亙る征西府時代が来る。しかし、応安３年（1370）今川了俊が九州探題を命ぜられてからは、北朝方の反攻が始まる。前川清一氏は玉名地方に残る南北朝石造遺品の紀年銘を整理したところ、1336年の３例は南朝年号、1343年～1351年の４例は北朝年号、1353年～1374年の14例は南朝年号、1375年～1390年の14例は北朝年号で、同一年における南北混用がないことが判明した。永和３年（1377）肥前で大敗した菊池氏を追って肥後に入った今川勢は８月、大津山の関（南関町）・白木原で菊池勢を撃ち破っている。この白木原は南関町か玉東町か論が分かれているが、玉東町であってもおかしいところはない。

南北合一後、九州探題の奉行人板倉宗寿が稲佐村の田地二町を寄進している文書があるから、これよりさき、稲佐氏は滅びたかも知れない。（田辺哲夫）

建築物の性格

熊本大学教授　北　野　　隆

はじめに

本来、城とは「領有して他人に立ち入らせない一定の区域」で、その区域を土塁で構築していた。この土塁で囲んだ中に集落があり、この城塁に門を開けた様態が郭であった。ところが、中世になると、本来の城郭の意味から変化して、館や要塞へと発達したように思われる。そして、近世になると、軍事的機能よりも政治的機能が重視され、城下町へと発展していく。現在、私達が目にする城郭は石垣で囲まれ、天守がそびえる様態である。この内、城としても最も学問的に解明されていないのが、中世である。

古代は先述のように大宰府の都府楼を中心とする都城や多賀城など、城郭本来の意で解釈され、中世になると、安土城以来、遺構や文献で研究が可能である。

中世城郭は最近、各地で発掘が進んではいるが、文献的な資料は少なく、具体的解明は今後に期待するところが多く、今回の「稲佐城」についても、結論的なものでなく、全体的考察を述べることにする。

(1)　稲佐城の位置について

稲佐の地区は西側が大きく開け、北から東側にかけて丘が廻り、南に木葉川が流れるところである。この稲佐地区の北東部の丘に稲佐城がある。

日本で古代から地区選定については、中国で発展した風水思想、「四神相応」が重んじられてきた。四神とは、古代中国に成立した東、西、南、北の守護神であり、東（左）は青竜で流水、西（右）は白虎で大道があり、南（前）は朱雀で平地、北（後）は玄武で丘になっているところが城地として適していると言う。

稲佐地区は南向きと言うより西向きになっているが、先の川（木葉川）、大道（三池往還）、平地、丘など古代から軍事、経済面で繁栄が予想される城地として最高の条件を備えている。

今回、稲佐城について発掘が行われたが、城のみで考慮するのではなく、城下町との係わりについても考慮しなければならないだろう。現在、稲佐地区は小字として陣内、馬場、寺口などの地名が残り、当時の城下町がうかがわれる。（図１）

この城下町の北東部、即ち鬼門に当たる地に稲佐城が位置し、しかも稲佐城は平山城に属している。

(2)　稲佐城建物について

稲佐城は平山城に相当し、南北方向に細長い三つの郭よりなる。北より一の郭、二の郭が接

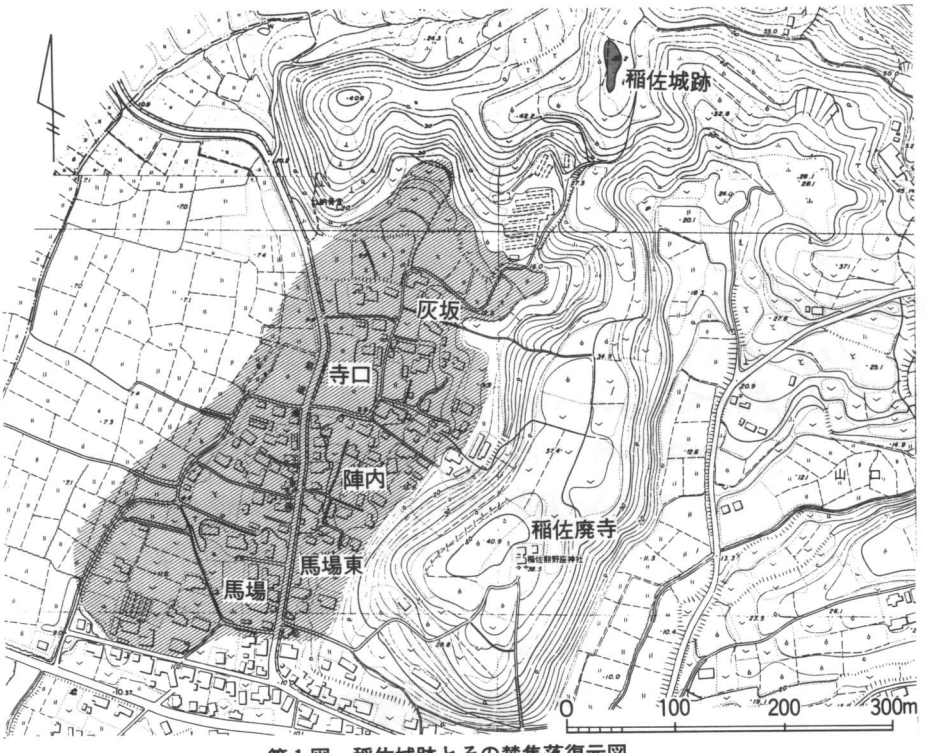
し、離れて三の郭が配されている。これらの郭には土塁や石塁はみられず、一の郭の北側と三の郭の南に堀切りが設けられている。通路は稲佐地区に通ずる南西方向にみられる。（図２）

稲佐城は地勢けわしい山城ではなく、平山城で土塁や石塁もみられず軍事的要素は少ないように思われる。しかし、館（住居）的要素もまた少ない。それは、最も広い一の郭でも、住居にしては狭過ぎるし、意図的に一の郭と二の郭に区分し、更に離れて三の郭を設けている。また遺物も、生活を表すようなものは少ない。日本における中世城、特に南北朝期のものは軍事的要素の強い「要塞」としての山城と、館的要素の強い平山城に分かれるように思われる。稲佐城はどらちにも符号しないように思われる。ただ、戦国期頃になると守護所を府中に移して、城下町と一体として発達するものがみられる。朝倉氏の一乗谷城などがそうである。

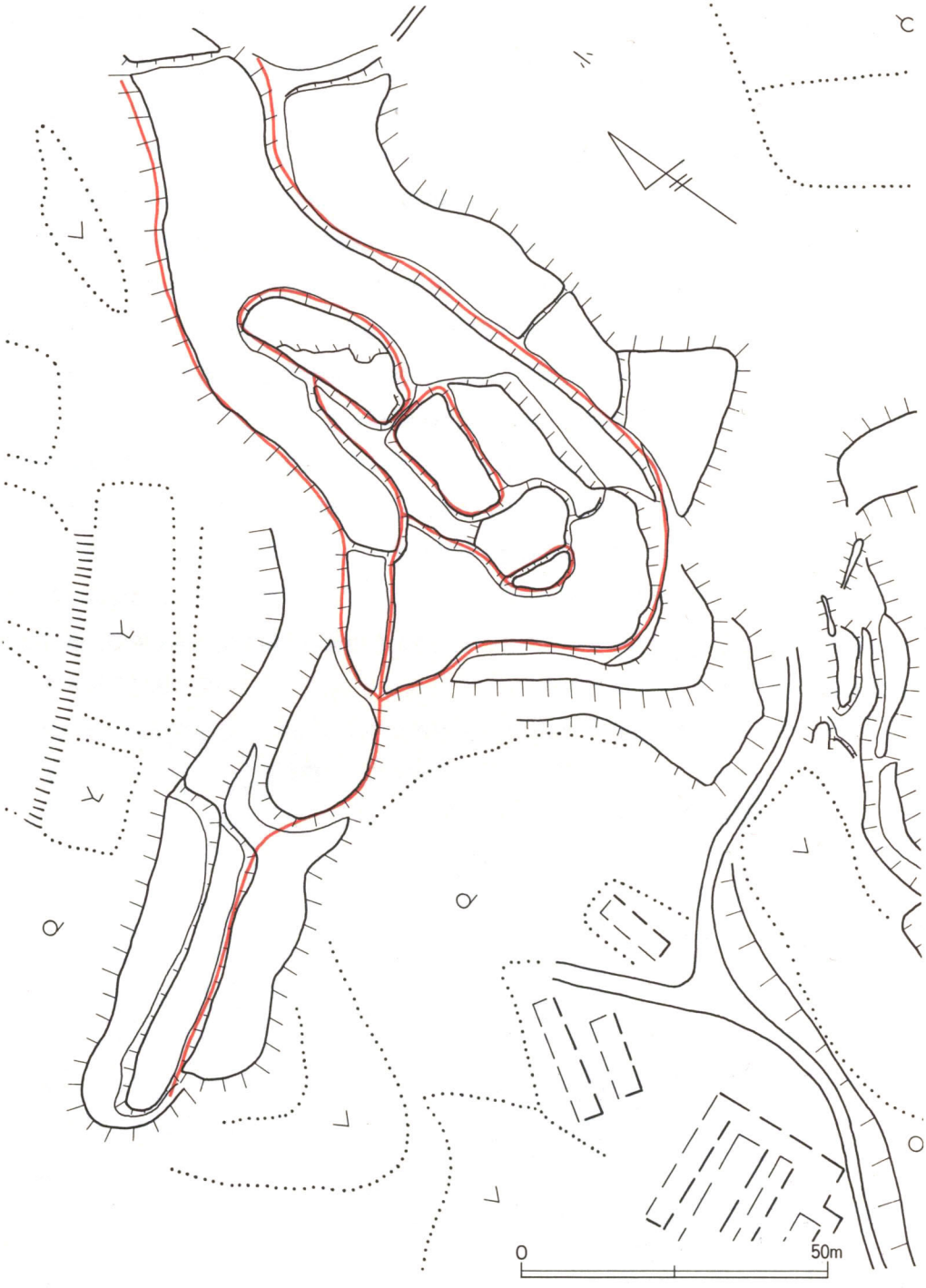
稲佐城も南西に位置する城下町と一体として設けられたものと考えれば、生活は陣内や馬場などの地名が残る城下町が主であろう。このように推定すると稲佐城の機能は城下を防備する役目が考えられる。それは、軍事的と同時に精神的防備も考えられる。

一の郭、二の郭、三の郭から数多くの掘立柱の跡が検出された。推定される建物は軍事的なものとして、物見櫓、鐘楼、兵庫（兵器蔵）であり、精神的なものとして社、御堂などである。これらのどの建物にも相当する数多くの柱穴が検出されている。

熊本県は全国的にも中世城の発掘は進んでいる。しかし、稲佐城のように郭部に設けられていた建物についての検討は数少ない。今後、発掘された中世の建物を検討する中で、稲佐城の建物が具体的に明らかにされるだろう。



第１図　稲佐城跡とその麓集落復元図



第２図　稲佐城跡と古道復元図
（赤で示した線は古道）

稲佐治部大輔と稲佐城の伝承

付論　2

田　辺　哲　夫

『太平記』に「稲佐治部大輔」という武将の名前が見える。その城が玉東町大字稲佐の小字「城」で、遺構もよく残存していることが分かり、関連資料も揃った。従来あまり著名でなかっただけに、類例の少ない南北朝の城を確認できそうなことは大きな収穫といえる。

1．稲佐城についての従来の諸見解

肥後で城の研究をするとき出発点になるのが『古城考』である。それには稲佐城は記載してあるが、「城主年代等分明」と述べている。『肥後国誌』にも稲佐村の項に「城跡　二ケ所アレトモ其名並城主年代等不分明」と書いている。勿論、著者がともに森本一瑞（1784没80歳）で同一人物だから似たような記述になるのは当然であろう。

①　安楽寺城

森本よりさらに古い北島雪山（1697没62歳）の『国郡一統志』（寛文９年1669）名蹟志には、隣接する安楽寺村の安楽寺城の項に「城主稲佐治部大輔也　太平記載之」と記載している。それに引き替え、当の稲佐村では、同書寺社総録、稲佐の項には城主の名はおろか、城の記述さえ見えない。それなのに、丁寧にも再び、寺社総録安楽寺の項に「古城　稲佐治部大輔居城」と出ている。こうなると北島雪山がうっかり勘違いしたのではあるまい。

安楽寺城に稲佐氏がいたという記事に対して、松本雅明教授は稲佐廃寺の報告（『熊本史学』第50号「稲佐廃寺の伽藍配置」1977）のなかで「安楽寺上城と稲佐城が混同されているように思われる」と述べている。しかし、北島雪山が二回にわたって安楽寺のところで稲佐治部大輔の居城と記述していることは、北島の勘違いというよりも、安楽寺城もまた稲佐治部大輔の城であったという伝承が残っていたということではあるまいか。

これより後の『肥後国誌』には、安楽寺（上村・かむら）村の項でも城や稲佐氏のことは取り上げておらず、稲佐村の項に城について項目を立ててはいるが「城主不分明」といって、稲佐治部大輔のことに触れていないのはどうしたことであろうか。『太平記』に稲佐治部大輔の名が出、それが当地の武将とは既に考えられていた筈だから、「城主不分明」と書くことのほうが、むしろ不思議なわけである。『国郡一統誌』は藩主に献上されて宝庫に秘蔵されたため、他に引用されることもなかったとされている（上妻博之『肥後文献解題』）が、その内容については伝わっていたかも知れないし、少なくとも、北島の記述のもとになった伝承はあった筈である。したがって稲佐治部大輔の名が安楽寺村に出て稲佐村に出ないという矛盾に遠慮して、「城主不分明」としてしまったのではあるまいか。

しかるに、田中元勝（1782～1849）の『征西大将軍宮譜』巻九（肥後文献叢書第６巻所収）には、「稲佐治部大輔、玉名郡木葉のあたりに、稲佐村あり、そこか」と述べている。

② 小 字「城」

それを承けてか、明治10年（1877）前後に記録された『玉名郡村誌』には「稲佐城跡　村ノ東北字城ニアリ、城主稲佐治部太夫ト云伝、建築年月等不詳、今耕地トナル」と見えて、場所も的確に示している。さらに、大正12年（1923）の『玉名郡誌』には『肥後古城考』を挙げたあと、「稲佐治部大輔光宇の城跡なりといふ。光宇は筑後川の戦に参加して勲功を立てたり」と述べている。

昭和37年（1962）、雑誌『石人』（6月号）に植木町の郷土史家三城祥象氏は「古城跡の研究」⑤のなかに稲佐城を取り上げ、実地踏査の所見を次ぎのように述べている。「南関街道より分岐するあたりを城の口と言い、街道に沿った部落を馬場と言う。使用水と思われる湧水あり、此の辺、井上、左して陣内は舘の跡であろう。坂を登れば空堀と旧道を兼ねたもので前記稲佐廃寺と区画され、左の高地が城と言う。西部に舌状台地突出空堀で区画され、突出部の丘にも寺山と称する所があり菩提寺ではないかと言う」と。これも小字「城」を稲佐城と見ているわけである。

一方、『肥後国誌』に見えるように、「二ケ所云々」の記事があるから、稲佐村に小字「城」のほかに、もう一ケ所、中世城が江戸時代から考えられていたことになる。それはどう見ても、地形上から稲佐熊野座神社の位置であろうと考えられる。松本雅明教授はおなじく稲佐廃寺の報告のなかで、神社の西・南の深い堀、北の切り落としで馬ひずめのような半円形になることに着目し、御船町豊秋の城塚や荒尾市の田次郎丸などの中世城舘の例をあげ、「いずれの場合も恒久の邸舘跡と考えるより、危急の場合の城砦と考える方が妥当ではなかろうか」と指摘し、糸切り底の土師器破片が出土することもあって、鎌倉・南北朝時代に築かれた、熊野宮以前の古城であろうと推定しておられる。

また、『熊本県の中世城跡』（1978）をまとめた県文化課の大田幸博氏もこの2つの城について触れ、「県指定史跡（稲佐廃寺）の丘陵もその地形から城跡ではないかという。さらに、人の手が加えられていない北東側の斜面部には、土塁を伴う堀切が存在する。外観的には城跡より、舘跡としての色彩が濃い」と、その所見を述べている。

このように見てくると、小字城は伝承からも地形からも城と考えられるが、時代の決め手が今一つはっきりしない。稲佐熊野座神社のところは、その位置や地形から、城郭の一部か館とも考えられるが、その証明が不十分である。稲佐における二つの城とは小字城と神社のところの二つを指したと思われるが、それが正しいかどうかはさらに検証を必要とする。また、安楽寺合戦のことを考えると、地形からみて、その戦場は安楽寺と稲佐との間の街道をはさむ平坦地であろう。安楽寺村の城と稲佐の城とがセットになっておれば、戦場を東西から取り囲むことになり、この交通の要衝を守るのに、まことにふさわしい。したがって、安楽寺（上）城主稲佐氏説も捨てきれない。

2．稲佐治部大輔

稲佐治部大輔の名は『太平記』に1回見えるだけである。『太平記』は小島法師の作と伝えられるが、何回も補訂が行われ、およそ応安4年（1371）ごろには大成されたようである。半世紀にわたる南北朝の内乱を追求した歴史文学で当代随一の巨編である。「太平記読」といって、物語僧などに朗読させていたもので、近世の講釈、のちの講談の起源となった。

稲佐治部大輔が出るのは巻三十三「菊池合戦ノ事」のなかで、延文4年（1359）8月16日の大保原（おおぼばる）の戦いに、菊池武光の部将のひとりとしてである。後醍醐天皇の皇子懐良（かねなが）親王を菊池氏が擁することができるようになったのが貞和4年（1348）。足利尊氏は不和となっていた弟直冬を追討するため、宮方と和睦して文和元年（1352）直冬を九州から追い落とすことができた。その尊氏の代官、九州探題一色範氏もこんどは宮方と少弐頼尚の連合軍に敗れて延文3年には九州を去った。探題追い出しに成功した小弐氏は大友氏と結んで、翌年（1359）、こんどは宮方と戦うことになった。これが普通筑後川の戦と称されている大保原の戦である。4万（あるいは8千とも）の宮方は6万の敵を撃破し、北九州を制圧した宮方は大宰府に征西府を置き（1361）、応安5年（1372）までこれを維持することができ、征西将軍宮懐良親王や菊池氏の最も得意な時代となった。（外山幹夫『中世の九州』昭和53年）

大保原の戦の状況については九州大学川添昭二教授の『日本の武将　菊池武光』（昭和41年）に詳しい。『太平記』には宮方として公家11人、新田一族が8人、侍大将として菊池肥後守武光をはじめ36人の武将が名を連ねている。その武将のなかに稲佐の名があるのである。

『誠忠　菊池累代史』（陸上自衛隊第8師団司令部・昭和44年）にはその武将名を国別に分けている。それを若干増補して述べれば、

肥後勢　菊池肥後守武光、子息肥後次郎（嫡子武政）、甥肥前次郎武信、同孫三郎武明（片保田三郎・武信の弟）、赤星掃部助武貫、城越前守（隆顕）、加屋兵部大輔、見参岡三河守（高子）、庄美作守（忠益）、国分次郎（行喬）、故伯耆守長年ガ次男名和伯耆権守長秋、三男修理亮、宇都宮刑部丞（氏紀・隆房）、大野式部大輔（乗資）、派（みなまた）讃岐守、稲佐治部大輔（光宇）、

肥前勢　白石三河入道（慈鑑）、千葉刑部大輔（胤貞）、鹿島刑部大輔（宗定）、大村　弾正少弼（基明）

筑後勢　溝口丹後守（能之）、合田筑前守（匡宣）、谷山右馬助（宣高）

豊前勢　宇都宮壱岐守（清徳）

薩摩勢　牛糞越前権守（俊舒）、絹脇播磨守（左運）、渋谷三河守（重氏）、同修理亮、島津上総四郎（高澄）

大隅勢　河野辺次郎（高廉）、斎所兵庫助（正冬）、高山民部大輔（義郷）

日向勢　伊藤摂津守（義郷・義胤）、土持十郎（公高）、

不詳　　大宰権小弐（頼令）、波多野三郎（幸康）

稲佐治部大輔の名の（光宇）などは金勝院本によって補ったもの。これらの武将の名簿の信憑性には古く田中元勝あたりから疑問が出されており、金勝院本の実名の杜撰さも指摘されているが、ここでは深くは立ち入らない。稲佐治部大輔が肥後での一武将というより、九州での武将として描かれていることに注目したい。

さて、稲佐という地名は九州では玉東町大字稲佐と長崎市稲佐町と佐賀県杵島郡有明町大字辺田字稲佐とが知られる。佐賀県稲佐では稲佐城があり、「同年（永和２年1376）の春、今川了俊入道、杵島郡へ討入り、２月25日塚崎に在陣し、後藤と相戦ひ、夫より長島へ陣を移して、渋江公治が潮見の城を攻め落とし、稲佐に到りて、白石弥次郎が須古の妻山の城を攻め破り、先づ府中に帰陣す」（『北肥戦記』巻４）とあって、白石氏の城であるとは窺えるが、稲佐氏については触れていないし、長崎市の場合は中世城関係の記事を見ないから、稲佐氏は玉東町稲佐に住んでいたことは疑いないと考えられる。

稲佐城の舘「陣内」

付論　3

田　辺　哲　夫

１．交通の要衝「稲佐」

稲佐の地は古来、交通の要衝であった。大宰府からの官道が肥後に入って、大水駅（南関町）、江田駅（菊水町）、坂本駅、二重駅、蛟稾駅、高原駅、蚕養駅（熊本市）と駅が置かれたことが『延喜式』巻二十八に見える。大水、江田、蚕養の三駅の所在については諸説一致しているが、他の駅の所在地については、異説がかなり出ている。坂本駅については玉東町稲佐とする説が行なわれてきたし（文画堂『熊本県の歴史』昭和32年）、江田から蚕養の間を複線と考える説も出た（志方正和「肥後の駅路」）。昭和53年、北回りの線上に蛟稾駅家と推定される駄ノ原遺跡（駄ノ原長者跡・鹿央町合里）が発掘調査（報告書未刊・この遺跡は豊前街道にあり、廐の柱穴群、円面硯、津・千太・糞などの墨書銘土師器などが発見された）されたりして、北回り線が有力になったようではある。

しかし、大宰府から肥後の国府へ至る幹線の官道のほかに、各郡家に至る支道もあった筈で、稲佐から真西へ現在の国道208号線とほぼ重複する旧道を辿ることが出来、その両側に「大道端」、「大堂」という小字地名が残って、その延長線は「札津」（玉名市伊倉北方）、「大湊」（玉名市中村）に達する。「大湊」は玉名郡衙の港と考えられる地点である（田辺哲夫「菊池川口の港の変遷」『高瀬湊関係歴史資料調査報告書（一）』昭和62年玉名市）。さらに、当時有力な交通手段であった水上交通からみると、菊池川の支流木葉川が稲佐を通過するし、その木葉川は江戸時代まで水運のあった川なのである。

また、稲佐から江田への道路の分岐点にあたる東側の土地（井上平太郎）から須恵器が出土したという大正６年10月10日の九州新聞の記事があって、この地点が駅家と推定されるのである（田辺哲夫「古代の土器、木葉村で発見」が物語る坂本駅『玉東町史編纂ニュース第19号）。

南北朝時代の合戦の場として文書にみえる「白木原」や「安楽寺」も、稲佐を通る道路脇で稲佐の南、北に隣する村なのである。

２．稲佐の地形と遺構

①木葉山　花崗岩の上に石灰岩が乗った山塊が南北に走り、その南端が最高峰（282ｍ）の木葉山で、霊雨山とも称し雨乞いの祈祷をした山であった。江戸時代後期からは石灰の採掘が行なわれ著しく山容を変じている。木葉山の西、南麓は断層崖の下で、高さ30～50mの台地が取り巻いている。稲佐はその西南角にあたる。

②稲佐の周辺　西に安楽寺の台地があって、稲佐との間は入り江状の水田で、「三十六」の坪名も小字名として残り条里制の痕跡がある（『熊本県の条里』県文化財調査報告書第25集）。さらに、その西は広大な梅林牟田で太宰府安楽寺領玉名荘となったところである。南は木葉川が流れ、谷から平野へ移る地点となっている。東は木葉村で、木葉城には地頭宇都宮氏があって、南北朝時代には重要な役割を果たしており、史料も若干はある。江戸時代には宿場町、在町としての機能が稲佐から木葉町へ移って、今日に及んでいる。南東の谷は三ノ岳北麓の山北郷で、鎌倉時代に相良氏の一族がこの地に入って地頭となり、西安寺を建立し、のち山北氏を称している（田辺哲夫「西安寺の調査」『熊本県文化財調査報告書第８集）。

③稲佐「陣内」一帯　稲佐の台地は木葉山主峰の真下から幅200m、南へ700mのびていて、比高40m。北端に稲佐城、南端に稲佐廃寺・熊野座神社がある。また、稲佐城から西に長さ300mほど同様な台地がのびていて、その先端が「丸山」で、その麓に堂があり釈迦如来と薬師如来を祀っている。稲佐城と丸山の中間に廃寺跡があり、「寺山」と呼んでいて古塔碑がある。この寺は慶長13年の稲佐村検地帳にみえる「龍興寺」なのか、『肥後国誌』にいう「立福寺」なのか、龍興寺のあとに立福寺になったのか、にわかには断じがたい。

寺山と稲佐の神社とを両翼として、その間に挟まれた入り江のように奥まった緩斜面の宅地が小字「陣内」である。この一郭の南西角に豊富な湧き水の「井川」があり、南端に「若宮さん」、北西角が「寺口」である。「陣内」の西を南北に道路が通り「馬場」となっていたらしく、小字が「馬場」で、通りの東を馬場東、西を馬場西と呼び集落となっている。「井川」の南の僅かに高くなっている小字「井上」も集落で、ともに家臣団の居住していた地区であろう。馬場西の道路沿いに南北朝の「ガランサン」板碑がある。付近は同じ平坦地で格別に一区をなしているふうでもない。

④「陣内」　両翼が小高くなっていて、その懐の奥まったところである。陣内の中心は489番地の坂本建設の宅地と考えられ、北隣の485番地には以前陣内さんが住んでいた。後ろは崖で、

その上に「やんぼしさん」と呼んでいる３基の古い墓があり、中央は銘がないが、左右は享保３、４年（1718～９）の夫婦の墓である。江戸中期であるので屋形とは関係がない。北翼は幅の広い土塁のように削り残され、１本の掘り割り道が貫通しているが、城への道を考えると古いものであろう。陣内には堀が巡ることが多いけれども、ここでは見当たらない。ただ494番地境重則さんの西を南北に走る下水路はその名残かもしれない。残念ながら地形測量は出来ていない。

⑤寺山　陣内の前の通りを北に行き、東西に延びる丘（丸山）に当たったところが屋敷と考えられ、小字を「寺口」といい、寺屋敷の分だけ浅い谷となっている。井戸もあったそうだが埋められている。裏山を「寺山」と呼び、懐状になった狭い平地が寺地であったらしく、僅かに高い西半分に堂があったという。東半分からは水が涌き、昔は池であったかも知れない。その境界のところに古塔碑が集められている。今回、前川清一氏の調査によれば、そのなかには、南北朝期とも考えられる円筒形の宝塔、戦国期の笠塔婆二基、戦国期の七基分の五輪塔片などがある。裏の高めの藪の中に享禄４年（1531）の立派な板碑がある。藤原時忠の名が刻まれているが、戦国時代の城主であったか、どうかは分からない。また、明治28年再建の石祠があり中尾山立福寺と刻んである。まだ石造物や礎石が埋没している可能性が強い。しかし、地形測量も実施していない。

この寺の仏像も残っている。丸山の西端、県道の近くに共同納骨堂が出来ていて、その裏手に古い堂があり、その中に釈迦如来座像と薬師如来立像がある。保存はよくない。

『肥後国誌』稲佐村の項に、小字「かん（神）崎」に立福寺跡がある旨が書かれている。未踏査ではあるが、「かん崎」は山の中で、寺がどこなのか見当が付かない。「かん崎」は小字寺口の北隣なので、ここの寺を指しているという推定も有り得るし、明治後、寺山に再建したのかも知れない。慶長９年（1604）９月の稲佐村の検地帳に「龍興寺」の名が幾度も見え、屋敷も持っている。この検地帳は実は天正16年（1588）差し出したの検地のデーターであるとされているから、戦国期の遺物の多いこの寺が「龍興寺」であったと思われる。

稲佐廃寺、熊野座神社

付論　4

田　辺　哲　夫

１．稲佐廃寺跡

(1)　宇野廉太郎先生採集の瓦に導かれて

稲佐のお宮、熊野座神社の社殿のあたりから布目瓦が出る。その数種の軒先瓦を見ると奈良時代から平安時代中期にかけての文様である。この時代に瓦を使った建物は郡の役所より上級

の官庁、または官寺か、それに準ずる有力な寺院しか考えられない。それも、どこの郡もというわけには、いかなかったようである。玉名では玉名郡衙関係の遺跡のほかには、この稲佐からしか布目瓦は発見されていない。

昭和26年6月、田辺は宇野廉太郎先生が多年採集された各地の遺物を頂戴した。(『宇野廉太郎採集遺物受贈目録』プリント）宇野先生は篤学の郷土史家で、ライフワークとしては未刊の大著『肥後名家碑文集』があり、熊本県近代文化功労者として顕彰をうけられた方で、晩年は玉名市岩崎原に住んでおられた。先生は丹念にも遺物のひとつひとつに発見地・発見年月日を墨で注記しておられ、稲佐のものは大正8年6月と書いてあるから、先生が木葉の製糸工場にお勤めの頃であろう。

それは軒丸瓦2個と軒平瓦1個であったが、極めて異色のあるものであって、深く興味をそそられた。早速現地を訪れた。一方、機運は重なるもので、東弘典先生（伊倉南八幡宮宮司・当時玉南中学教諭）も相前後して現地を訪ね遺物の採集を行った。翌7月22日玉名高校考古学部を率いて現地の平板測量をおこなうとともに、社殿の東南で瓦の採集を行った。そのあと、東先生から遺物の提供を受け、それらを含めて『稲佐廃寺跡調査報告』（玉名社会科研究会報第6号・昭和28年）をまとめたのである。

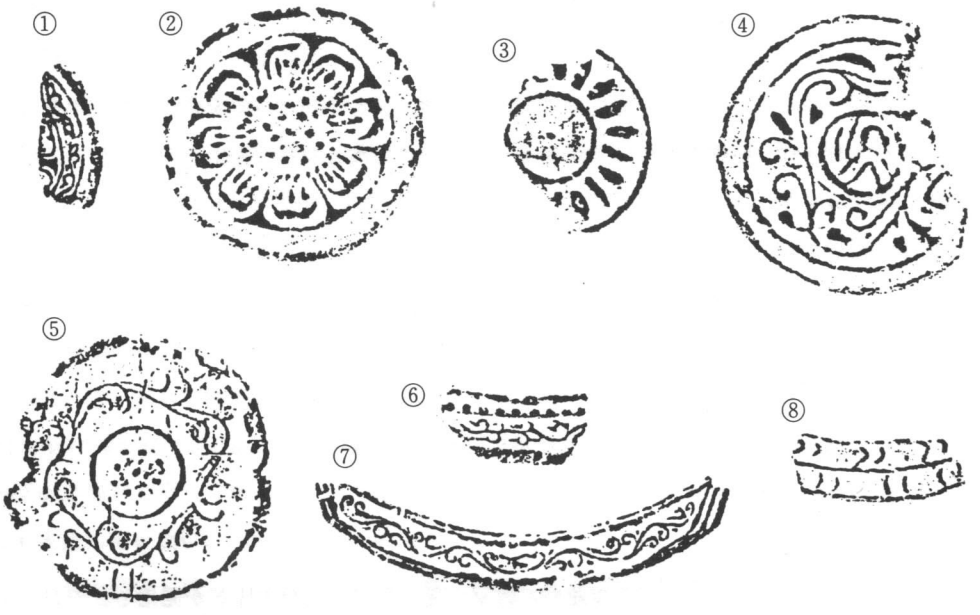
(2) 類例のない稲佐瓦

稲佐の軒丸瓦は5種であって、①複蓮弁に唐草が巡るもの。ただ1片しか発見されておらず、それも中央を欠いでいて蓮子のところがよく判らない。奈良時代の新羅系の瓦である。②複蓮弁であるが、唐草が巡らないもの。制作が雑で平安時代にはいってからのものと思われる。③蓮弁は変化して菊花状の花弁となり、中央部の蓮子は表現されているものの、外側の唐草は省略されていて、極めて簡略なもの。山鹿市の中村廃寺にも同種の瓦が発見されており、平安中期のものと考えられている。④蓮弁に代わって、肉太の唐草文様が一杯になって巡る。中央部は丸い形はしているが蓮子はなく、山形の線がいくつか表現されている。⑤は④を細い線で表現したもの。④も⑤も他に例がない稲佐独特のもので、学会でも注目され、日本考古学協会編の『日本考古学辞典』（昭和37年・東京堂）にも「稲佐廃寺跡」という項目で取り上げられたのであった。

軒平瓦は4種が見付かっている。⑥小さな破片ではあるが、唐草模様の上段に連点文（珠文帯）が巡る。唐草には特徴があり、玉名市立願寺のものに似ている。①に応ずるものと考える。⑦完形で幅29㌢、唐草模様だけが中央から左右に流れるように走っていて、よく見掛ける連点文や三角文などが一切省略されているところからすると、②の軒丸瓦に応ずる軒平瓦と考えられる。⑧これまた例を見ない瓦で、中央に横線が1本走り羽根が生えたように短い曲線が出ている。その曲線は④の中央の円の中の折線とも似ていて④の軒丸瓦に応ずるものと考えられる。他1点は、⑧とよく似ているものの曲線に相当するところが、巻いていて、別のものかも分か

らない。⑤に応ずる軒平瓦がないが、⑧か、他１点のいずれかである可能性もある。

鬼瓦は、私どもの調査のときは発見できなかったけれども、山鹿市立博物館の陳列にあった。このほか、熊本大学松本雅明教授の調査のときにも、瓦を採集された筈だが報告書のなかでは遺物については触れられていない。



第３図　稲佐廃寺出土瓦と心礎

(3)　伽藍配置は法隆寺式

社殿の右手前（東南）の瓦の堆積の間に塔の心礎があった。昭和46年春、松本雅明・高野啓

一・佐藤伸二氏らは稲佐廃寺を訪ね、神殿の床下に動いていない講堂の礎石があることを発見し、47年7月21～27日玉東町の援助を得て試掘をおこなった。

その結果（『稲佐廃寺の伽藍配置』松本雅明。高軒啓一『熊本史学』第50号。昭和52年12月）、塔では中央にある心礎は動いていなかったが、他の礎石は1つを除いてすべて掘りあげられていた。しかし、抜き取った跡の基盤の窪みが検出されたので、塔の復元が可能となった。向きは正しく東西で、柱間は六尺三寸であった。また、神殿の床下に基壇の端があることが確かめられ、六〇尺・南北四〇尺の基壇のうえに、四八尺に二八尺の建物があり、六間四面の講堂が想定された。柱間は七尺、中央は一〇尺である。塔の西側はやや小高くなっている。調査の結果、瓦の堆積や基壇の端が分かり、東西四五尺・南北四〇尺の基壇に、三八尺に三二尺の建物が想定され金堂と考えられる。こうなると、法隆寺式伽藍配置ということになる。中門・南門・回廊も認められるが、回廊は調査する時間がなかったという。

この遺跡はその重要性から熊本県の指定史跡となり、遺跡の復元工事も終わっている。

(4) 稲佐と白木

唐草文様は新羅系といわれている。そして新羅との緊張関係がやや薄らぐ奈良時代から盛行する。新羅と聞くと、稲佐の東南2㎞に「白木」（しらき）という古くからの村落があるのが気になる。白木という地名は新羅に由来することが多いからだ。玉名市津留の「群」（むれ）や菊水町の「花簇」（はなむれ）も朝鮮語に起源があり、古くからの地名である。当時、文化的にも遙かに優れていて指導的地位にあった新羅などの渡来人がすぐ近くに居を据えていたとなると、謎の一端が解けそうな気もする。

(5) 松本教授の山本郡家説

松本雅明教授は山本郡家説を報告のなかで、「建立の背景―古代の山本郡についての疑問―」として述べている。それは江戸時代の山本郡が正院手永ただ一つで狭すぎるということから出発している。貞観元年（859）合志郡を分って山本郡を置いたが、他郡並の7郷であった。それも植木郷は飽田郡となっているから、今の植木町の南部は山本郡に入っていない。7郷のうち、高原（駅名、植木町の北部か）・山本（旧山本村）・佐野（泗水町佐野か）・殖生（西合志町上生〈うわぶ〉か）は見当がつくにしても、他の三重・島口・本井はよく分からない。山本郡で布目瓦が出土するところで、正院の山口の付近・鈴麦・大平は瓦窯跡と考えられ、正院の山口は郡家、富応は郡寺と推定される。しかし瓦の量が多くないし時代も下がることから当初からの郡家と考えにくく、郡倉であったところへ郡家が移転してきたもので、当初の郡家は合志郡家から玉名郡家への道沿いの稲佐に設置されたと推論されている。大胆な推理ではあるが、説得力もある。さらに語をついで、稲佐あたりが玉名郡に編入されたのは伊倉荘の発展によるものであろうと述べられている。

そこで一つの鍵は、稲佐の瓦の最古のものが奈良か平安かという問題である。私は報告書の

なかで、立願寺瓦との関連で平安初期と書いておいたが、立願寺瓦の最古のものが白鳳まで上ることが明らかとなった今日からすると、稲佐の最古の瓦の年代も改めて見直す必要があり、奈良時代の可能性も出てきている。もし奈良時代と考えられれば、松本説は立論の根拠も見直さねばならなくなる。それにしても、最古の瓦が小さい1片であることもあって、最古の瓦をもっと多く調査することが重要となってきている。

2．熊野座神社

稲佐の黄金時代は奈良時代から平安前期にかけての稲佐廃寺があったころである。その繁栄の要因は交通の要衝であったからだと考えている。律令体制に緩みがでて稲佐廃寺が衰滅したあと、同じ場所に熊野座神社ができる。

(1) 熊野信仰

熊野信仰は平安後期に全盛期を迎える。天照大神の母である伊邪那美（いざなみ）の神の墓が紀州熊野、那智の近くの有馬村にあると伝えられ、このことから死者の国としての他界信仰が起こった。それに円錐形の神体山妙法山と禊の聖地那智の大滝とが結びついて、いわゆる熊野信仰が那智の地にまず生まれた。

次いで十津川など三つの川の合流点に上流の水葬者が漂着することもあって、ここでも他界信仰が発生し、折りから盛んになってきた浄土教の阿弥陀如来信仰を修験者が鼓吹し、近くの家津御子（けつみこ）神の信仰と結合したと考えられている。これが熊野本宮である熊野座神社である。家津御子神は素戔嗚尊（すさのおのみこと）とされ、ケツの名のとおり食物の神で五穀豊穣が祈られた。

もう一つ、新宮は御子速玉神を祭る神蔵山での信仰が禊の都合で川の中洲に移ったものといわれている。この那智・本宮・新宮の三つが結合して熊野三山を形成したのである。熊野とは、隠野（こもりの）ということで、死者の霊がこもるところである。そこで、亡者の熊野詣りといって、亡者の霊が集まるとされているので、亡者を慰め功徳を積むため、熊野詣でが浄土教とともに流行したのである。

それも、平安後期は功徳はなるべく数多くがよいとされたから、称名や造寺・造仏も、はたまた、参詣でも、百万遍・三十三間堂・熊野詣でのように数多くおこなわれたのである。ことに熊野詣では白河・鳥羽・後白河・後鳥羽四上皇四代百年間に約百回の熊野御幸があり、一行数千名に及ぶこともあって美々を極めたものであった。

やがて吉野金峰山でも、金＝光り物信仰から死者の霊の集まる地としての信仰が成長し、御室（みむろ）山に納骨・位牌納め・塔婆立てが行なわれるようになった。次いで熊野と吉野を結ぶ山岳ルートが開発され、大峰修行が行なわれるようになって、熊野・吉野の修験の一体化が図られたのである。

熊野信仰は鎌倉時代に入り武士の台頭とともに庶民にも流行するようになり、南北朝時代に

は出羽・加賀の白山・豊前の英彦山（ひこさん）のような修験の地方的中心地が成長していくのである。そして熊野には観音の聖地として補陀落浄土信仰が加えられていく。

(2) 濃密な玉名の熊野神社

熊野信仰は関東・東北に多いとされているが、熊本県では圧倒的に玉名に熊野神社が多い。『熊本県神社誌』によると、県下の熊野神社171社のうち玉名が42社で最も多く、次いで鹿本の27、熊本飽託の24、球磨17、菊池13と続いている。玉名では天満宮が170社で最も多いが、このなかには本来天満宮と違う天神が数多く含まれていると考えられるから、この数は別格である。この天満宮に次ぐのが熊野社で42社、次ぎは阿蘇社20社、八幡宮19社、天皇を祀るもの16社、皇太神宮15社となっているから、熊野社の比重を察することができよう。

この熊野社の分布からすると、金峰山（一の獄）・二の獄（熊野獄）・三の獄（観音獄）を中心にして、その周辺に熊野社や白山社が多いことがわかる。とくに熊本市池上の池辺寺、植木町那智の龍源寺、植木町菱形の圓台寺、玉東町西安寺など平安後期から鎌倉時代にかけての有力な遺物を持つ寺院やその遺跡が散在する。また三の獄の南麓の河内町大多尾の聖徳寺には平安後期と見られる仏像も確認されたし、最近、阿蘇品保夫氏(玉東町史編集委員)によって論文も発表されたのである。(「中世肥後金峰山の修験道について」『山岳修験』創刊号1895）なお、圓台寺や西安寺には白山宮がある。

その熊野社が多い玉名のうちでの分布をみてみると、南関町12、三加和町10、菊水町５、玉名市６、荒尾市３、岱明町・玉東町２、長洲町・横島町１となっている。なかでも玉名市青木の熊野座神社の境内では、磨崖の大梵字が数多く刻まれており、その彫りの深さから鎌倉時代のものと考えられ、熊野信仰が玉名に入った時期の古さを示している。

このようななかで、最近、別項のように、稲佐の熊野座神社の神殿から九州でも最も古いと考えられる平安後期の神像が発見されたのである。

玉名の熊野信仰はそののちも盛んで、玉名市繁根木と伊倉に全国的にみても極めて珍しい補陀落渡海の碑（戦国時代のもの）が遺存しているほどである。

中世城と考えられる諸地点 ——稲佐城を中心として——　付論　5

坂　田　幸之助

さきほど発掘調査された稲佐城の周辺には、いくつかの中世城の伝承や資料がのこっている。

先ず『肥後国誌』の稲佐村の項に「城跡２ケ所アレトモ其名並城主年代等不分明」とある。この２ケ所説を裏づけるものに、松本雅明・高野啓一両氏の「稲佐廃寺の伽藍配置」の論考がある。(1)それによると「塔の復原・伽藍配置の探索、中世における変形を明かにするための試掘を行なった。変貌は神社の勧請のためよりも、それ以前の城砦の構築のために行われたように思われた」、と所見を述べてある。また結論として、「附近から出土する糸切底の土師器片は、それを実証するもので、おそらく鎌倉・南北朝時代に築かれたものであろう」、としている。

この稲佐廃寺は稲佐城の南方約４百米の地点にあたる。

稲佐城の発掘調査の指導にあたった、大田幸博氏もまた、「当該地の南方向４百米に位置する稲佐廃寺（熊本県指定史跡）の丘陵もその地形から城跡ではないかと、さらに人の手が加えられていない北東側の斜面部には、土塁を伴う堀切が存在する。外観的には城跡より、舘跡としての色彩が濃い」(2)といっている。

いずれも稲佐廃寺の域内を城跡、あるいは舘跡として報告されている。

地元でもこの稲佐廃寺の地が古城跡であるという伝承を伝えている。

ちなみにこの稲佐廃寺祉は弥生時代の遺跡でもあり、近代にいたっては、西南の役の激戦の地でもある。近世代より熊野座神社が遷座され、その神殿の奥く深く安置されている神像にまで小銃の鉛弾が命中し、その痕跡をのこしており、この附近の戦いが、いかにはげしかったかを物語るものである。

木　葉　城

木葉城は、別の名を宇都宮城、あるいは、小森田城ともいわれている。この木葉城は、さきの稲佐城の東方約１粁の地にある。

木葉城については、いくつかの文書が散見される、それらの文書を収録してみると、

（包紙）

「建武四年丁丑五月三日沙彌ヨリ宇都宮大和太郎・豊福彦五郎へ被遣候書付壹通入」

山鹿兵藤太郎高弘申、肥後国天草郡本砥嶋井亀河地頭職事、

請文披見訖、両度催促之處、河内浦大夫三郎入道構城郭、向使者放矢、致自放火、不叙用云々、頗招重科歟、所詮、重莅彼所、任法退大夫三郎入道、可沙汰付下地於高弘、若猶及異儀者、載起請之詞、可被注進也、仍執達如件、

建武四年丁丑五月三日　　沙彌（一色範氏・道猷）（花押）

宇都宮大和太郎殿(範綱)　　豊福彦五郎殿[3]

この一色道猷書下の史料に関して、また別の史料も見られる。

（端裏書）

「宇都宮大和太郎　　建武□」

山鹿兵藤太郎高弘申、肥後国天草郡本砥・亀河地頭職事、去二月十四日御教書謹拝見仕候畢、抑任被仰下候之旨、豊福彦五郎相共、今月九日莅彼所、欲令沙汰于高弘候處、河内浦大夫三郎入道・同一族以下与力人等、大勢令楯籠城郭、及自放火、付善悪不可叙用之由令申之、不避退候之間、不及打渡候、若比條偽申候者、

八幡大井御罰於可罷蒙候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

建武四年六月二十九日

藤原範綱(宇都宮)請文　（裏花押）

進上　御奉行所[4]

宇都宮大和太郎の名が史料に現われるのは、いまのところ上記の史料が初見であろう。この史料に見る如く、建武４年は（1337）南朝延元２年で、宇都宮大和太郎は武家方である。

この頃の肥後の状況を概略すると、建武３年（1336）正月８日、菊池武敏の守る菊池城は少弐軍の攻撃にて落城し、菊池氏に応じた諸氏の城も落され、肥後の宮方は総くずれの状勢であった。当時肥後の武士団で武家方として活躍した主な者に、小代氏・詫磨氏・河尻氏・球磨の相良氏等であった。

足利尊氏は京都で敗れ、その弟直義らと少弐氏を頼って九州に落ちてきたのを機に、武敏は２月末から行動を起し、大宰府を落し、３月１日には博多に軍を進めたが、翌２日、多々良ガ浜の戦いにて敗れ菊池に退却したが、追手によって３月20日頃には菊池勢が頼みとする、菊池城も陥落した。足利尊氏は、一色範氏に九州の総指揮を命じて、４月大宰府を発して東に向った。この尊氏の東上を機会に菊池勢は行動を起すのである。

このような情況のもと、つぎに出る資料に、

延元３年（1338）４月８、９両日、菊池武重は肥後飽田の国府に襲来せる小弐氏の軍勢と戦ってこれを撃破し、玉名郡木葉に至って宇都宮大和太郎隆房の城に入る。

これを聞いた少弐頼尚は、直ちに兵を派遣して攻撃せしめたが、武重、隆房はなんなくこれを撃退した。[5]

上記の木葉城攻防戦を裏づけるものに、つぎの文書を見ることができる。

武重（菊池）以下凶徒等、打出肥後国府（飽田郡）、去八・九両日、及合戦、引籠宇都宮大和太郎（隆房）城之由、」守護代宣兼馳申之間、相催軍勢、可發向也、先不日馳向彼城、可被致軍忠、於訴訟事者、忿可有其沙汰、仍執達如件

建武五年四月十一日　　大宰少弐（花押）

詫摩七郎殿[6]

前記の木葉城攻防戦の直後に見える文書に、

ゆつりわたす、かう二郎か所々事、

一ひこの国あきた（飽田郡）の内ほうちやうのはしのつめの田地一町、

一同国同むらさうさ町一町

一同国府中内宮寺屋敷一所

一同国ゆけの村

一同国平嶋内板井名一所

一同国とりのすのきミうらの（菊池郡）地頭職一所

一同国岩原内十町

一筑後国三原（御原郡）東郷内十町

右、件の所々ハ、範綱重代相伝私領也、然間、かう二郎丸ニゆつりあたふるところ実也、たのさまたけなく、子々孫々ニいたるまで、ちきやうあるへく候、先立も譲状かきあたへ候、もししせんの後日と申しさいのために、重譲状如件、

建武五年九月廿三日　　範綱（宇都宮）在判[7]

これらの文書の建武５年（1338）は即ち南朝延元３年であるが、前掲文書（注３）では宇都宮大和太郎は、一色範氏の武家で、宇都宮範綱であり、同じく前掲史料（注６）では宇都宮大和太郎は、菊池武重の宮方で、宇都宮隆房となっている。ちなみにこの（注６）の文書を『南北朝遺文』で見ると、やはり宇都宮大和太郎は範綱と注がある。このことは、範綱が隆房ではないと思われるので、「詫摩文書」と、『南北朝遺文』の編者のいずれかの思いちがいだろうと考えられる。

ただ云えることは肥後宇都宮氏は初めのころは武家方であり、あとで宮方となったと云うことである。

文書（注６）も肥後宇都宮氏を解明する上で重要なものであろう。

足利尊氏の庶子でありながら父尊氏よりうとまれ、高師直より追われた直冬は正平四年（一三四九）九州にのがれ、同年九月肥後の川尻幸俊を頼って川尻に到着した。

少弐頼尚は機をのがさず、直ちに直冬のもとに馳せ参じ、北上計画を進めた。直冬は翌正平五年三月から行動を開始し、まず、直冬の将今河五郎直貞が川尻より船にて肥前に上陸、武雄を根拠として各地に一色軍を破る。頼尚は筑後を経て筑前に進入し、直冬は川尻幸俊・詫摩宗直らを従えて玉名・飽田の間に打出てて、鹿子木・宇都宮を攻む。

川尻が勢、雲霞のごとくなりて、宇都宮三河守が城をかこむ、一日一夜合戦し

て、討るゝ者百余人、創を被る者数を知らず、遂に三河守、城を攻落され、いまだ死生の境を知らず。[8]

前記の資料については、左の足利直冬軍勢催促状の文書がある。

今河五郎直貞所差遣也、相共事子細令談合、急速可有發向之状、如件

貞和六年二月七日　　(花押)

詫摩別当殿[9]

この文書の貞和六年は南朝正平5年（1350）である。

また、この木葉城落城については、つぎの少弐頼尚が書状を相良氏に宛ててその近況を報じた文書に、

又京都東国無為無事候、相構々々不可有驚動之儀候、又中国事、高越州下向之上者、無不審候、鎮西もことなる事候者、彼人可有下向由、被仰付旨、承及候、

御音信悦入候、肥前肥後凶徒蜂起間、為對治、去三日令出府之處、肥後国大和太郎左衛門尉城ヲ佐殿御手河尻幸俊、詫摩宗直以下輩取籠候て攻之由、依有注進、差遣筑後孫次郎並筑前・豊前両国守護代同軍勢等候了、当国事、不可有子細候歟、郡内事、一向憑存候、大田方ニも有談合、相構々々可有警固候、肥前事、沙汰最中候、是又不可有子細候、恐々謹言

四月廿日　　頼尚（花押）[10]

また、これに関して別の文書も見ることもできる。

是秋、詫摩宗直、応足利直冬、與川尻幸俊、合兵、攻抜宇都宮三河守城、又撃鹿子木氏、降之由是、直冬兵威稍振、故、九州、分為三、或屬直冬、或応尊氏、或従南朝、有鼎足之勢、尊氏、命鎮西、撃直冬、氏泰、最預其催、而、察高師直、所為内応直冬、末輙出兵[11]

これらの文書によって、貞和6年・南朝正平5年（1350）に木葉城は、直冬軍の詫摩宗直・川尻幸俊の攻撃によって落城したことがわかる。しかし、右の文書では[10]、大和太郎左衛門尉、つぎの文書[11]には、宇都宮三河守であり、前掲の文書[3]は、いずれも宇都宮大和太郎となっており、この点注意すべきであろう。

宇都宮佐田氏系図によると、三河守を稱えているのは隆房である。おそらく木葉城落城の頃は、この宇都宮隆房ではなかろうか。

木葉城の落城した年の12月20日に、同族の宇都宮因幡権守公景が、探題一色範氏より肥後では岩野村と木葉村の地頭職を補任された。これは公景が一色範氏の軍にあって戦功を認められてのことである。

豊前国元永村元永弥次郎入道跡内同国伊加田庄武藤対馬左近将堅入道跡内肥後国岩野村薩摩彦次郎跡内同国木葉村壱岐弥太郎跡内地頭職事、爲勲功之賞所宛行也、早守先例、可致沙汰、仍執達如件

観応元年十二月二十日　　沙弥（花押）

宇都宮因幡権守殿[12]

この文書の豊前国元永村、元永弥次郎入道、と豊前国伊加田庄、武藤対馬左近將監入道は多分少弐氏の一族か、あるいは深い関係のある者ではないだろうか。

肥後国岩野村の薩摩彦次郎と、肥後国木葉村の壹岐弥太郎も、ともに宇都宮氏の同族であろう。そしてこれらが、いわゆる肥後宇都宮氏と考えたい。

岩野村薩摩彦次郎は、宇都宮氏の二世景房と、その孫である、四世通房、それに五世頼房の子、豊房の三人がともに薩摩守を名乗っていることから、薩摩を名乗っていたのではないか。一方の木葉村の壹岐弥太郎も、四世通房の弟の範景が壹岐守を名乗っているので[13]、これらに深い関係のある一族であろう。

上記の史料、観応元年（1350）一色道猷の宛行状によって、いまゝで一般に、木葉村の地頭職となった公景の代官として、弟の隆房が、この地に赴いたと考えられているが、前掲の史料などによって観応元年よりも、かなり早い時期から肥後宇都宮氏は実在したのである。

このあと宇都宮隆房が資料に現われるのは、正平14年（1359）の筑後川の戦いである。

安楽寺城

安楽寺は、稲佐城の西に隣接するところで、資料に出るのは、『国郡一統志』[14]のみである、それによると、安楽寺村の安楽寺城の項に「城主稲佐治部大輔也、太平記載之」と記されている。

この安楽寺についての文書に、詫摩宗直軍忠状の案文がある。

詫摩別当太郎宗直、自去建武三年以来、所々合戦致軍忠事

一建武三年四月十三日、肥後国安楽寺合戦時、被射宗直乗馬訖、同舎弟新左衛門尉令分捕訖、

（中略）

暦応三年三月　日　　源宗直

進上　御奉行所[15]

この文書にいう安楽寺合戦とは、建武３年（1336）４月、一色範氏と菊池武敏との戦いで、その年の３月、多々良が浜の戦いに菊池勢は敗れ、退却し菊池城までも追手によって攻落された直後で、この安楽寺合戦にても菊池武敏軍は敗れたのである。

白木原合戦

白木原は稲佐城より南々東約２粁、木葉城から南約１粁の地である。

つぎに掲る観応３年（1352）の伊東氏祐軍忠状写に出る白木原合戦と、そのあとの永和３年（1377）今川了俊感状の白木原合戦もともに、この白木原に比定されている古戦場の地である。

伊東大和守氏祐申軍忠事

右、去観応二年十一月日肥後国大水山関凶徒打出之間、八月八日禮部御発向御共仕、白木原

御合戦抽忠勤、其後志々岐・板井原令南郡御共、隈本在陣仕、御帰陣之時、又板井原・山鹿御共申訖、將又去年八月日参筑後国瀬高御陣、肥後国南郡御共仕、詫摩原九月廿九日御合戦抽戦功、後板井原・水嶋・菊池御勢仕、同筑後国田刑致御共警固畢、今年7月馳参丸山御陣、令前原在陣以後、岩野城攻之時施忠功、当御陣板井原致宿直、所々御勢使御共仕、至于今不退、勵忠心上者、且下賜御判、為備後證、言上如件、

観応三年十二月　日

(足利直冬)[16]

(花押影)

この白木原合戦は、去る観応元年（1350）に直冬軍の詫摩宗直・川尻幸俊の連合軍により落城しているので、宇都宮三河守らによる木葉城の奪還作戦とは考えられないだろうか。

去十二日肥後国白木原合戦之時、致忠節、若黨衛藤五郎、太田七郎左衛門尉、野村新左衛門尉・帆足左近將監被疵云々、尤以神妙、弥可被抽戦功之状、如件、

永和三年八月十八日　　沙弥（花押）[17]

田原下野守殿

上記の文書の永和3年は南朝天授3年（1377）で、この第二次白木原合戦もまた、菊池軍が今川の軍勢に敗れたもので、史料は、白木原合戦における田原下野守の戦功を今川了俊が賞したものである。

山　北　城

ここに山北城と題したが、実は山北城に関する資料も、伝承も伝わってはいないので、ここでは旧山北村の村名をとって便宜上山北城とした。

山北城という伝承はないが、玉東町上白木地区に、「城山」と「城林」という地名がある。ここは稲佐城より東南約5粁の地点で、現在は果樹園に造成されて町内屈指の蜜柑の産地となり、したがって、地形も変化して城跡としての面影もない状態である。

文書に、伊口意心覚書がある。

覚

一、城可請取之事、

一、慮外相働候者成敗事、

一、中務事口上理有之、

十一月廿一日

伊口飛弾守意心（花押）[18]

西安寺

この文書について、『西安寺の調査』の著者田辺哲夫氏は、「城請取のことであり、これが、

小葉城のことを指すかどうかは明らかではない」[19]といっている。

西安寺は旧山北村の中心で、相良氏の一族である山北相良氏の本拠地と伝えられる。集落の上手には鎮守の白山宮があり、その西の裏手に鎌倉時代の見事な大型の五輪塔群がある、古くから有名な石造塔で最大なるもので、高さ235㎝、薬研彫の梵字が四面の各層にあり、地輪に「奉造立五輪卒都婆一基　正嘉元年丁巳八月　日　当寺大檀那　遠江国住人相良五郎左衛門入道浄信」と銘があり。その左隣に「正応元年相良三良左衛門入道浄口」、右隣には「嘉元二年相良三郎左衛門入道浄位」の銘がある。また白山宮のすぐ裏手の杉木立の中に、礎石、根石、縁石、雨溝の石列などの遺構が発掘され、本堂らしい建物の跡がある。ともに県指定史跡となっている。[20]

このような遺跡もあり、山北相良氏の本拠地という根強い伝承もあり、城跡、あるいは、館跡があったであろうことは、うなずけられる。このほか二俣地区にも陣林という地名がある。いずれにせよ山北城のことは今後の調査に期待される。

〔註〕

(1) 『熊本史学』　第50号　昭和52年

(2) 熊本県文化財調査報告　第30号　『熊本県の中世城跡』　昭和53年

(3) 『南北朝遺文』　肥後志岐文書　瀬野精一郎編　昭和55年

(4) 『南北朝遺文』　肥後志岐文書　瀬野精一郎編　昭和55年

(5) 『純忠菊池史乗』　植田均著　昭和４年

(6) 『大分県史料』　詫摩文書

(7) 『南北朝遺文』　豊後詫摩文書　瀬野精一郎編　昭和55年

(8) 征西大將軍宮譜　『肥後文献叢書』

(9) 『大分県史料』　詫摩文書

(10) 大日本古文書　相良家文書

(11) 『編年大友史料』　田北学編　昭和21年

(12) 『熊本県史料』　佐田文書

(13) 宇都宮文書　佐田氏系図　尾立維孝編　大正４年

(14) 『国郡一統志』　北島雪山　昭和46年

(15) 『大分県史料』　詫摩文書

(16) 『南北朝遺文』　瀬野精一郎編　昭和58年

(17) 『大分県史料』　　入江文書

(18) 『熊本県史料』　宝成就寺文書

(19) 『西安寺の調査　玉東町文化財調査報告』　昭和42年

(20) 『熊本県大百科事典』　昭和57年

文献による諸情勢 ——南北朝期を中心に——

付論 6

柳 田 快 明

稲佐城が構築された南北朝時代の肥後国は九州の中でも両朝が熾烈な戦いをくりひろげた地域である。「肥後事、根本大綱侯」(1)という、しばしば引用される文言は、当国の政治的戦略的位置を的確に表現している。とりわけ肥後北部と大宰府を結ぶ地域は、攻防が一段と激しかったところで、稲佐(城)はまさにこの圏内にある。(2)けれども、内乱の動向と稲佐（城）との関連を直接的に明示する史料は非常に乏しい。したがって、当地域周辺における動乱の状況なり経緯なりを概述することで表題の趣旨にかえたい。

中世の稲佐は、『肥後国誌』や「新撰事蹟通考」（肥後文献叢書３）などによれば山北郷に属する。文献上の所見は、元享元年(1321) ３月「阿蘇社進納物注文写」(3)で、初米を阿蘇権大宮司に上納する所々の一つとして「一所いなさ（出仕衣裳新）」とある。ほかに木葉・山北・小田・江田・玉名・高瀬・伊倉・大野といった稲佐と同じ現在の玉東町内の地名および近隣の玉名郡市の地名がみえる。山北や高瀬・伊倉などと並列的に表記されていることからすると、この頃の稲佐は独立した一所であったことをうかがわせる。周辺には、東に蓮華心院領（のち久我家領）山本荘、西に安楽寺領玉名荘・筥崎宮領伊倉荘、北には仁和寺領玉名荘や醍醐寺領山鹿荘といった荘園が存在した。(4)

建武３年(1336) ２月、京都で敗れ西下してきた足利尊氏は、３月２日の多々良浜の合戦で、菊池武重の弟武敏や阿蘇惟直・惟成ら後醍醐天皇を支持する軍勢を打破り、４月東上の途につく。敗れた菊池武敏は、一旦は退却したが、再び挙兵し、４月13日、詳細は不明だが、稲佐の西隣り安楽寺で詫摩氏らと交戦した。またこの直後には合志郡鳥栖原で、８月には益城郡唐河で今川助時、小代氏らと戦っている。(5)この年の３月17日、足利尊氏は大友氏泰（建武政権下の肥後国守護）に山本荘・玉名郡千田荘などの地頭職を給与しているが(6)合志郡には合志氏が、玉名郡には小代氏がいて尊氏方にくみしていた。またこの時期の守護である少弐頼尚は山鹿荘を領知しており、これらを併せて南朝の中核菊池氏を牽制・封じこめる態勢がつくられていた。(7)少弐氏にあっては、守護代饗庭宣兼が軍事指揮をとっており、少代氏・詫摩氏などがこれに従った。

延元３年（暦応元、1338)、菊池氏の惣領武重が死去した。その後、菊池氏一族の結合が不安定なこともあって、貞和元年（興国６、1345）には、合志幸隆が菊池深川城を占領するなど北朝方の攻勢が目立った。しかし、同４年（正平３、1348）征西将軍懐良親王が肥後に入国し、さらに翌1349年に中央での尊氏・直義の確執をうけて、直義の猶子直冬が川尻に到着すると状況は一変した。殊に直冬下向の波紋は大きく、守護少弐氏も直冬に加担した。当知行安堵をも

とめる武士団の動揺もあって、直冬の勢力、いわゆる佐殿方は一気に勢力を増大した。(8)詫摩氏は直冬から筑後国守護職をはじめ、山本荘・臼間野荘地頭職を宛行れており(9)小代氏は一族が分裂・対立している。こうして北朝幕府方の分裂により、探題一色方・佐殿方・南朝方が鼎立する状況となった。宇都宮公景が、一色範氏から次のような宛行状をもらったのもこの時である。

豊前國元永村元永弥次郎入道跡同國伊加田庄武藤對馬左近將監入道跡内肥後國岩野村薩摩彦次郎跡内同國木葉村壹岐弥太郎跡内地頭職事、為勲功之賞所宛行也、早守先例、可致沙汰仍執達如件

勸應元年十二月廿日　　沙弥（花押）(10)

公景は、かっての守護宇都宮尊覚の孫で、内乱期には兄冬綱（守綱）と共に幕府方であった。上記の史料にみえる前知行者は、おそらく少弐氏一族ないしその与同人であり、公景は直冬下向後も一貫して幕府方であったことを示している。

観応元年（正平５、1350）11月、直冬は大宰府に入ったが、翌年８月白木原（玉東町白木に比定される）で佐殿方と南朝方の合戦があったことが、同３年12月「伊東氏祐軍忠状写」(11)にみえる。同文書によれば、山鹿荘内志々岐や合志郡板井原で、10月には関城（南関町）で戦いがあったことがわかる。

幕府の分裂は、南朝方の勢力を強めることとなり、観応３年２月写の奥書のある「安楽寺注進目録」(12)には「凶徒押領」（この場合の凶徒は南朝方）の荘園として玉名荘・大路曲荘などを載せている。また正平９年（文和３年、1354）には、菊池武尚が「玉名西郷大野別符中村内高瀬清源寺敷地」を寄進していることがみえる。(11)武尚は保田木に城を構え、子息武国からは高瀬氏を称しして菊池に至る舟運の拠点である高瀬津の支配を掌握した。(14)近傍の丹倍津とならんで、有明海・島原湾といった海上交通の軍事的重要さは、懐良・直冬の肥後到着方法をみても明白である。

このように肥後北部において南朝の勢力が強まる一方で、直冬は没落、一色氏は長門へ遁走と北朝勢力は後退した。大宰府掌握をめざす懐良・菊池武光らは、延文４年（正平14、1359）筑後川を渡り、大保原で少弐氏と相対した。『太平記』には、少弐方６万、宮方８千とあり、宮方の軍勢の中に稲佐治部大輔（光宇）の名がみえる。彼と稲佐城とをストレートに結びつける微証はないが、稲佐の地名を冠する唯一の領主である。おそらく、蒙古襲来以降の社会的混乱の中でたくましく成長してきた強剛名主の系譜をひく在地領主であろう。また伝承によれば、この合戦において、宇都宮公景の弟隆房が宮方として戦死したという。

大保原合戦の後、少弐氏は弱体化し、正平16年（康安元年、1361）親王らは念願の大宰府を掌中にし、以後11年間にわたるいわゆる征西府時代を迎える。

応安３年（建徳元、1370）今川貞世（了俊）が九州探題に補任され、幕府の本格的反攻がはじまる。同５年（1372）大宰府は陥落し、宮方は高良山へ退却したが、ここも２年後には放棄

して菊池へと撤退した。応安７年11月、大友親世の子義匡らが大水山の関を越えて侵入、小島城、目野、千田・山本両荘の宮方を追い払い、翌８年には了俊自らが山鹿へ陣を構えた。この間、小代氏が「井倉庄分并同國大野伊勢守跡貳拾伍町」を預け置かれる(15)など、着々と北朝勢力が回復していった。ところが、水島の陣で、了俊が少弐冬資を謀殺したので、天授元年（永和元年、1375）には肥後北部は宮方の支配下に復したが、大勢は如何ともしがたかった。永和３年３月肥前蜷打合戦で菊池勢は大敗、これを追って今川軍が再び肥後へはいってきた。一度退却したあと、８月には大水山の関、白木原(16)で菊池軍を撃破した。翌年四月の詫磨原合戦で菊池軍は奇蹟的勝利をおさめたが、翌年６月には、隈部本城そして良成親王のいる染土城も陥落して、内乱の雌雄を決することになる。

内乱終結から17年後の応永16年(1409) ４月７日の「板倉宗寿寄進状」(17)によれば、九州探題渋川氏の奉行人板倉宗寿から高瀬の談義所平等院に対して「稲佐村田地弐町」等が寄進されている。板倉氏の稲佐村支配の様相は勿論のこと、所領となる経過についても不明である。

註

(1) （康永２年）７月５日大友氏泰書状（草野文書、『南北朝遺文』九州編――以下「遺文」と略称――1939号）

(2) 稲佐の交通上における位置については、田辺哲夫氏「稲佐の歴史」（玉東町史編纂　ニュース第３号　1985年）参照。

(3) 阿蘇家文書之２－314頁。

(4) 工藤敬一氏「肥後北部の荘園公領制―山鹿荘と二つの玉名荘」（『文学部論叢』17号、1985年）参照。

(5) 暦応３年３月日詫磨宗直軍忠状（詫摩文書『大分県史料』12）など。

(6) 建武３年３月17日足利尊氏下文（筑後大友文書『遺文』480号）

(7) 杉本尚雄氏『菊池氏三代』（1966年）、工藤敬一氏『山鹿市史』古代・中世（1985年）川添昭二氏『九州中世史の研究』1983年）参照。

(8) 川添昭二氏「九州における観応政変―足利直冬発給文書の考察を中心として―」（『九州史研究』所収1968年）

(9) 足利直冬充行状（詫摩文書）。

(10) 一色道猷宛行状（佐田文書『熊本県史料』２など）

(11) 日向伊東家故状（『遺文』3507号）

(12) 太宰府天満宮文書（『遺文』3340号）。この文書の分析については、杉本・工藤・前揚書などを参照。

(13) 清源寺文書（『熊本県史料』１）

(14) 高瀬については、森山恒雄氏「十六世紀の高瀬・高瀬津をめぐる一試論」（『玉名の自然と文化を守る会会報』５号）がある。

(15) 今川了俊宛行状（小代文書『熊本県史料』１）。

(16) 永和３年８月18日今川了俊感状（入江文書『大分県史料』10など）。同年９月毛利元春軍忠状案（毛利家文書『今川了俊関係編年史料』上）

(17) 宝成就寺文書（『熊本県史料』）。

稲佐熊野座神社の女神像

付論　7

大　倉　隆　二

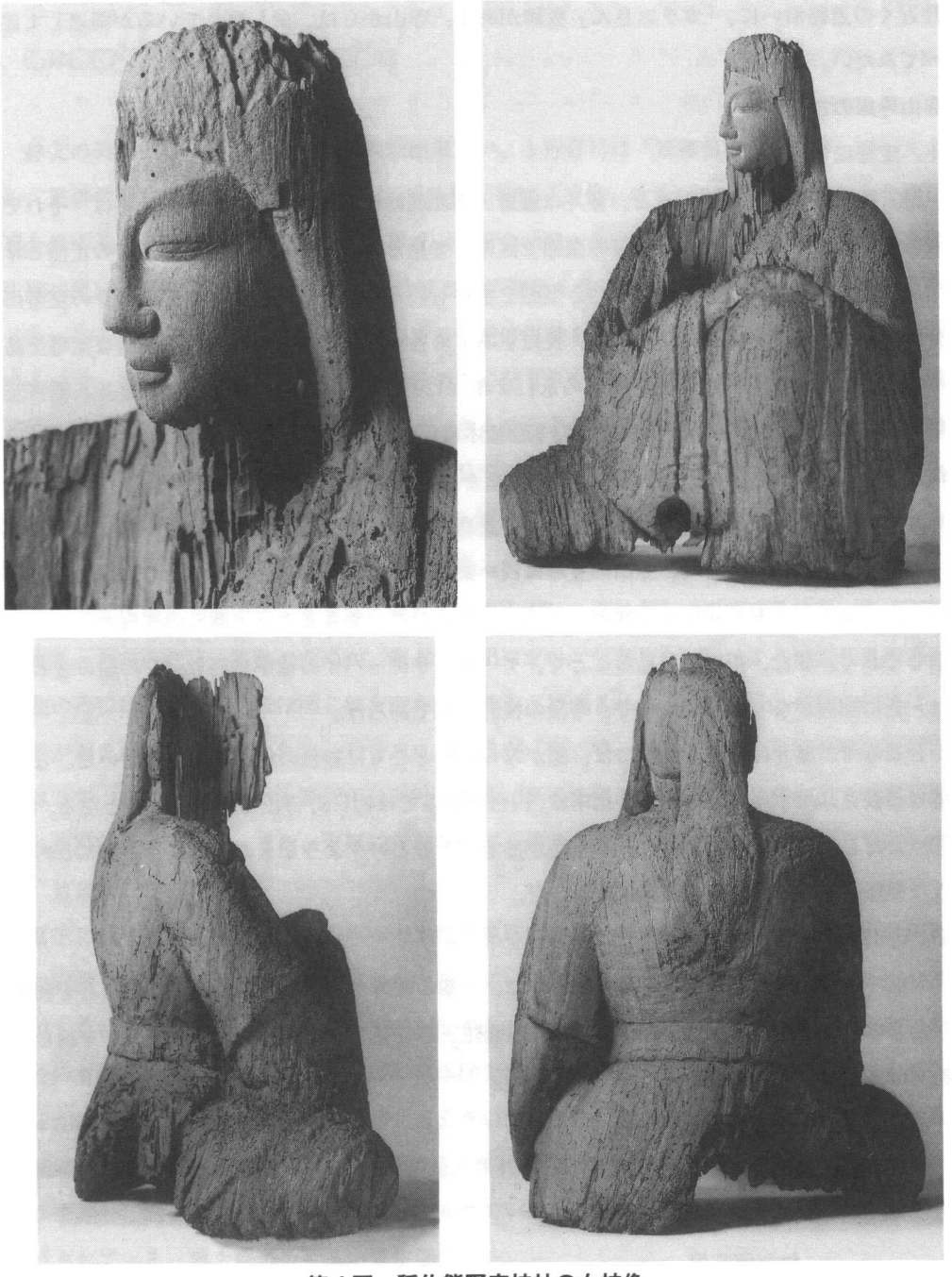
昭和62年８月22日、本町の稲佐城調査一環として稲佐廃寺を境内に含む稲佐・熊野座神社にまつられている神像を調査する機会を得た。ここでは、平安時代の作と推定される木造女神像が発見されたので、それについて簡単に報告しておく。同社には、ほかに江戸時代の作と見られる男神像と女神像（背中に西南の役の弾丸が残る）が安置されているが、いずれもかなり簡略な地方作で、平安時代の一連の像が白蟻などの食害にあって傷んだため、江戸時代後期頃２度に亙って改作されたものと考えられる。

さて、本像は、伊弉册尊と伝えられ、神殿の向かって左側に安置されている。樟材の丸彫で、像高は現状で74.8㌢のほぼ等身大の像である。元は美しく彩色が施されていたと思われるが、今は下地塗りの白い顔料が微かにのこるだけで、体の中心部は白蟻に喰われてまことに痛々しい。しかし、左半分だけ残った顔の表情の気高さや、片膝を立てて座った（片膝を立てた座りかたは古代の方式）膝上に淀みなく美しく整えられた袖の線は、彫刻に当たった仏師（当時は神像も仏師が彫ったと思われる）の並々ならぬ技量を物語る。ことにギリシャ彫刻を思わせるノーブルな顔は、おそらく日本の女神の中でも最も美しい女神像の一躰であったことを想像させる。そして、この大きさや美しさは、本像の造立が遠く平安時代にまでさかのぼることを示し、袖の線が浅く優美に整えられていることなどから見て十世紀頃の作と推定される。全国的にみると、紀州・熊野速玉神社ほかに幾つかの女神像が伝えられ、そうした先例に倣って造られたものと考えられるが、現在までの報告例を見る限り熊本県下はもとより九州随一の女神像と目される。

おそらくほかの２躰も元は平安時代の作があったけれども、本像よりもっとひどい虫損に遭ったため新しく造り替えられたものと思われる。それはまことに惜しまれるが、たまたま遺された本像が発見されたことは、今回の一連の調査の中で最大の成果であったと言っても過言ではない。この発見は単に平安時代の優れた神像が発見されたというだけでなく、これによって、熊野座神社や稲佐の地は歴史的に一段と重要性を帯びて来たのである。例えば、熊野座神社の境内が平安時代まで続いた古代寺院「稲佐廃寺」跡にあることは、古代寺院と熊野信仰（神道）との関係（地方における神仏習合の問題）や、熊野信仰の肥後への進出過程などを考えるうえで貴重な手掛かりを提供することとなったのである。また、すでに松本雅明博士によって、稲佐廃寺は山本郡の郡寺であった可能性が指摘されているが、これとは別に、同じ木葉川（菊池川の支流）水系でここから程遠くない鹿本郡植木町那知・熊野座神社に平安時代末期以来の懸仏などが伝来していることを考え合わせると、さらに様々な問題が浮かびあがってくる。こうした本像の存在をめぐる様々な問題については、今後諸方面からの解明が試みられるものと期

待したい。

今後の問題としては、以上のような歴史・文化史の解明とは別に、すでに虫損著しいこの女神像をいかに後世に残していくかということがある。神社、県・町の文化財担当者をはじめ地域住民一体となって考えていかねばならない。



第4図　稲佐熊野座神社の女神像

稲佐の石造物について

付論　8

前　川　清　一

稲佐寺山の寺床には、宝塔・五輪塔をはじめ古石塔がある。ここは、中世の稲佐城趾西南の方向に当るところで、城主の菩提寺の存在が窺われるところだ。また、この他に稲佐熊野座神社近くの道路沿いに、「ガランさん」板碑がある。寺山からは、少し離れているが関連して述べてみたい。

寺山寺床の古石塔群

1．宝塔について

県下の宝塔を見渡してみると、多くは鎌倉・南北朝時代の遺品だ。これらの宝塔は、それぞれ特色を示しているが、特に塔身の型態で区分して見ると、鹿本郡菊鹿町の相良寺の正治2年（1200）のような角宝塔とも言うべき型態を示すものと、オーソドックスな丸型塔身の宝塔に分けられる。また、丸型の塔身では、長短をふくめ各種の型態がみられる。代表的な宝塔をあげれば、人吉市温泉町の勝福寺宝塔の永仁2年（1295）の「りんご型」、山鹿市藤井八幡宮宝塔の弘安6年（1283）の「なつめ型」、鹿本郡植木町円台寺の円台寺塔の正嘉元年（1257）の「円筒型」がある。（註①）寺山の宝塔は、このなかの「円筒型」であり、県下では、寺山の宝塔を含めてもわずか2例だ。円台寺の宝塔は、正嘉元年の造立であり、梵字は薬研彫で文字も整って美しい。これに対して、寺山の宝塔は浅い薬研彫の梵字を刻み、種字はやや力強さに欠けている。また、蓮弁の状態も時代差を歴然と示すものだ。参考までに、両者の写真と拓本とを示しておく。また、拓本図に見るごとく、ア・サ・サク・バイの種字を刻む。この組み合わせは、他に類例がなく珍しいもので、今後の検討課題であろう。

ところで、蓮弁には丹、梵字には、墨がみられ所どころに彩色の痕跡が残されている。なお、塔身の長さに対する塔身の径との比率は、円台寺宝塔では約1.8、寺山宝塔では1.97となる。（註②）ただし、この比率により、造塔年代が推定できるというようなものではなく、単にこのような型態があるとの認識を頂ければ幸いだ。

2．寺山享録4年板碑

寺山の寺床の湿地帯の東方、西斜面竹林に、一基の板碑が立っている。扁平な自然石を利用したもので、上部には、二重の月輪の中に阿弥陀三尊の種字（キリーク・サ・サク）を刻む。銘文は、次のように記す。

「　預□□□□□全□□□
　　預修善根七分全得衆等
　　永覺禪定門
　　妙永禪定尼

道永禪定門

妙榮禪定尼

享禄四天辛卯十月吉日　藤原時忠記之

□禄□□己□□□□□□□□□□□□□白

銘文の最初の行は、叩き潰されて判読出来ない。２行目には「預修善根七分全得」の一文から、逆修供養塔であることが知られる。「預修」とは「逆修」ともいい、生前にあらかじめ仏事を修することをいう。死後に行う仏事は、六分の功徳が受けられるが、逆修を行った場合は、生前に既い一分の功徳を授かるので合せて七分の功徳を受けることとなる。「七分全得」といった。ここに刻まれた４名の人物は、いずれも逆修供養をおこなうことにより、法名を授かったもので、これを「寿位」といった。年号の下に記された「藤原時忠」の名も恐らく「永覺禪定門」もしくは「道永禪定門」のいずれかと考えられよう。このような逆修供養塔は、本県の場合、戦国時代に何百もの逆修板碑の造立を見ている。

ところで、この石塔を造立した中心人物は、藤原時忠であるが、遺憾ながら、どのような人物であるか特定することができない。寺山にあった寺院は、稲佐城の南西に当たることから、あるいは稲佐城主の菩提寺であった可能性もあろうが、この城主も、戦国時代においては不明である。最後の行は、浸蝕のためか、殆ど判読出来ない。しかしながら、よく観察してみると、最初の行には、２行目とほぼ同じ銘文があったろうと推測される。おそらく、最後の行には、年号が刻まれていたと思われる。元号の２文字目が「禄」で、干支が「己」に該当するものは、享禄２年（1529）もしくは永禄12年(1569)となる。享禄２年とすれば、人為的に潰され再利用された可能性があろう。また、永禄12年となれば、追刻と考えられる。

３．笠塔婆について

県下には笠塔婆の古例としての熊本市本光寺笠塔婆安元元年(1175)をはじめ、植木町の円台寺の石塔など、幾つかの貴重な笠塔婆が存在している。このような特色をもつ地域に寺山の笠塔婆も存在していることになろう。しかしながら、寺山の笠塔婆は一見して前者とは比較にならない貧弱な造となっている。実測図や拓本図でもお判りのように、蓮弁に著しい特色が見られるが、蓮弁の退化した状態とみて差し支えないであろう。この種の蓮弁が出現してくるのは戦国時代以降のことであり、この笠塔婆の造立年代を示している。梵字は、ア・バン・タラク・サクを刻む。蓮弁には丹、梵字には墨がひかれている。この笠塔婆の塔身の上部には、ほぞが設けられている。地上高の大変低い笠塔婆だ。

上記の笠塔婆の他に、ともに並べられている笠塔婆がある。4面のうち1面は崩れていて文字の刻まれたことさえ確認できない。ただし、残された3面から推して、4面にアの梵字が刻まれていたと推測できよう。梵字には、張りが見られず戦国時代を逆上り得ないものであろう。

4．五輪塔について

現在、寺床には、五輪塔の残欠を集めて一基だけ組み立ててある。実測図にみるように、地輪は、別石であることが知られる。この五輪塔にしても、戦国時代を逆上るものではない。なお、寺山寺床には、7基分の風・空輪が散見される。いずれも、戦国時代を逆上り得ないものだ。

5．阿弥陀石像について

寺山寺床の上り口に、「明治28年9月／再建」と刻む石祠のなかに、写真のような阿弥陀石像がある。舟型光背には、拓本図のように、「中尾山／立福寺」と刻んでいる。石祠は、凝灰岩製で、後世の作だ。阿弥陀石像の造立年代は、少なくとも石祠が崩れて再建される以前であり、型態から、江戸時代後半の造立を窺わせている。

6．「ガランさん」板碑について（註③）

稲佐寺山の南西およそ300メートルの県道沿いに「康永二年八月八日（1347）」の紀年銘をもつ「ガランさん」と呼ばれる石塔がある。玉東町最古銘の板碑だ。（註④）安山岩の自然石で造られたもので、地上高150センチのものだ。写真と実測図を示してみた。ところで南北朝期の元号は、造立者がどのような立場にあったかを、ある程度、窺い知ることができる点で貴重な資料と成りえよう。参考までに、「熊本県の南北朝期の元号を刻む石造遺品一覧」を作成してみた。一覧表の西暦の（　）は、北朝の元号を使用したものだ。

荒玉地区に於いて、南朝銘の石造遺品は、建武の頃と、その後は正平8年（1357）から文中3年（1374）のおよそ15年間で17基をみることができる。一瞥して荒玉地区に於ける南朝勢力の盛衰を見事に反映している。

この間の事情は、正平3年、後醍醐天皇の皇子懐良（かねなが）親王が宇土にご到着され、以後菊池氏に擁せられたこと。また、名和長年の孫、顕興が一族を率いて八代へ下向したこともあり九州南朝方に有利な戦局を作り出したこと。一方、北朝方の内紛が九州までも波及したことなどを上げることができる。多少の説明を加えておくと、まず足利尊氏の子に異母兄弟の義詮（よしあきら）と直冬（ただふゆ）があり、また尊氏と直義は実の兄弟だ。武家方の内紛の起こりは、尊氏の妾の子の直冬を冷遇したことに始まる。弟直義は、これを哀れみ養子としたので直義さえも実権を奪われることとなった。正平4年（北朝年号では貞和5年）、親子あるいは兄弟の争いが生じると、直冬は九州へ逃れてきたので九州の武家方もまた二分化されてしまう。しかし、正平7年（北朝年号では文和元年）直義が殺されると、九州での直冬の信望

は失墜し、ついに九州より追いだされた。この間、九州武家方は内紛を繰り返す一方、南朝方と手を組む者も生じた。

このような状況下、正平14年（北朝年号では延文４年）の大保原（おおぼばる）の戦いの勝利のあと、大宰府は南朝方の征する所となる。しかし、それも文中元年（1372北朝年号では応安５年）までで、以後しだいに北朝方の勢力に圧されてゆく。今、「熊本県の南北朝期の元号を刻む石造遺品の一覧」（註⑥）をみるとき、往時の諸豪族が、いかに時勢に対処してきたかを物語るかのように思われてならない。

ところで、稲佐の「ガランさん」は、何者により造立されたのであろうか。この件については『太平記』に登場する稲佐治部大輔なる人物が注目されよう。田辺哲夫先生の「稲佐の歴史」〔註⑦〕によれば、当地の人物とみて間違い無いとのことから、稲佐氏と何等かの関連があったとみることが自然であろう。しかし、ここで問題なのは、正平14年の大保原の戦いの時、稲佐治部大輔は、菊池方の武将として参戦していることだ。康永２年より16年後のことだ。この16年間の後半は、前述したような南朝方の著しい発展期に相当している。このことにより、稲佐氏も多くの北朝方武将のように、菊池氏の勢力が増大するにつれて、南朝方に帰順したと考えられよう。しかしながら、僅かな銘文のみであり、いずれにしても推測の域をでるものではない。

まとめ

以上、稲佐城に関連した石造物をみてきた。このなかで、寺山寺床に残された石造物すべてが、立福寺のものと考えるのは早計であろう。資料によれば、『国郡一統志』の「国郡寺社総録」のなかには「護法山立福寺　阿弥陀薬師」とある。これがやや時代の下った『肥後国誌』によると、「立福寺跡　禅ノ古跡ト云　小堂　一ケ所」と記されている。また、『肥後国玉名郡村誌』には「立福寺趾　村ノ北字神崎ニアリ」とある。これにより、立福寺は、『肥後国誌』の記された江戸中期には、既に廃寺となっていたことが知られよう。ここで気に掛かることは、『国郡一統志』が「護法山立福寺」であるのに対し『肥後国誌』では「中尾山立福寺」としていることだ。この違いは何を物語るのであろうか。

一方、慶長９年９月付（天正16年の検地）の『検地帳』を見ると「龍興寺」の名が見られる。しかし、慶長13年の検地帳では、その名が見あたらないことから、多くの中世寺院がそうであったように、国衆の滅亡とともに荒廃していったものと推測されよう。なお、「龍興寺」がどの地域にあったかは、推測の域をでないが、このように考えた場合、寺山であった可能性は高い。これらの疑問は、寺山の総合的調査により、いずれ解明されることであろう。

また九州の大勢に相反するような元号の使用が相良氏に見られることは、興味深いことだ。

註①　筆者は、仮に宝塔を区分するに当り、丸型については塔身とその径の比率により次の３区分とする。「りんご型」では１以下、「なつめ型」では１～1.5以下、「円筒型」では1.5以上とする。いずれ、別稿にて詳述したい。

註②　勝福寺宝塔は0.75、藤井八幡宮宝塔は1.17となる。

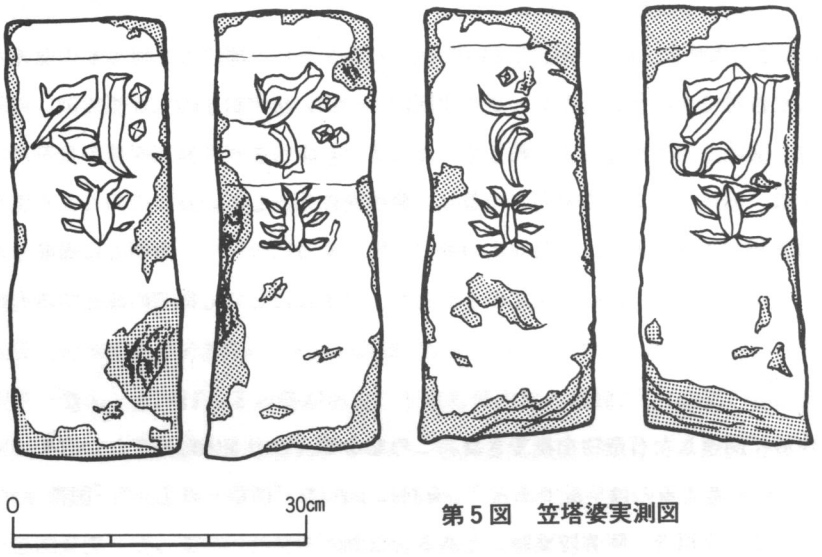
註③　『玉東町史編纂ニュース第六号』所載の「玉東町の石造物(一)」を改稿した。

註④　この板碑は、現在地より西方およそ200メートルほど先より移設されたものだ。

註⑤　作成するにあたり、福島作蔵氏のご協力を頂いた。

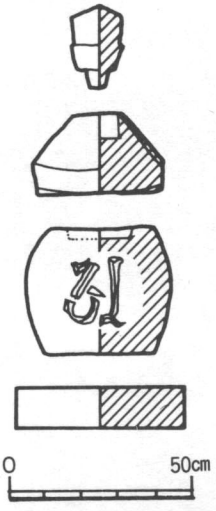
註⑥　西征府の衰退にともない、しだいに八代へと、南朝元号の使用例が限定されて行くことが確認されよう。

註⑦　『玉東町史編纂ニュース第五号』所載の「稲佐の歴史３」による。

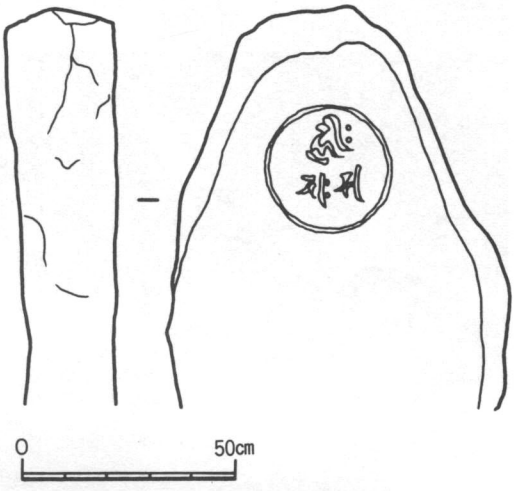


第５図　笠塔婆実測図

第６図　笠塔婆拓本図

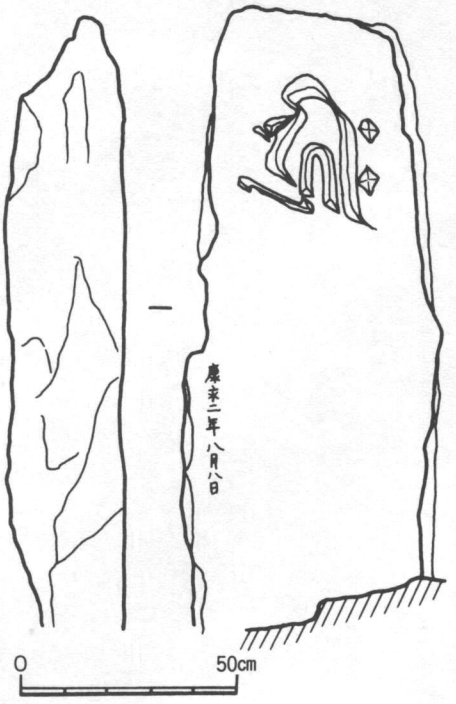


第７図　五輪塔実測図

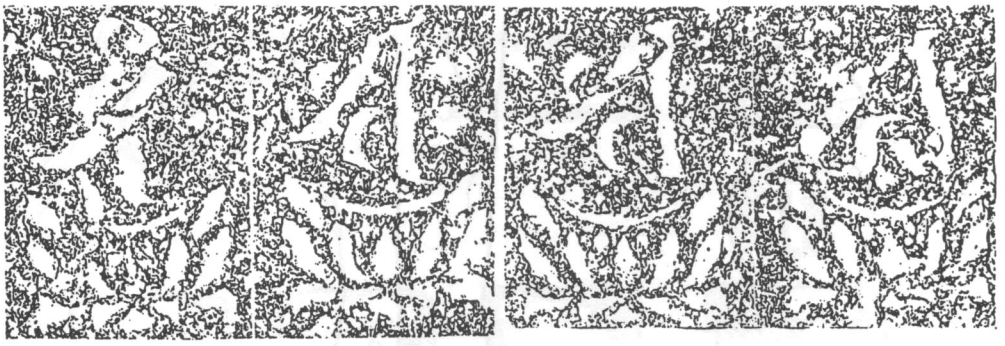


第８図　享禄四年板碑実測図

第９図　阿弥陀石像拓本図



第10図　「ガランさん」板碑実測図



バイ　　サク　　サ　　ア

第11図　寺山の宝塔拓本図

第12図　寺山宝塔塔身

第13図　植木町円台寺正嘉元年宝塔塔身

第14図　寺山石碑（享禄４年）

第15図　阿弥陀石像

第16図　寺山　宝塔図

熊本県の南北朝期の元号を刻む石造遺品の一覧

西暦の（　）は北朝年号

No.	紀　年　銘	西　暦	所　　在　　地	型　態
1	元徳４年10月15日	1332	荒尾市椛賀庭寺跡	五輪塔
2	□弘３年３月	1333	菊池市大字亘堂山東福寺	五輪塔
3	建武元年11月20日	1334	宇土郡不知火町長崎薬師堂	五輪塔
4	建武元季11月23日	1334	熊本市池田町稗田	角柱
5	建武２年８月７日未時	1335	菊池市大守袈裟尾北福寺	五輪塔
6	建武３年正月	1336	菊池市亘東福寺	五輪塔
7	建武３年２月29日	1336	上益城郡益城町赤井城跡	五輪塔
8	建武３年４月	1336	下益城郡城南町下宮地	五輪塔
9	建武３年10月日	1336	玉名市伊倉町北方本堂山	五輪塔
10	建武４季卯月５日	1337	熊本市池上町平の山中	笠塔婆
11	建武□４月８日		玉名郡岱明町大字馬場	五輪塔
12	建武□９月20日		荒尾市平山小路（南関町地福寺より移設）	五輪塔
13	康永２年２月27日	(1343)	南関阿久重打越	板碑
14	康永２年８月８日	(1343)	玉東町稲佐馬場	板碑
15	正平４年２月30日	1349	菊池市大字雪野塔の本	五輪塔
16	正平４歳次２月23日	1349	菊池市隈府正観寺	宝篋印塔
17	貞和５年９月９日	(1349)	玉名郡菊水町江田	宝塔
18	正平５年８月19日	1350	宇土市西岡宇土城跡	五輪塔
19	観応２年８月18日	(1351)	玉名市高瀬宝成就寺跡	五輪塔
20	正平８年２月日	1353	下益城郡城南町隈庄城ノ崎	層塔
21	正平８年４月17日	1353	荒尾市宮内出目浄業寺	五輪塔
22	正平８季８月２日	1353	荒尾市宮内出目浄業寺	五輪塔
23	正平８季11月25日	1353	荒尾市下井手三ノ宮八幡宮	塔婆
24	正平11年11月21日	1356	玉名郡南関町下坂下阿蘇神社	層塔
25	正平12年５月19日	1357	荒尾市宮内出目浄業寺	五輪塔
26	正平12年５月初日	1357	荒尾市宮内出目浄業寺	五輪塔
27	正平12年７月日	1357	熊本市小山町諏訪神社	塔婆
28	正平12年10月27日	1357	荒尾市宮内出目浄業寺	五輪塔
29	正平13季４月２日	1358	下益城郡豊福字上城長伝寺跡	五輪塔
30	延文３年	(1358)	球磨郡多良木町大字黒肥地蓮花寺跡	五輪塔
31	延文４年12月17日	(1359)	御船町滝尾横野	板碑
32	正平15年４月□日	1360	八代市興善寺町畑中鎮守堂	板碑
33	正平15年７月３日	1360	荒尾市上井手籠宮祠	五輪塔
34	正平15年８月６日	1360	荒尾市本村	五輪塔
35	正平16年６月29日	1361	八代市袋町三丁目医王寺	石塔

36	正平16年10日23日	1361	鹿本郡植木町伊智坊	宝篋印塔
37	正平18年９月10日	1363	荒尾市宮内出目浄業寺	五輪塔
38	貞治２年□□16日	(1363)	球磨郡深田村荒茂勝福寺跡	五輪塔
39	正平19年８月１日	1364	菊池市大字西寺字中西寺西福寺	石塔
40	正平19年８月20日	1364	下益城郡松橋町大野妙法寺	板碑
41	正平19季10月18日	1364	熊本市坪井長延寺	五輪塔
42	正平20年９月□	1365	玉名市元玉名	五輪塔
43	正平21年８月21日	1366	玉名郡岱明町下村	五輪塔
44	正平22年２月１日	1367	玉名市築地蓮華院	五輪塔
45	正平22歳６月８日午時	1367	山鹿市千田中屋敷	五輪塔
46	正平23年	1368	球磨郡山江村山田字味園	板碑
47	□平24天正月	1369	山鹿市石字向田西福寺跡	摩崖仏
48	正平		玉名郡岱明町上村城	五輪塔
49	建徳３年210	1372	八代郡宮原町今天神	板碑
50	文仲２年８月中□	1373	玉名郡玉東町山北西安寺跡	五輪塔
51	文中３年８月23日	1374	玉名郡岱明町大字馬場	五輪塔
52	永和元年10月１日	(1375)	玉名市築地蓮華院	五輪塔
53	天授４年卯月日	1378	菊池郡大字龍門字寺尾	宝篋印塔
54	永和４年７月10日	(1378)	荒尾市宮内出目浄業寺	五輪塔
55	天授４年12月14日	1378	八代郡千丁町吉王丸萱原	板碑
56	康暦元年６月26日	(1379)	荒尾市宮内出目浄業寺	五輪塔
57	天授５年９月30日	1379	下益城郡小川町中小野長谷寺	五輪塔
58	康暦２年３月５日	(1380)	荒尾市宮内出目浄業寺	五輪塔
59	康暦２年３月10日	(1380)	球磨郡深田村荒茂勝福寺跡	五輪塔
60	永徳元年７月25日	(1381)	玉名郡三加和町下岩光行寺	卵塔
61	永徳元年11月19日	(1381)	玉名市築地蓮華院	五輪塔
62	天授第７歳	1381	八代市妙見町懐良親皇墓地	宝篋印塔
63	弘和元年12月５日	1381	下益城郡小川町小川妙音寺	宝篋印塔
64	弘和２年11月27日	1381	千丁町吉王丸北中の丸	板碑
65	弘和４年10月10日	1384	八代市本町春日大明神	板碑
66	至徳２年２月14日	(1385)	玉名郡三加和町下岩孫丸小屋敷	卵塔
67	至徳２年２月日	(1385)	玉名郡南関町大字下坂下米田竹林寺跡	五輪塔
68	至徳２年12月23日	(1385)	玉名市高瀬大覚寺	五輪塔
69	元中２年21日	1385	八代市岡町中洪福寺跡	五輪塔
70	元中４年２月日	1387	阿蘇郡小国町満願寺	宝塔

71	至徳４年11月18日	(1287)	玉名郡三加和町下岩瑞岩寺	卵塔
72	嘉慶２年３月29日	(1388)	球磨郡錦町木上岩城岩城跡	板碑
73	嘉慶２□８月20日	(1388)	山鹿市大字杉日輪寺	五輪塔
74	康応元年４月27日	(1389)	玉名郡南関町大字下坂下北辺田円福寺跡	五輪塔
75	康応元年４月27日	(1389)	玉名郡三加和町下岩瑞岩寺	卵塔
76	明徳２年８月１日	(1390)	荒尾市宮内出目浄業寺	五輪塔
77	明徳２年８月20日	(1390)	玉名郡長洲町二丁目六地蔵	宝篋印塔
78	元中８年２月日	1391	球磨郡深田村荒茂勝福寺跡	五輪塔

※一覧表の西暦の(　)のものは、北朝年号のもの。上記番号の７・45・65については、『古塔調査録』、60・67・については『南関の史跡』、48については福島作蔵氏、69については桑原憲彰氏，72については菖蒲和弘氏の教示による。
※49の紀年名は、建徳３年２月10日のことである。

第17図　ガランさん板碑（康永２年）

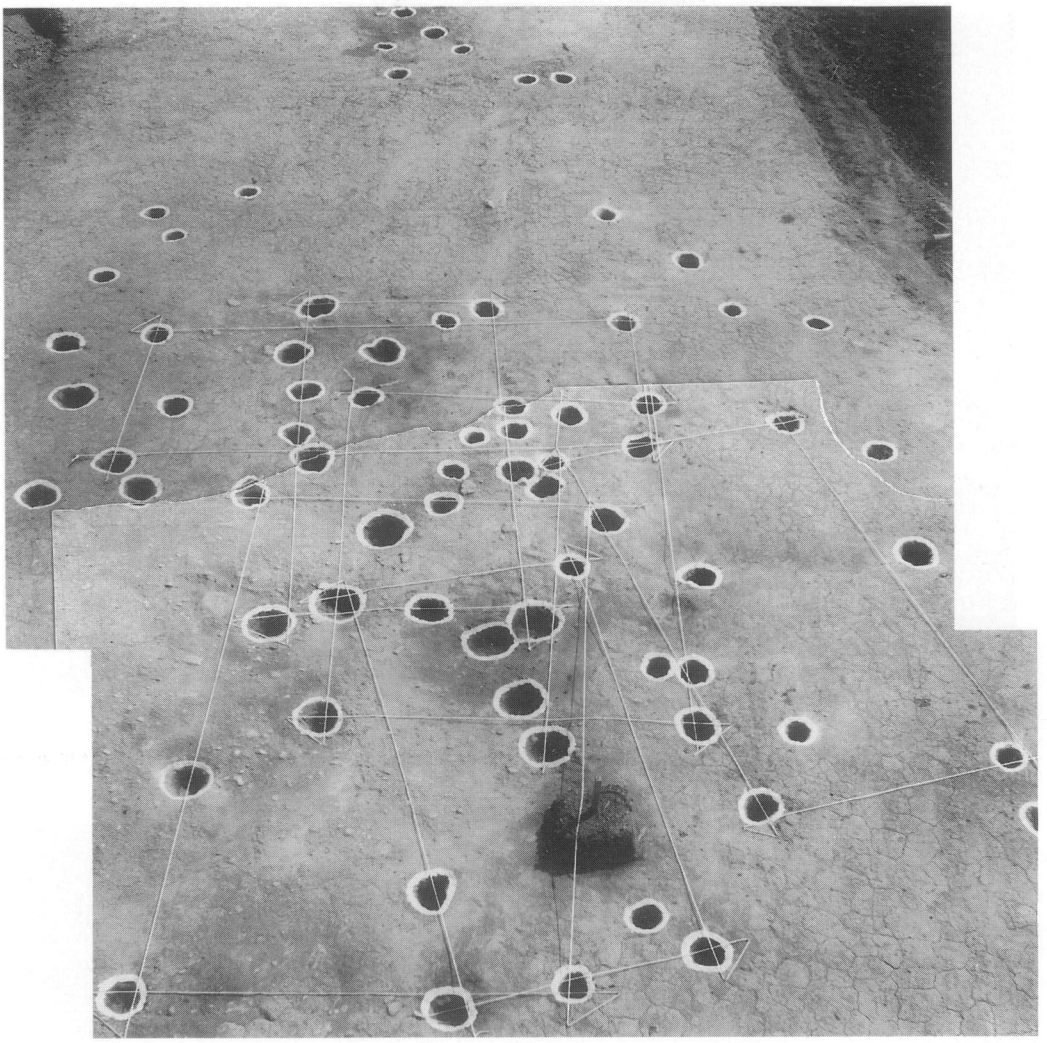
写真図版

図版 1

稲佐城跡航空写真(1)

稲佐城跡航空写真(2)

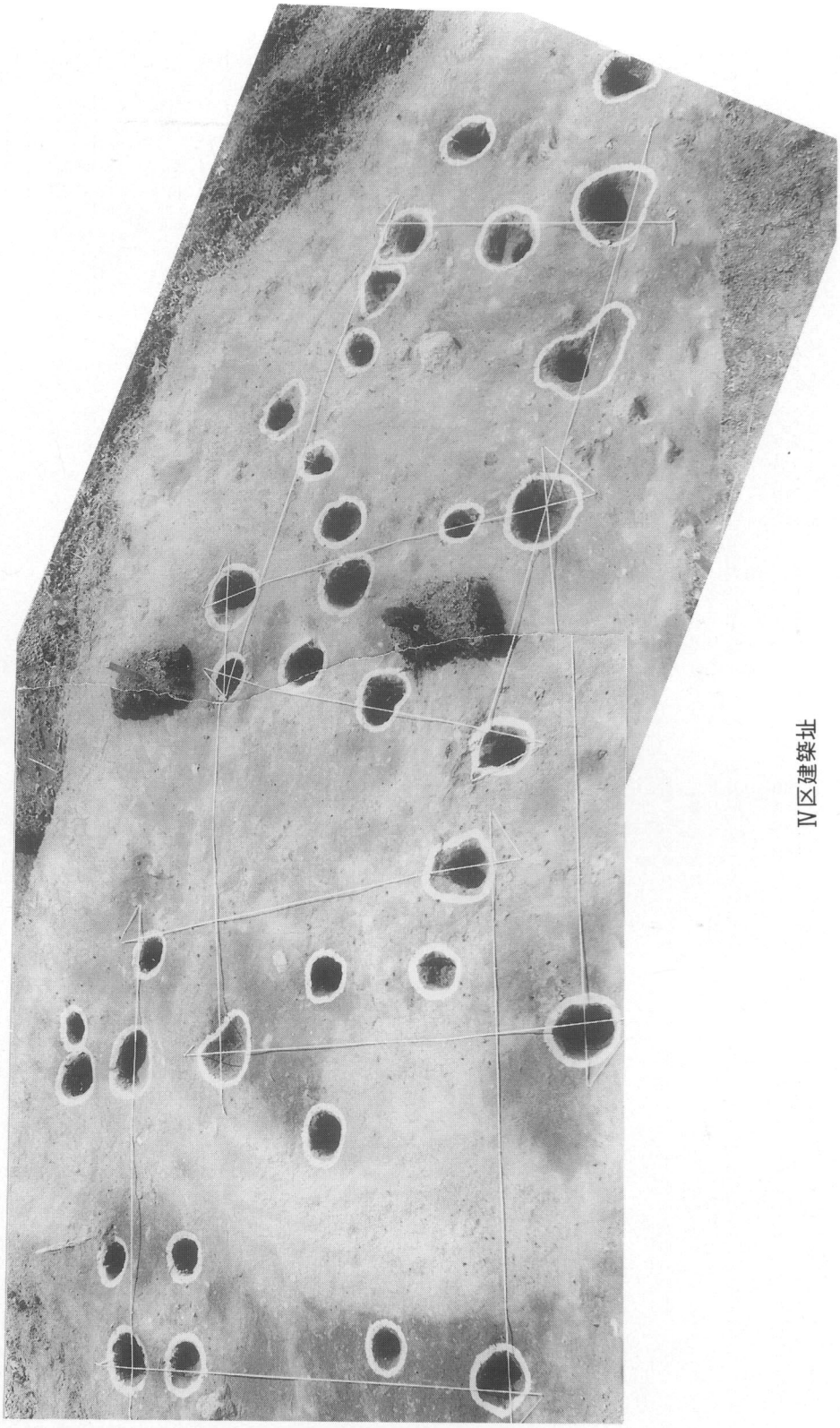
図版 2



Ⅱ区建築址

Ⅱ区及びⅢ区遺構

図版 3



Ⅳ区建築址

図版 4

Ⅳ区調査風景

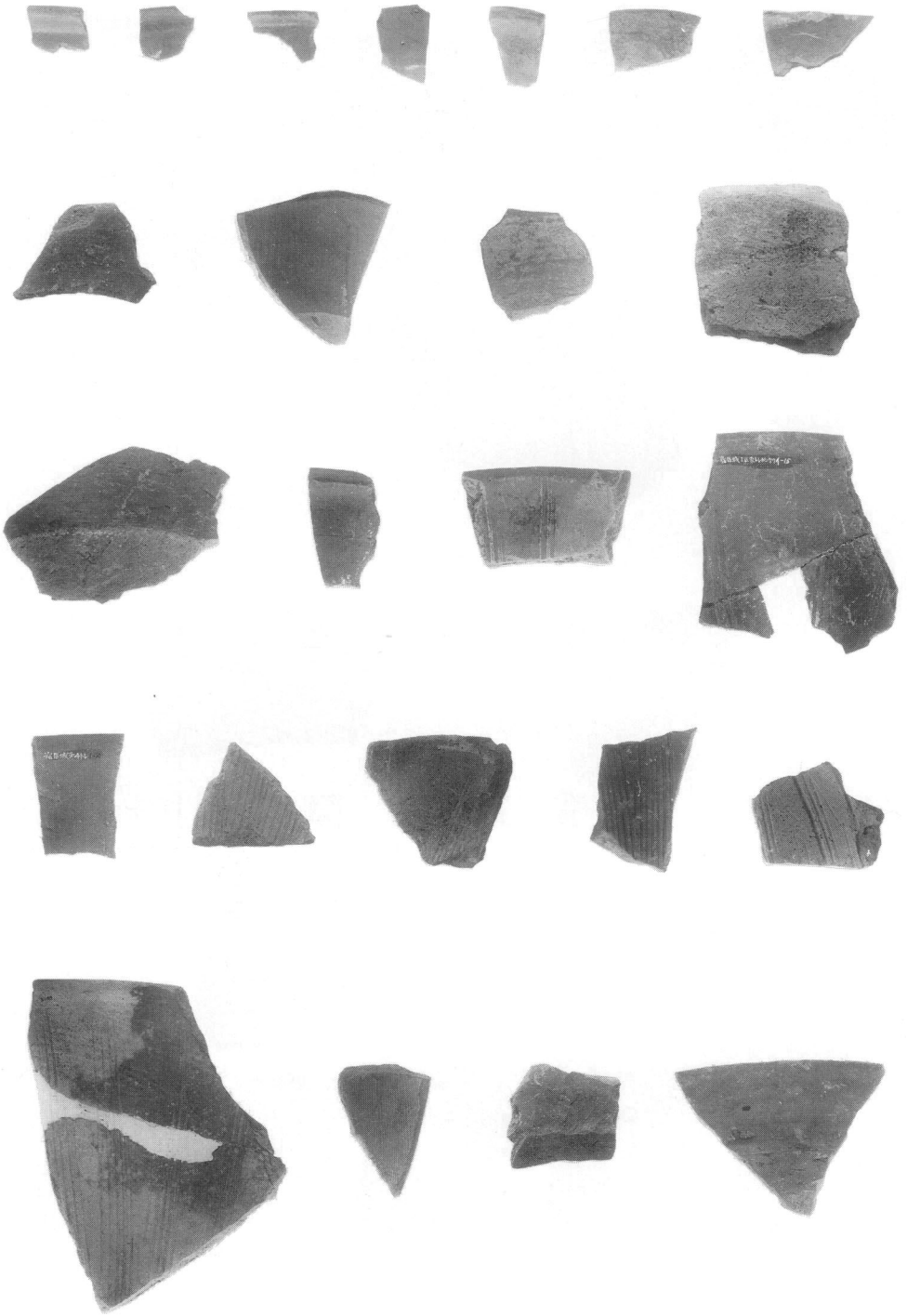
Ⅳ区遺構

図版 5

1トレンチ

5トレンチ

図版 6



出土遺物(1)

図版 7

出土遺物(2)

熊本県玉名郡玉東町文化財調査報告　第２集

稲　佐　城　跡

平成元年１月20日

編集
発行　**熊本県玉名郡玉東町教育委員会**
熊本県玉名郡玉東町白木１－１
〒869-03　　電話0968-85-3609

印刷　中央印刷紙工株式会社
〒860 熊本市田崎２丁目５－38
電話(096)354－4191

注意・本報告書の全部または一部を許可なく、無断で複製することを禁止いたします。